明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一日二十
大正元年八月廿五日印刷納本（五日印刷納本）

女子文壇

九月一日

第八年

第九號



（通卷第百十八號）

東京 女子文壇社發行

九月一日發賣

女子文壇社編輯局謹輯

御大喪案内記

先帝陛下、皇太后陛下
今上陛下、皇儲殿下
皇后陛下、伏見宮殿下
其他御名代宮 御尊影（美麗密刷寫眞）

中判形（縱六寸二分 横四寸二分）携帯至便

▲表紙……山中古洞畫伯意匠 彩色刷高尚美裝の冊子

▲總かな付 **定價金拾二錢**

▲特別割引

十部以上	壹割引
五十部以上	貳割引
百部以上	參割引

外に送費を要せず

本書は誠忠無二なる日本國民が先帝御大喪を紀念し奉るため出版す主なる記載の事項は○御大葬御行列。青山御葬儀。御大葬御道筋案内。桃山御葬儀。青山御葬場の事。當日の市中等御大葬に關することは細大洩さず通俗に説明し且先帝陛下の御聖徳を仰ぐ爲め御一代の偉蹟を簡約に書し奉る外。今上陛下皇后陛下の御盛德をも掲げ奉り別に○皇城一週便覽。電車便覽（地圖入）等を添へてありますから九月十三日御大喪拜觀者の是非とも携帯すべき至便の好冊子で。御大喪後と雖も紀念として永遠に保存するに足るのです。

出版元 東京市京橋區大鋸町十、十一番地（振替口座東京一七二九番） **女子文壇社**

◎どこの本やでも取次販賣致ます

女子文壇九月號（第八年第九號）目次

皇室と婦人

口繪

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋風の歌



（大江製版）

一にも三越二にも三越

三越といふ名は最上を意味す。苟くも三越と銘打つたものは、所謂三越式の特色を有せぬはあらじ。目下の必要品としては、

▼三越縮緬▲右撚り三本、左撚り三本、即ち三本越。普通撚縮緬に比しシボ細く、普通縮緬に比してシボに面白味あり。羽織地用、又は袷向として好評を博せり。

▼三越鉛筆▲一打二十錢、品質は舶來品に比して劣るなく、學生用、事務室用として知らる。

▼三越髷形▲極大より三番形まで大小種々あり。輕快にして上品なり。十七錢以上。一度之を用ゐは市中の髷形は用ゐ難しといふ。

▼三越樟腦▲約半ポンド七十錢、四分の一ポンド卅五錢。永く保ち、香よろしき理想的樟腦。

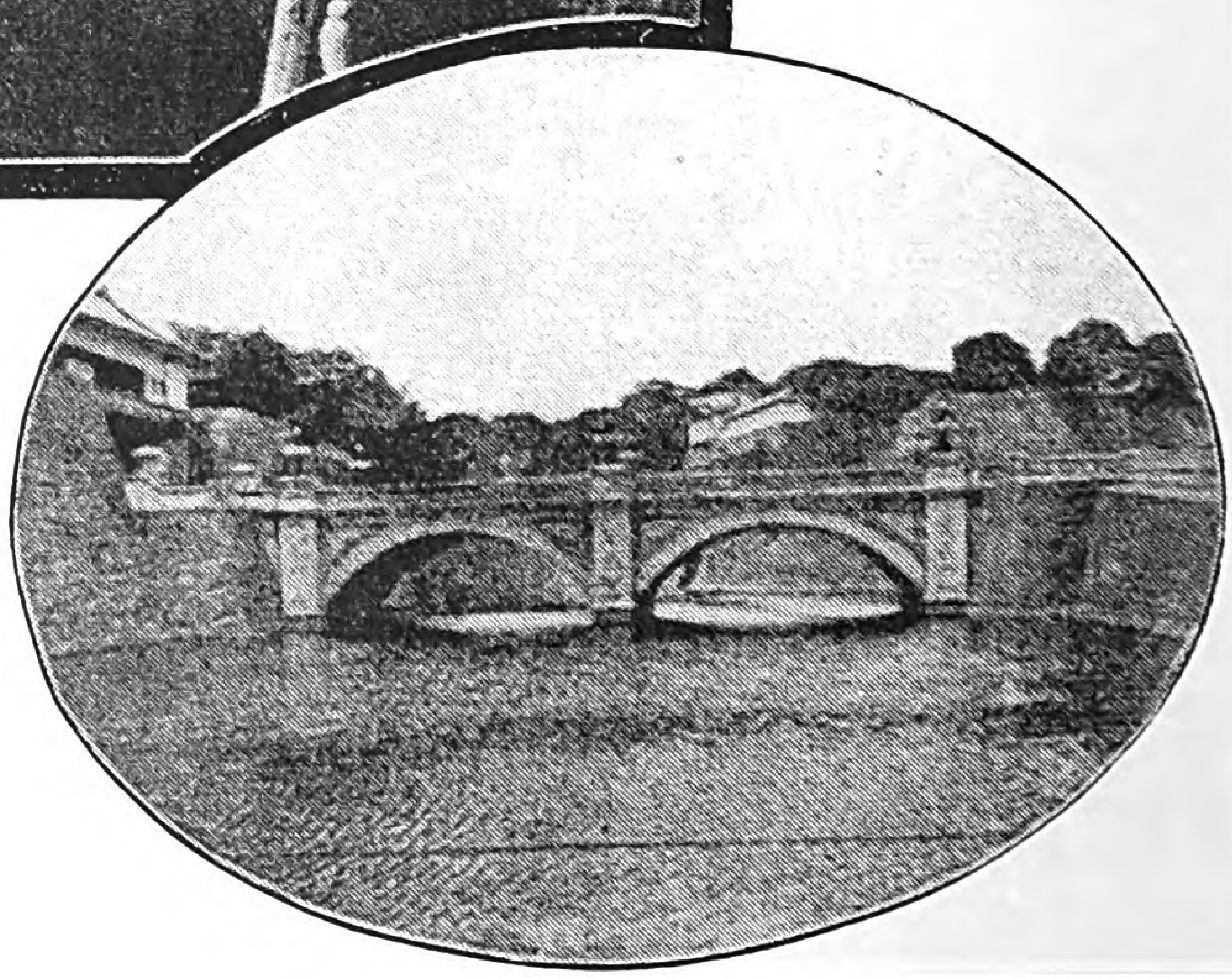
▼三越ヴ井ール▲三越一度ヴヰールを賣出してより、靡然として一世の流行となれり。一圓以上種々。

東京駿河町

三越呉服店



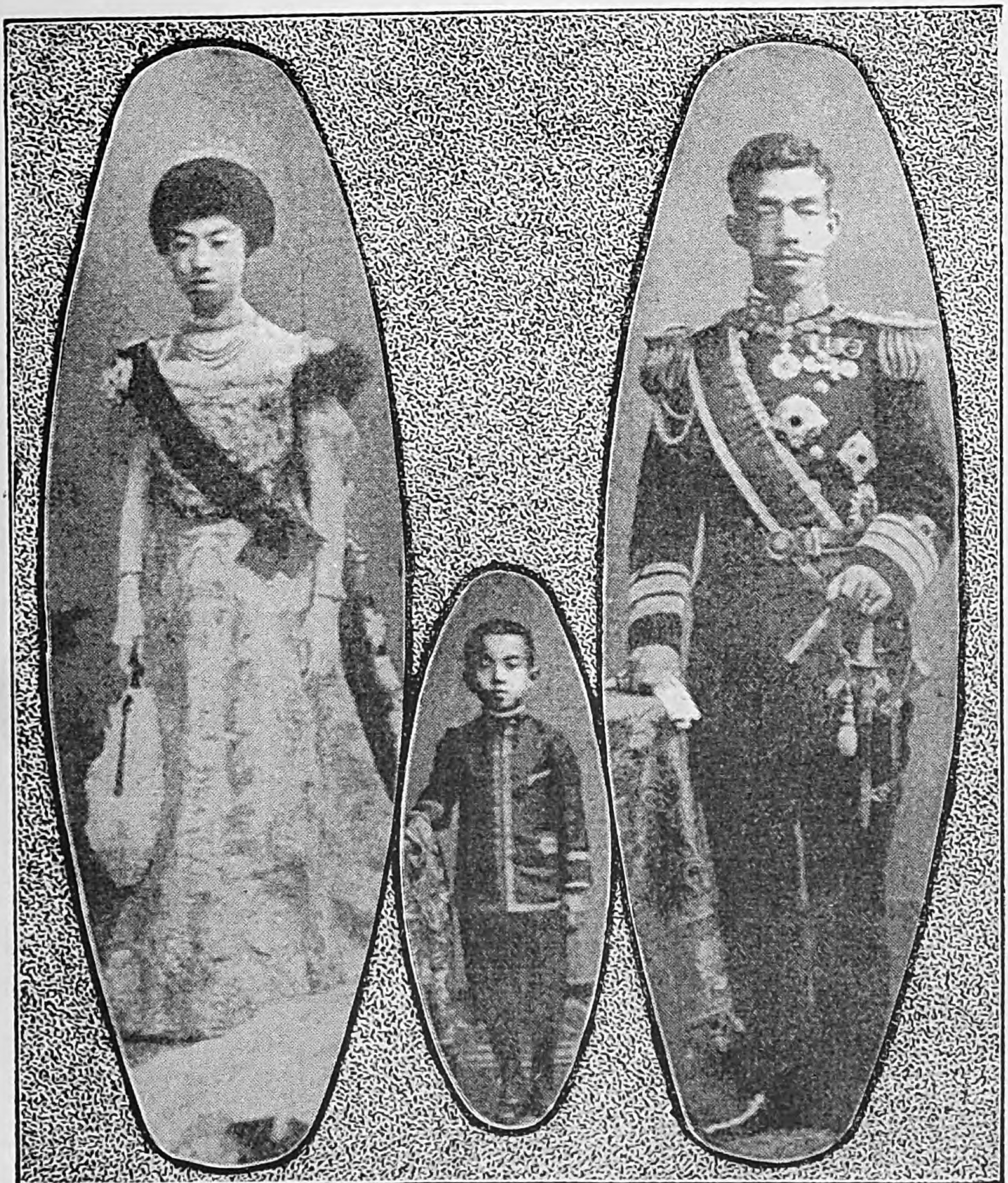
先帝陛下御尊影



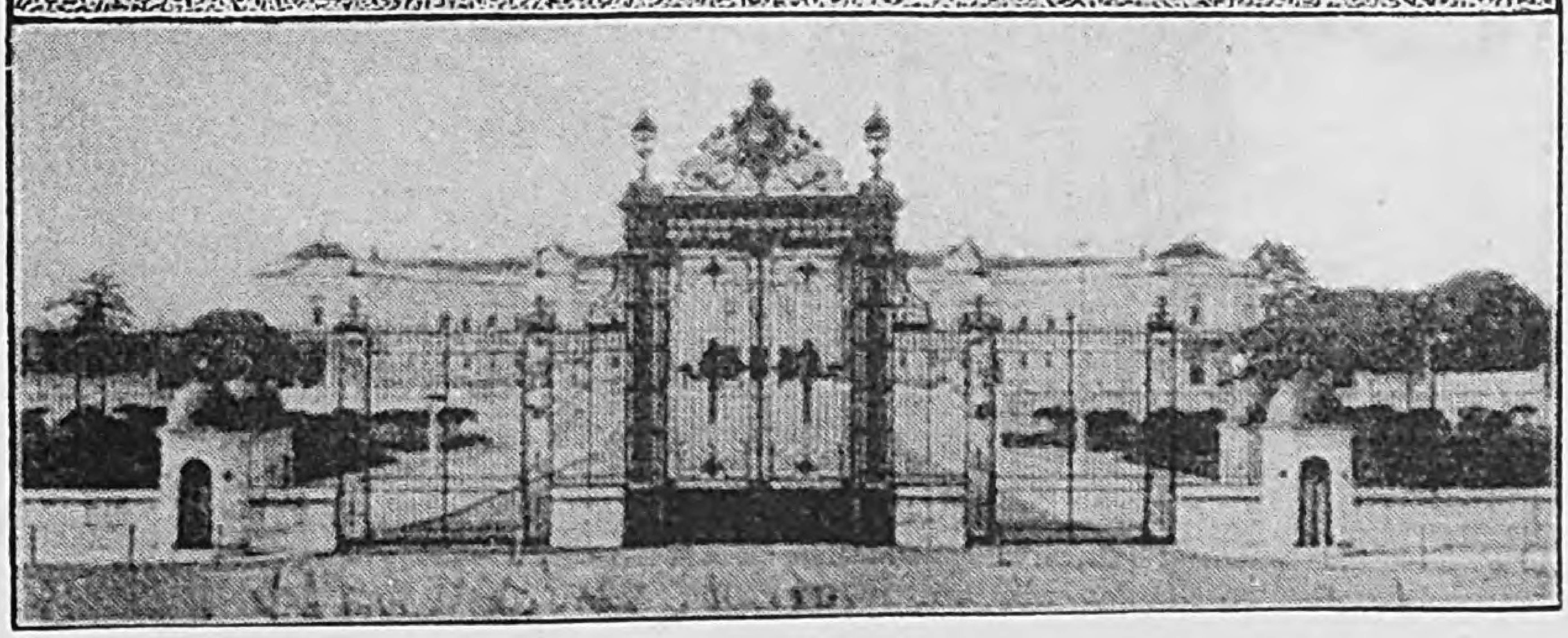
御尊影

今上陛下

皇后陛下



皇儲殿下



◀文字に現れたる娘時代の表情▶

女子文壇増刊

娘時代

二百頁美装
執筆者寫眞入
特價拾錢
郵税壹錢五厘

發行所　東京市京橋大鋸町　女子文壇社
【振替東京壹七貳九番】
賣捌全國各書店

温情



實業家朝吹英二氏令嗣榮吉氏の家庭



（前）



（後）

實業家日比谷平左衛門氏令嗣進次郎氏夫人道子

雁來紅

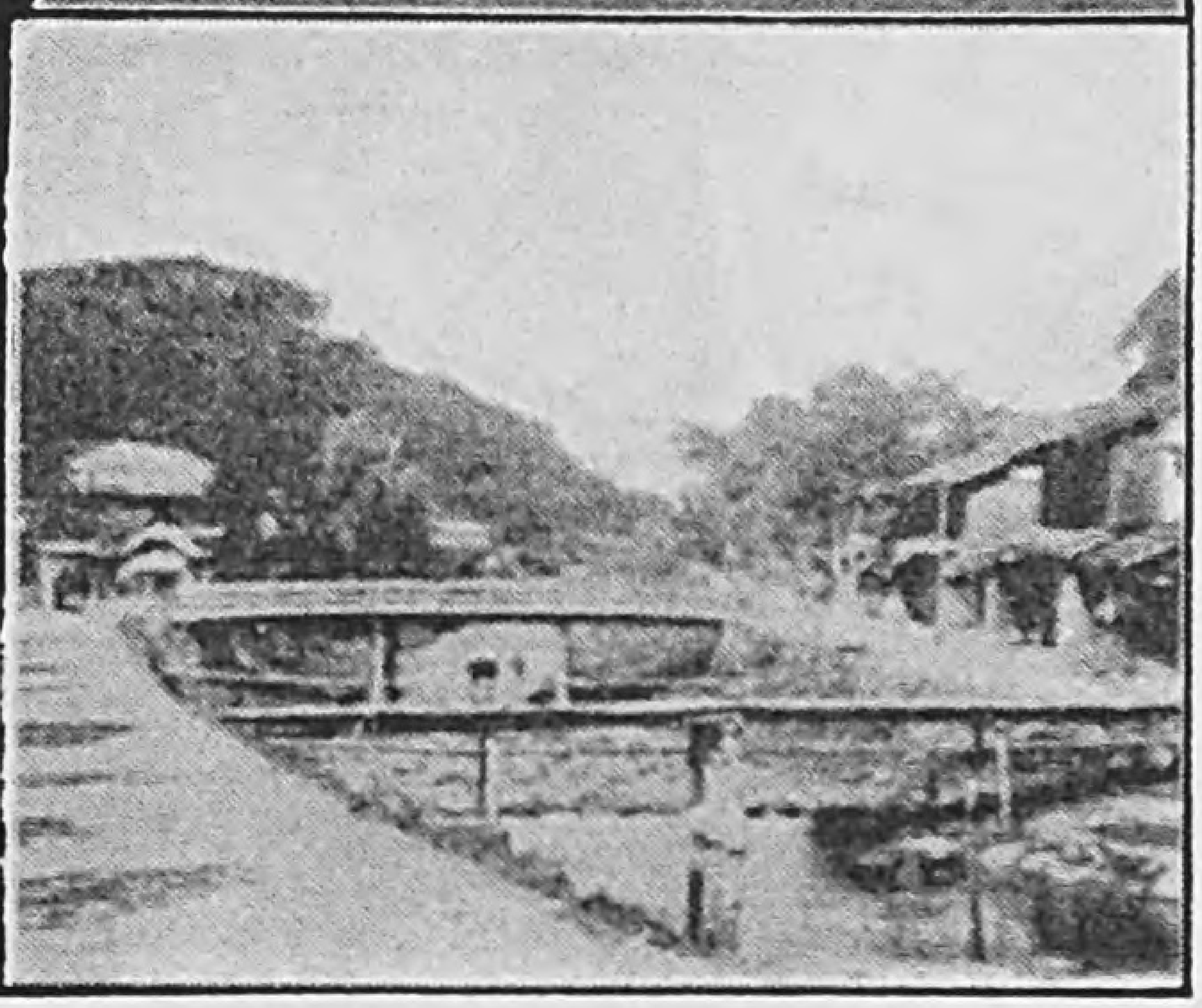




子爵水野忠美氏夫人米子



本山海軍少將令嗣夫人あや子

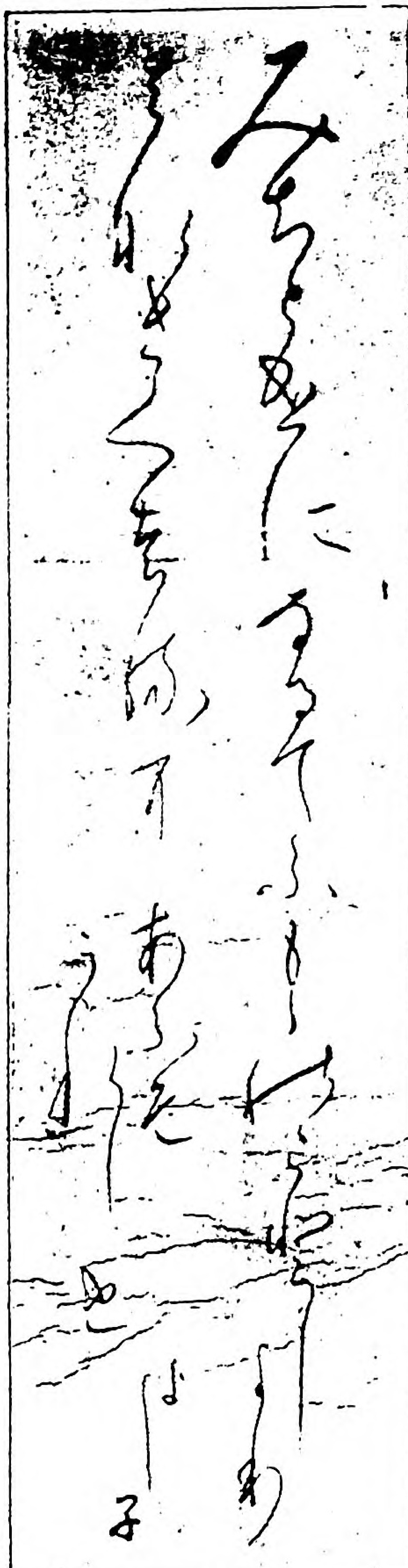


「字が上手」になりたい方は！

御婦人のたしなみの中で筆蹟が第一に位します。美事な筆蹟の方は何となく奥ゆかしく御人格のほども忍ばれますが、悪筆の方は自然他人から輕んせらるゝやうな風で非常に損です。今日の學校では習字の時間が少いから無理もありませんが、併し評判の高い專賣特許習字速成法で御練習になれば、どなたでも僅かの間に左の如き立派な能筆家になることが出來ます。殊に手本の書者は小野鵞堂先生であります で東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會宛に「ハガキ」電話下谷三三二一〇番）にて申込みになれば見本附規則書を無代で送つて參ります。

近頃類似の者があります御注意なさい。





本會五ケ月練習
岡山縣會員
矢島芳子君

少女

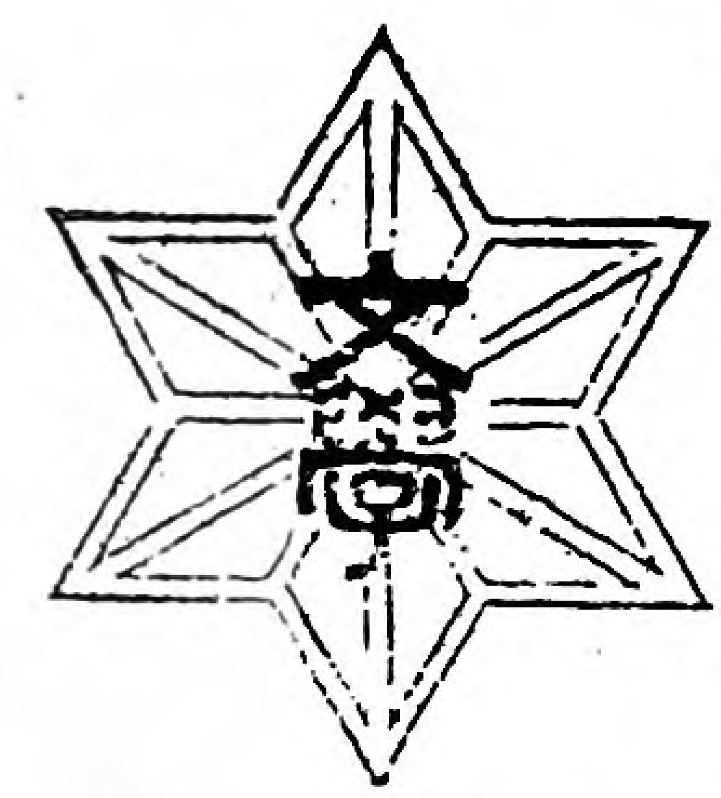
第一年第八號 定價十五錢

讀物

畫

東京麴町區飯田町四丁目四番地 發行所

文學講義錄



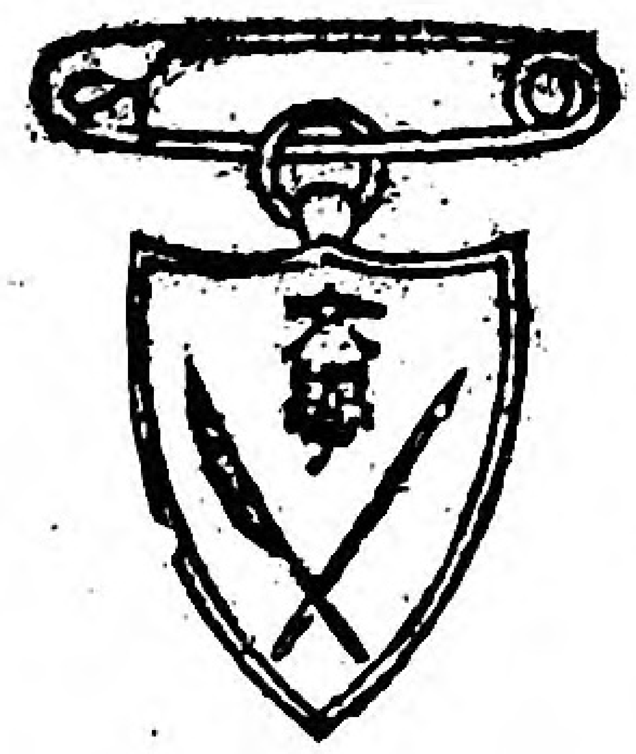
本會員帽章

第三回新學期開講＝此際入學者に限り種々ノ大特典を與ふ!!!

本會に入會すれば

本會員には大家の所論・會員の作品を講載し機關雜誌新文學無代進呈す◉本會員には文章其の他無料添削特典を與ふ◉本會員には各種の大特典を與ふ◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◉教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之れ本會員の常に多とする所なり

講義錄見本附き
無代進呈
規則書申込次第



本會員徽章

初等科卒業五ヶ月

教授科目

論文。小說。新體詩。和歌。俳句。書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例 雜科

高等科卒業五ヶ月

教授科目

近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇通論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百講。

東京神田西小川町
電話本局四五四十番
振替東京五二一九番

大日本文學會

蘭の花



安川幸子、阿部初子
安川隆子

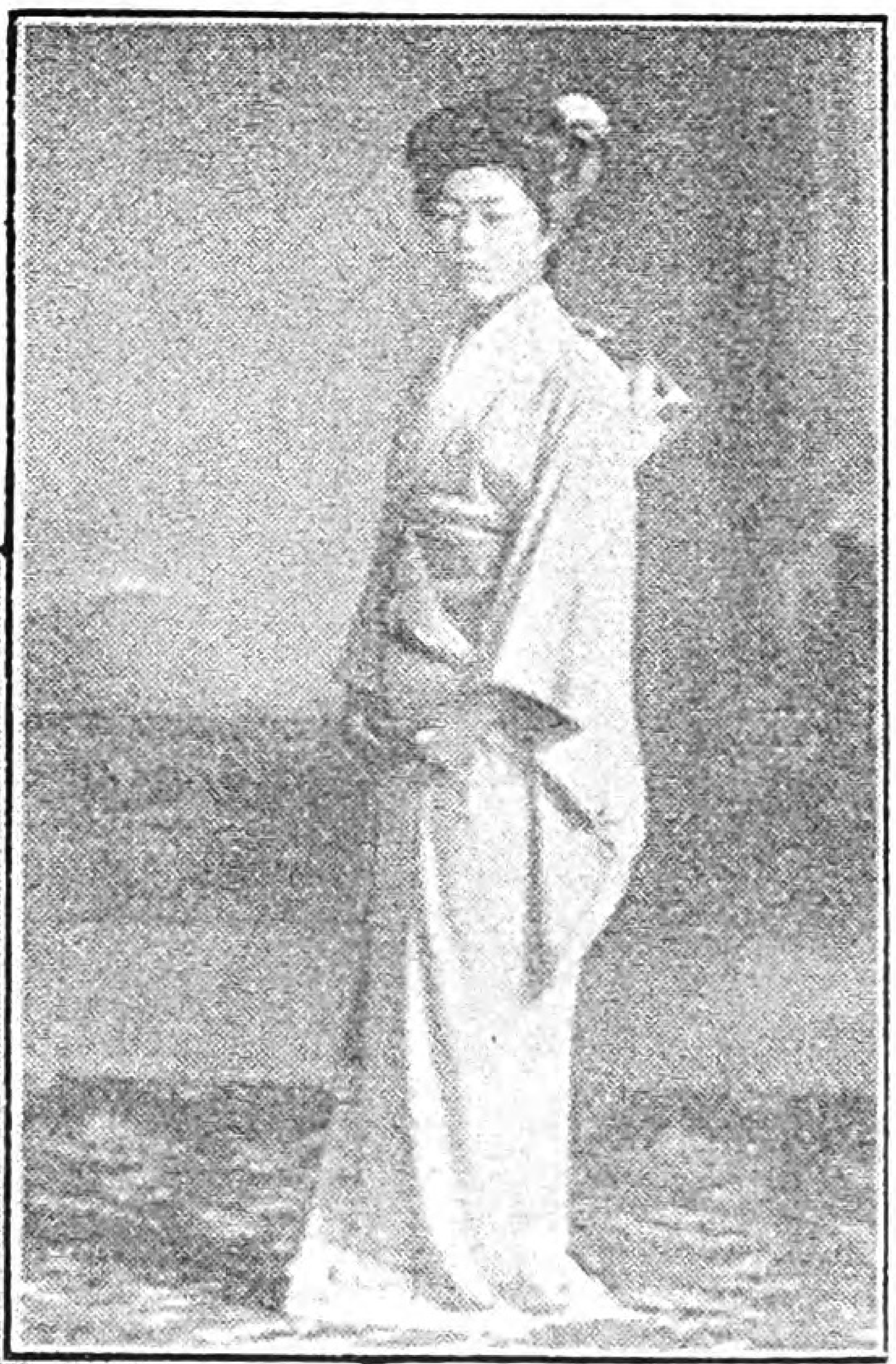


遠藤慶子



木下まゑ子、同谷子

紅芙蓉



井上貞子



君子

☞ 若き婦人の誇 ☜

女子文壇増刊 好評

新文章

紙数二百頁美装 特價拾錢 送料壹錢五厘

◎一呼吸

◎七色の虹

△生の斷片
△覺め際の淋しみ
△自ら警める記
△學生の都會
△初夏の人々
△寝息

○男子の手紙に迷ふ
○不縹緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◎轉宅 小説

◎淋しい道 小説

◎溫泉宿 小説

△梅雨日記
△姉の家
△心の離散
△黑き洋傘
△別れてゐる間

○兇ふべき時代
○年のあがはひ
○生立のつらさ
○解けし謎
○五月の水邊
○繪筆

◎課題
△顔 △髪 △浴場 △山 △海 △劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子 早川花子 長曾我部菊子 小川夢の女 小笠原ゆり子 太田喜志子 若杉はま子 河野楨子 加藤鐘子 高橋りう子 田中港の女 内藤千代子 野村きやう子 山田邦枝子 八代やゑ子 松田梅子 松田妙子 前島優梨子 松村うら子 月[illegible]子 江森美子 佐藤滴香子 佐分華影 木村あやの 夕はし 三宅やす子 三島よし子 平塚白百合 ひなげし 鈴木春子

●發行所 東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社 (振替口座第壹七貳九番) 賣捌 全國書店●

御婦人の寳



夏期御婦人方の大厄を救ふ物は此『安全帶』です！

ナゼなれば日々暑さを増し來りて、御召し物が薄らぎ行く「けふ此頃」、皆様が尤も苦に遊ばす月經時に此「安全帶」を御使用相成れば、極めて重寶便利で、且つ衞生上申分なく、殊に又如何程經水の多い方も粗相失策なさる御心配なく、、彼の恐るべき子宮病ヒステリー等に罹る憂もありませぬ、乞ふ續々御注文あれ（御購入者より禮狀山の如くあります）

本舖　東京下谷池ノ端七軒町四二（振替東京壹六九貳〇番）　**安全堂**

關西代理店　大阪阿波座上一（電車道角）（振替大阪壹壹四六壹番）　**洋々堂分店**

定價　一安全帶㊀甲壹圓廿錢㊁乙八拾錢㊂並五拾錢●各壹本で四五年使へ升●安全衣一打金四拾錢
一●内地送料壹組（帶衣共）金八錢、餘は一組毎に貳錢増し代金引換貳拾壹錢清鮮臺外國卅錢

◉空前の大好評◉

巖谷小波閲　小野美智子作

姉と妹の書簡

美本全一冊　金四十錢　郵税六錢

沼田笠峰序　溝口白羊編

現代少女書簡文範

美本全一冊　金三十五錢　郵税六錢

笠峰酔茗序　溝口白羊編

少女模範文集　正篇　續篇

美本全二冊　各三十五錢　郵税各六錢

◀圖書目錄進呈往復はがきにて御申越あれ▶

東京神田南乘物町　**誠文館**　振替東京六九九番

なでしこ





子爵岡崎國良氏令孃榮子、君子



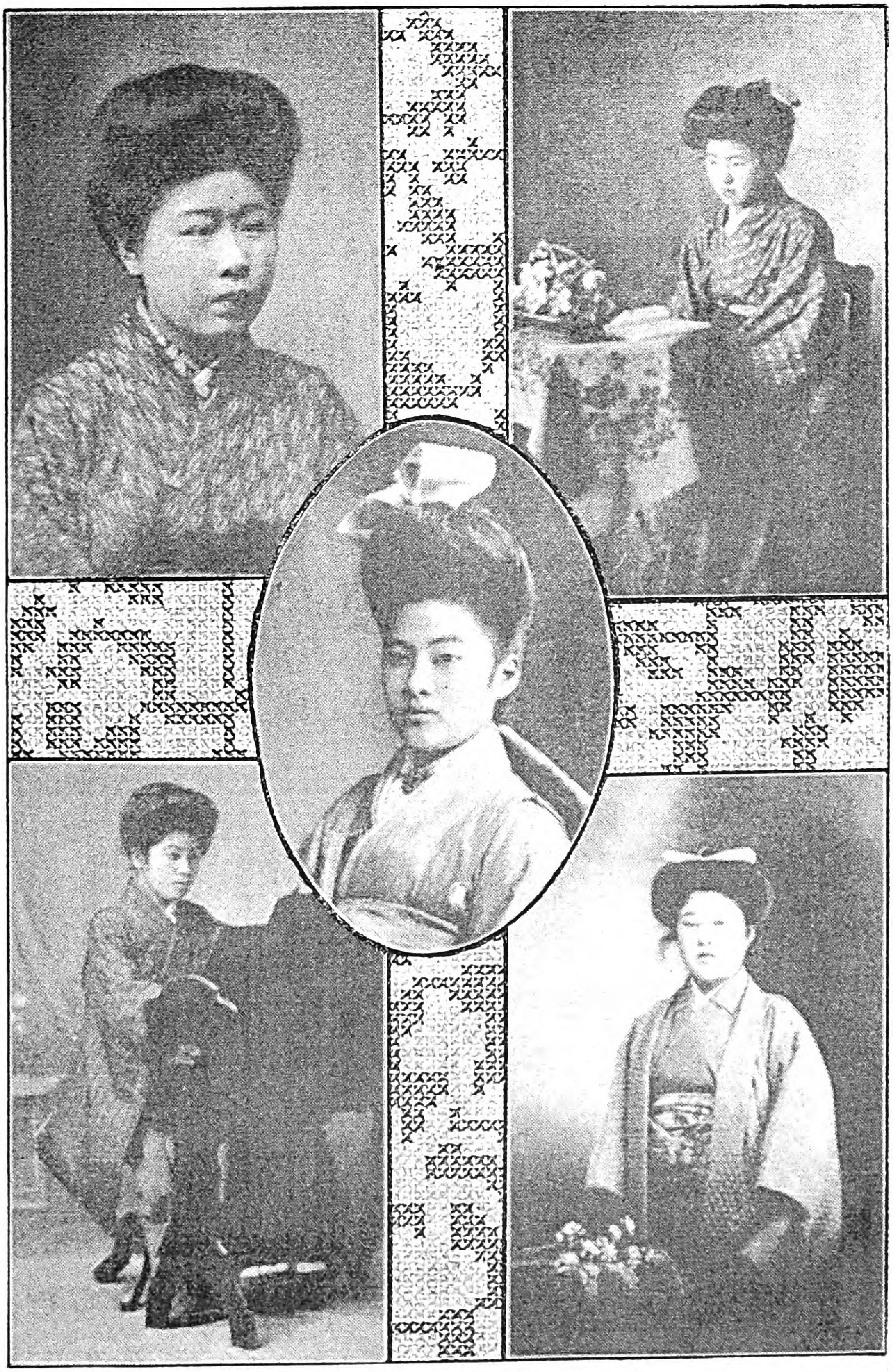
和田維四郎氏二令孃



しら露

小川清子

静谷夕星子



安宅さだ子

石川蘭渓子

湯本玉藻子

婦人

九月一日發行

九月の卷本號

畫報要目

御聖德の記念

● 大行天皇御野立
● 大行天皇御眞影
● 大行天皇御青年時代
● 大行天皇御宸筆
● 先帝の觀兵式行幸
● 皇太后陛下
● 今上天皇陛下
● 馬上の天皇陛下
● 皇后陛下
● 御成婚當時兩陛下
● 皇儲廸宮殿下
● 兩陛下御參内
● 桃山御陵地

● 典侍高倉壽子の君
● 典侍柳原愛子の君
● 權典侍千種任子の君
● 權典侍園祥子の君
● 權典侍姉小路の君
、薮、北島、樹下の君
● 先帝御幼時の玩具
● 先帝御誕生地祐井
● 先帝御料紙入矢立
● 愛國婦人會奉悼式
● 明治初年と今日の二重橋
● 先帝御幼時の御筆蹟
● 先帝御料の能人形
● 先帝御使用の御煙草盆
、先帝御使用の御食器
● 御足袋扉子香茶箱煙管
● 枕包裂地御機巻裂地
● 先帝ノ御洋服と御和服
● 其他先帝御使用の御器
● 具美術品
、等誌上

滿載す

● 夢路 高村眞夫筆 二頁大三色版
● 伊達伯爵夫人と令息
● 小澤男爵の家庭

東京市麹町區飯田町四ノ四
振替口座東京一一八一八

東京

畫報

に限り

定價三十八錢 郵税二錢五厘
六冊 税共 一圓五十三錢
十二冊 税共 二圓九十四錢

讀物要目

▼嗚呼先帝陛下
▼今上陛下御踐祚
▼先帝の御製 坂正臣
▼先帝の御逸事
▼諒闇中の婦人 井上博士
▼内容ある生活 下田次郎
▼病人訪問 鳩山春子
▼世界で最も便利な臺所 佐藤學士
▼女中を使はぬ工夫 嘉悦孝子

▼秋の座敷の飾方 杉本文太郎
▼歐洲より 與謝野晶子
▼西洋料理の食べ方 笹木雪子
▼恰好よき着物着方
▼五十錢會 N學士
▼伯爵世嗣貞子の君 ゆかり
▼虫干は今 井上秀子
▼女流作家と少女
▼病氣と常識 榊博士

●閑院宮殿下桃山御踏查
●土方伯拜領の御物
●高崎名和兩男子拜領
●陛下御病中の二重橋前
●琉球女教師觀光●女學校の奉悼式●鍋島侯爵の家庭●令孃鑑等●寫眞七十二頁

社

電話番町二三三九番
各地到る處の書店に在り

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリー貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黒き男女にても平素之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次肉體白色となり肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物も治し艶美の容貌となる効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分貳劑を試みよ偉大なる奇効完全に顯る價並製壹劑壹圓廿錢特別製壹劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國及墺國輸入二種の全身清血劑にて飲んで體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし完全に肉色を白色艶美ならしむる奇効顯著藥なり價英國製壹劑貳圓九拾錢墺國製壹劑壹圓九拾錢双方併用せば偉大の奏効容易に顯る着金即刻送藥す

腋臭必治劑

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる斯病唯一の理想的卓効新藥なれば他藥にて全癒せざる患者は早く試み病原を去り苦惱を脫せよ難重症は特別製を用ゆれば完全著効を奏す藥價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓卅錢小包密送

（奇効顯著）

（最新發明藥）

あざ 及入墨 ほくろ そばかす。なまづ。いぼ

を美醜に除去すること著効ある新藥なり患部の大小輕重を問ず容易に治癒し假令顏面たりとも痕跡を殘さず除去し得らる但し其製劑を二種に區別し一はあざ。入墨。ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の寸方を明記し申込あれば其症に適應する藥を撰定送付す價は各試用劑壹圓拾錢小劑參圓拾錢中劑五圓拾錢大劑拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻送藥す

月やく通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とまりを容易に通經す長き滯り及び血塊には特製分を用ひよ極安全に快通流經す且つ月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み偉大なる特効を知られよ近時無効類似僞藥多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢特別製分貳圓卅錢郵券代用貳割増し

婦人病の福音

本劑は最新の學理と多年の實驗とにより發見せられたる婦人病藥唯一の靈劑なるを以て頑固なる月經閉止及血塊抔と稱へ永年經水なきを快通流下するは勿論月經不調に基因して續發する逆上頭痛眩暈腰或は子宮に痛ある人腹腰子宮部の痙攣等に用ひ偉大なる卓効顯著なり早く試みよ

（奇効顯著藥）

毛生新藥

本劑（藥名ヘアーグロース）は多年研究實驗の結果發見したる毛髮發生藥なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脫毛する人頭髮及はゑぎわの薄き人陰部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髮早々と發生する特効あり本劑は世にありふれたる種々雜多の毛はへ藥とは其効大に異なるに付幸に玉瓦混同視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢特別製分五圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増しの事

やせる藥

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特製九圓拾錢

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる唯一の痩身劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく脂量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其偉大なる特効を知られよ

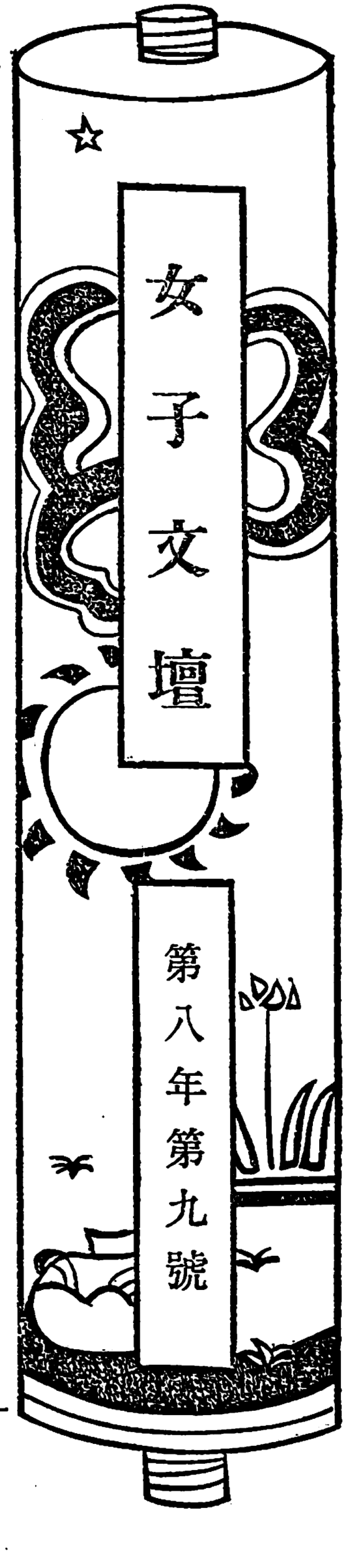
以上七藥專賣

東京市神田區五軒町十九番地

日新館藥房

電話下谷五百四拾六番

振替東京壹九貳四六番



新時代

時維、紀元二千五百七十二年七月三十日、天皇大詔を降して、明治の年號を大正と改めさせ給ふ。改元のことは皇室典範の定むるところ、皇位繼承と共に國家の大事たり。

上、一天萬乘の　聖上陛下より下、六千餘萬の庶民に至るまで、此日此時以後大正の時代に入れり偉なる哉、時代の一轉、明治の時代は分秒の間隙もなく、大正の御代に移れり、新しき歷史の第一頁は茲に啓け、帝國の國運は茲に伸張す、嗚呼多幸なるかな。

諒闇

申すも畏れ多い事ながら、明治の天皇陛下には七月三十日午前零時四十三分御崩御遊ばされた、愁雲低く大内山の空に漂ひ、天日も爲に光を失ふかとばかり、億兆の國民は悲哀慟哭して諒闇に籠つてゐる、之より前、天皇御重態の御模様を日に幾回となく承る度に、上下一人として御惱の薄らぎ奉るを祈らざる者なく、神に祈り、佛に念じ、御膝元の市民は老幼男女の別ちなく晝と云はず夜と云はず二重橋畔の淸砂に額を埋め涙を呑みて其御平癒を祈り奉つた、天皇は神に在せど、人體を受けさせたまへば聖壽の極るところ、人間の力の如何ともなし難く、とこしへに神去りたまひ、聖壽六十一歳を以て明治の御代は終つた。

大行天皇は孝明天皇第二の皇子に在まして、嘉永五年九月二十二日（陽曆十一月三日）を以て御降誕遊ばされた、慶應三年正月九日、御年十六にして天皇の御位に卽かせられ、明治二年東京を以て皇居と定めさせられた。天皇御一代の大業は王政復古を初めとし、二十七八年の役、三十七八年の役には國威を世界に輝かせ、近くは朝鮮を國土に併せて、我國開闢以來の大業を成し遂げられた、而かも陛下は仁慈の聖德に富ませたまひ、日夕の御製にも下を愍みたまふ大御心は、雨の如く繁く、露の如く甘し、嗚呼此古今に稀なる聖帝、世界に類なき大帝、今や殯宮に神鎭まりたまひ、靈は人天を隔てたまふ、茲に草莽の一微臣、五萬の讀者を代表し、謹んで哀悼の衷情を在天の靈に告げ奉る。

踐祚

皇室典範第十條の　天皇崩ずる時は皇嗣卽ち踐祚し、祖宗の神器を承く、この明文に由り、皇太子嘉仁親王殿下、七月三十日午前一時を以て、御踐祚あらせられた、時に賢所に祭典を行はしめられて御踐祚を奉告遊ばされ、同時に宮中に於て劍璽渡御の御儀式、嚴肅に行はせられた

今上天皇陛下は、先帝第三の皇子に在まして、明治十二年八月三十一日午前八時十二分御降誕遊ばされ、明治二十二年十一月三日皇太子に立たせられた、陛下夙に御孝心深く、先帝の大御心を安んじ奉ることを專らと遊ばされた。今や御內心には限りなき御哀傷を包ませたまひ、外は御大喪中の萬機親裁の務に當らせたまふ、大御心のほどを恐察し奉るに恐懼の外はない、然れど吾大日本帝國の天津日嗣の御位は、天壤と共に窮りなく、億兆之を推戴し、神明之を擁護す、嗚呼尊い哉。

今上天皇陛下、御踐祚と共に、東宮妃殿下は、皇后陛下とならせられた。陛下は、故從一位公爵九條道孝卿の第三女に在して、明治十七年六月二十五日御誕生遊ばされ、明治三十三年五月十日、御年十七歲にして御入輿遊ばされた。

英照皇太后御在世の折、一方ならず陛下を愛でさせたまひ、屢々御懇ろなる御敎訓を給ひしと承る、陛下幼きより御聰明に渡らせたまひ、學藝は和漢洋とも優れて御成績めでたく、妃殿下とならせたまひて後、一入婦女の道を正しく守らせられた、今や帝國の　國母陛下とならせられ、其御德のいや高きを仰ぎ奉る。

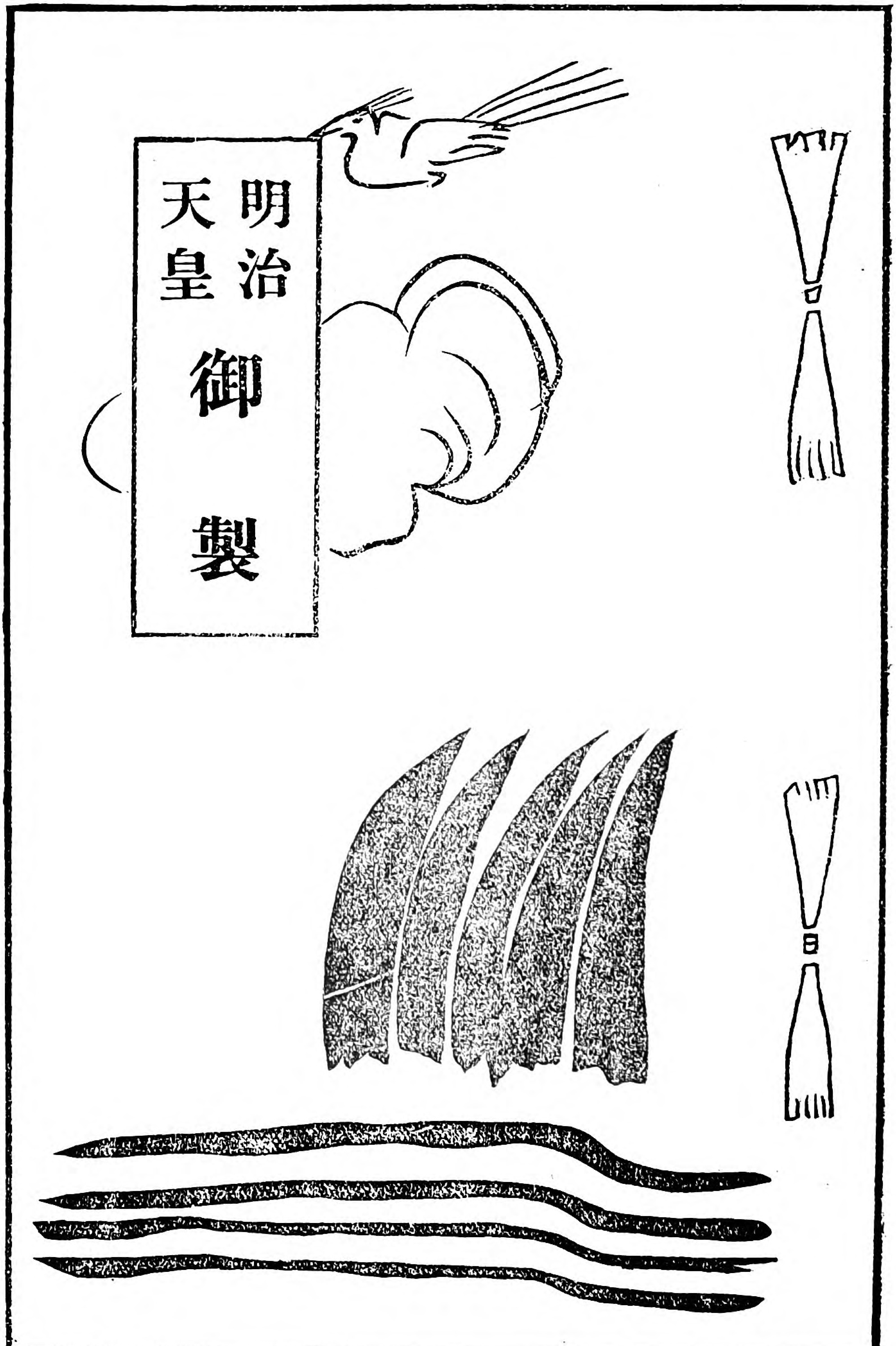
攀髯の歌

虎壽

懸まくも　忌しきかも　言はまくも　綾に畏てき　日の御子　わが王は　神ながら　人にし在せば　世を憂しと　思ほし召せか　山城の　宇治の川上　桃山の　城の上の丘に　常宮を　領したまふと　巖隱かくりたまへば　高麗百濟　蝦夷の北より　高砂の　南にかけて　宿を　刺すを厭はぬ　淺ましの　山兒より　流れに　裳裾褰げて　衣濯ぐ　賤女より　老たるは　杖投捨　幼きは　地に倒れ　駕ませる　龍の髯をば　攀れど　顧まさず　泣いざち　蹉跎すれど　低徊　立たせたまはず　忌しきかも　わが王

古の　草深大野　无指なる　千代田の城に　日の御門　奠めたまひて　成を　國中に布かし　照日の　天が下をば　掌に　握らせたまひ　肇國知ろす　錦の旗の　朝虹と　耀ふ下に　頸つつい　劍を佩し　四海國を鎮護の　御軍を　麾ぎたまへば　「山行かば　草むす尸　海行かば　水漬く尸」　と氷雨降る　鷄林に吼號ぶ　虎をも狩りき　御船浮く　對馬の海門に　降はぬ　蚪も斬りき　忌しきかも　わが大君

御垣守　衛士の火絶えて　鼯鼠の　出沒しげく　驅通る　馬の足音と　草摺の　觸るゝ響と　流矢の　御階に飛ぶと　投交す　童等が礫と　南殿の　小簾を通せし　室町の　疇昔想へば　玉敷　內外の宮　九重の、御門の光　わが君は　千代に在せと　彈琵く　嬰兒を歌へれ　殯、梓の宮ゆ　輀車、軋り出れど　飴簾　位牌額は　角垂れて　大路を行けど　遏密の　八の樂音　常暗と　世はなりぬれば　現人神　君も終にと　思へば　聞の畏てく　のこります　きさいの宮の　「君一人　此山陰に　送りおきて　還るあはれを　何時か忘れむ」　何日か忘れむ　畏てかれども


明治天皇
御製

とこしへに民安かれといのるなるわが代を守れ伊勢の大神

橿原の遠つみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

さし昇る朝日の如くさはやかにもたまほしきは心なりけり

かみつ世の御代の掟をたがへじと思ふぞおのが願ひなりける

いにしへの文見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

夕やけの空のけしきぞうるはしきみどりはてなき松原のうへに

我心およばぬ國のはてまでもよるひる神は守りますらむ

うけつぎし國の柱の動きなき榮えゆく世をなほいのるかな

朝つくひ豐榮登る山松の梢をしめてたづぞなくなる

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日の本の國

やまのはにかゝれる雲もはれそめて昇る朝日のかげのさやけき

さだめにしその初めより葦原の國の榮えは神まもるらむ

もろともにたすけあひつゝ國民のむつびあふ世ぞたのしかりける

いはとあけし神代おぼえて山のはを出づる朝日のかげぞまばゆき

國の爲あだなすあだはくだくともいつくしむべきことな忘れそ

天をうらみ人をとがむることもあらじわがあやまちを思ひかへさば

四方の海みなはらからと思ふ世になどなみかぜの立ち騒ぐらむ

うつせみの世のため進むいくさには神も力をそへざらめやは

大八洲みいつくしみの廣き世は波のちさともとなりなりにけり

國民の一つ心につかふるもみおやの神のみめぐみにして

ますらをに旗をさづけて思ふかな日の本の名をかがやかすべく

くもりなき人の心をちはやぶる神はさやかにてらし見るらむ

白露の風にこぼるゝかず見えて朝日すゞしき竹の下いほ

目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけれ

昔より流れ絶えせぬいすゞ川なほ萬世もすまんとぞ思ふ

鬼神もなかするものは世の中の人の心のまことなりけり

今の世に思ひくらべていそのかみふりにし文をよむぞたのしき

ちよろづの民よ心を合せつゝ國に力をつくせとぞ思ふ

あし原のみづほの國の萬代も亂れぬ道は神ぞひらきし

國民は一つ心にまもりけりとほつみおやの神の教へを

わが園にしげりあひけり外つ國の草木のなへもおほしたつれば

進みたる世に生れたるうなひにも昔のことをまづをしへなむ

傳へきて國の寶となりにけりひじりの御代のみことのりぶみ

大空にそびえて見ゆる高根にものぼればのぼる道はありけり

よきをとりあしきを捨てゝ外つ國におとらぬ國となすよしもがな

開けゆく時にいよ〳〵仰がれぬひじりの御代の高き敎を

國といふ國のかゞみとなるばかりみがけますらをやまとだましひ

ふむ人はあまたあれどもことの葉の道のたかねはたれか踰ゆらむ

わけばやと思ひ入りぬる道にこそ高きしをりも見えそめにけれ

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

天つ神開きましけれわが國の道には惑ふ人なかりけり

うち向ふたびに心を磨けとや鏡は神のつくりそめけん

榊葉にかけし鏡をかゞみにて人も心も磨けとぞ思ふ

あたしのにいざ輝かせますらをがとぎすましたるたちの光を

きたひたる劍の光いちじろく世にかゞやけるわがいくさ人

ますらをがつねにきたひし劔もて向ふしてらをなぎつくすらむ

曇りなき心の底の知らるゝは詞の玉の光りなりけり

思ふことつくろふこともまだ知らぬをさな心のうつくしきかな

冬深きねやのふすまを重ねても思ふは賤が夜さむなりけり

てるにつけ曇るにつけて思ふかなわが民くさの上は如何にと

あさ煙りたちそふ末に知られけり民のなりはひすゝみゆく世は

賤かすむわらやの山を見てぞ思ふあめ風あらき時はいかにと

桐火桶かきなでながら思ふなるすきまおほかる賤が伏屋を

白露のおきふしごとに思ふかな民の草葉のさかゆかむ世を

夏の夜もねざめがちにぞあかしけり民のなりはひすゝみ行く世は

暑しともいはれざりけりにへかへるみづ田に立てるしづを思へば

あかつきのねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかゞあらむと

富士の峰も遙かに見えてあしたづの立ち舞ふ空ぞのどけかりける

苔むせる岩根の松の萬代も動きなき世は神ぞ守るらむ

動きなき秋つ島根の岩の上に萬代しめて龜はすむらむ

深みどり色もかはらぬ松が枝の常磐堅磐の末いはふなり

ほとゝぎすなく一聲のうれしさにいまみし夢を忘れけるかな

天の下にぎはふ世こそ樂しけれ山の奥まで道のひらけて

山を拔く人の力もしきしまのやまと心ぞもとゐなるべき

淺みどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

賴もしき何にはあれども戰にうたではやまぬ大和魂

あし原の國富まさむと思ふにもあをひとぐさぞたからなりける

末つひにならざらめやは國のため民のためにとわが思ふこと

むらきもの心を種の敎へ草おひしげらせよ大和島根に

曇りなき心の底の知らるゝはことばの玉の光なりけり

時はかる器のはりのともすればくるひやすきは人の世の中

時はかる器は前にありながらたゆみがちなり人の心は

大空にそびえて見ゆる高ねにも登れば登る道はありけり

とる棹の心ながくぞこぎよせむあしまの小舟さはりありとも

雲の上にたち榮えたる山松の高きにならへ人の心も

ともすればかき濁しけり山水の澄ませばすます人の心を
つく杖にすがるともよしおい人の千歳の坂をこえよとぞ思ふ
雲霧もかゝらざりけり大空に今夜も滿てる月の光りに
天地も動かすばかり言のはのまことの道をきはめてしかな
言の葉の上にゝほひて床しきは人の心の花にぞありける
思ふこと思ふがまゝに言ひいづるをさな心や誠なるらむ
日にそへてけしきやはらぐ春の風四方の草木にいよゝ吹かせむ
ちはやふる神の心にかなふらむわが國民のつくす誠は
思ふにはまかせずとても人心平らかにこそあらまほしけれ
眞心を限りなき世にとゞむるもやまとことばのいさをなりけり
隔てなくかゝる惠みの露こそは青人草のくすりなりけれ
子を思ふ夜半の烏のいねがてにあくるおそしと鳴きわたるらむ
前になり後になりて雛まもるたづの心のあはれなるかな
こらは皆いくさのにはに出ではてゝおきなやひとり山田もるらむ
もの學ぶ道に立つ子よ怠りにまされる仇はなしとしらなむ

いさをある人を教の親にしておほしたてなむ大和なでしこ

國の爲斃れし人を惜むにも思ふは親の心なりけり

世と共に語り傳へよ國の爲いのちを捨てし人のいさをを

靜かにも世は治りて歡びのさかづきあげん時ぞまたるゝ

つはものゝ心と共に乘る駒も疲るゝ知らでいやすゝむらむ

いかならむ藥すゝめて國の爲いたでおひくる身をば救はむ

よしあしを人の上には言ひながら身をかへり見る人なかりけり

目に見えぬ神にむかひて愧ぢざるは人の心の誠なりけり

轡うたばもみぢの枝にふれぬべし駒をひかへむをかでえの道

我心いたらぬくまのなくもがなこの世を照らす月の如くに

今はとて學びの道に怠るなゆるしの文を得たるわらはべ

竹馬に心の乘りててならひにおこたりし日を今思ふかな

雪にたへ嵐にたへし後にこそ松のくらゐも高く見えけれ

器には隨ひながら巖をもとほすは水の力なりけり

よりそはむひまはなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなむ

星のとぶ影のみ見えてなつの夜もふけゆく空はさびしかりけり

くろがねの船もたやすく動かしてつよきは水の力なりけり

植ゑおきし庭の呉竹よゝを經てかはらぬ色のたのもしきかな

庭草に水そゝがせて月をまつ夏の夕はおもふことなし

涼しくも月の光になりにけり波のあらひし濱のまさごぢ

富士のねに匂ふ朝日もかすむまでとしたつ空ののどかなるかな

久方の空にはれたる富士のねの高きを人の心ともがな

池水のみぎは吹きこす朝風に蓮の花のちるも見えつゝ

吹く風ものどかになりて朝日かげ神代ながらの春をしるかな

石垣のひまに生ひたるくれ竹は千代をつらぬく根ざしなるらむ

千代萬かはらぬ春のしるしとて海邊をつたふ風ぞのどけき

をさまれる世々のためしを都人ひなもろともにいはふ春かな

年たちていはふにいとど直なれど我が世の道を思ひけるかな

いはふぞよつかふる人もほど〴〵の道にたがはぬ年のはじめを

都にも遠き里にもあたらしきおなじ年をばうちむかへつゝ

新らしき年を迎へて富士の根の高きすがたをあふぎ見るかな

新らしき年のほぎでといふひとにおくれぬあさの鶯の聲

新玉の年もかはりぬ今日よりは民の心やいとどひらけむ

なれ〳〵てへだて心もなかりけりわがこゝのへの庭にすむ鶴

沖つ波よりくる船もとし〴〵に數そふ世こそ樂しかりけれ

降り積る梢の雪をはらはせてけさこそ見つれ梅の初花

九重のうてなの竹の深みどりかはらぬ影ぞ久しかりける

池水の上にもしるしよもの海浪しづかなるとしのはじめは

うなばらは綠に晴れてはま松のこずゑさやかに降れる白雪

さゞれ石の巖とならむ末までもいすゞの川の水はにごらじ

あらたまの年を迎へてよろづ民ひとつ心に國いはふらし

やまのはにかゝれる雲も晴れそめてのぼる朝日のかげのさやけさ

はる風も吹くこゝちして新玉のとしの初日ににほふ梅かな

天の下にぎはふ世こそたのしけれやまの奧までみちの開けて

小山田の里のけぶりもとしどしにたちそふ世こそたのしかりけれ

風の音は靜まりはてゝ千代よばふたづがねたかし峰の松ばら

この上にいくへふりそふ雪ならむたかむら高くなりまさりつゝ

たちかへる年の朝日に梅のはなかをりそめたり雪間ながらに

あづさゆみ八洲のほかもなみ風の靜なる世の年たちにけり

あら玉の年たちかへる河なみにしめかざりせし舟も見えけり

あたらしき年のほぎごときくにはによろづよばふのきの松風

ときはなる松こそたてれ動きなき國をしづめの神のやしろに

とし〳〵に雪をかさねて老い松のみさをたかくもなりまさりけり

たにはたに雪ぞつもれるたみの爲ゆたかにと思ふ年のはじめに

いくさ人いかなる野べにあかすらむ蚊のこゑしげくなれるこの夜を

開けゆく時にいよ〳〵仰がれぬひじりの御代の高き敎へは

たらちねのみ親のみよにつかへたる老いもすくなくなりにけるかな

たらちねの親の敎を守る子は學びの道もまどはざるらん

あやまちをいさめかはして親しむがまことの友の心なるらん

思ふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがてうたにぞありける

言の葉の誠の道を月花のもてあそびとは思はざらなむ

己が身を修むる道は學ばなむ賤がなりはひいとまなくとも

易くしてなし得がたきは世の中の人の人たる行にして

我とわが心をり〳〵省みよ知らず〳〵もまよふことあり

さゝやかに見ゆる家居もかたつぶりひとり住むにはことたりぬべし

世の中は高きいやしきほど〳〵に身をつくすこそつとめなりけれ

庭のおもに清水の音はきこゆれど結ぶいとまもなきことしかな

とし〳〵に思ひやれども山水を汲みてあそばん夏なかりけり

まつりごと出でゝきくまはかくばかりあつき日なりと思はざりしを

池水に小舟浮べてあそびつる昔こひしきふるさとの庭

たちつゞく市の家居は暑からん風の吹き入る窓せばくして

晝も猶蚊の聲しげし竹むらのかげのあづまや涼しけれども

いそのかみ古きためしを尋ねつゝあたらしき世のことも定めむ

如何に世は開け行くとも古への國の掟はたがへざらなむ

たらちねのみおやの敎あら玉の年ふるまゝに身にぞしみける

ためしなく開けゆく世を見ることもみちびく神のあればなりけり
笛となり弓矢となりてくれ竹の世はさま〴〵にかはりゆくかな
弓矢もて神の治めし國人は事なき世にも心ゆるぶな
國思ふ道に二つはなかりけり戰のにはにたつもたゝぬも
しろしめす國のみいづをたかめんもつめるこがねの山にぞありける
世は安く治りぬとて世の人のゆるぶ心ぞ仇となるべき
罪あらば我をつみせよ天つ神民は我身の生みし子なれば
世の中の人におくれを取りぬべしすゝまんときに進まざりせば
あらき風ふせぐ夜守りのありてこそ世の民くさはやすけかりけれ
世の中の人のつかさとなる人の身の行ひはたゞしからなむ
朝けぶりたちそふ末に知られけり民のなりはひすゝみゆく世は
おのが身をかへりみずして人の爲つくすや人のつとめなるらむ
家とみてあかぬことなき身なりとも人のつとめをおこたるなゆめ
國民の力の限りつくすこそわが日の本のかためなりけれ
たらちねの親の心を慰めよ國につとむるいとまある日は

きのふかも切おろしたるわが宿のには木の枝はまたしげりたり

いつくしと愛でのあまりに撫子の庭の敎へをおろそかにすな

千代よばふ聲ぞ賑ふ山松のつらなる枝の廣き園生は

人はたゞまことの道を守らなんたかきいやしきしなはありとも

うつせみの世は安らかに治まりぬわれを助くる臣の力に

いづれより種はまきけむ中垣のうらおもてなくさける朝がほ

積りては拂ふにかたくなりぬべしちりばかりなる事とおもへど

思ふこと思ふがまゝになれりとも身をつゝしまむ事をわするな

心ある人のいさめの言の葉は病なき身のくすりなりけり

よる波にうちあげられてふしながらはなさきにけり河原撫子

開けゆく道にいでゝも心せよつまづく事のある世なりけり

思ふこと貫かむよをまつほどの月日はながきものにぞありける

ともすればあらぬ方にとふみ迷ひをしへがたきはひとの道なり

ともすれば浮立ち易き世の人の心のちりをいかで拂はん

千早振る神ぞ知るらん民のため世を安かれと思ふこゝろは

正しくもおひしげらせよ教へぐさをとこをみなの道をわかちて

天の下にぎはふ世こそ樂しけれ山の奥まで道のひらけて

天さかるひなのはてまで茂らせむわがしきしまの道敎へぐさ

年の名をしるす瓦に古への家つくりてぞ思ひやらるれ

いぶせしと思ふなかにもえらびなばくすりとならむ草もこそあれ

持つ人の心によりて瓦とも玉ともなるはこがねなりけり

眞木はしらたてし心を動かすな世にはあらしの吹きすさぶとも

石だゝみかたき砦も軍人身をすてゝこそうち砕きけれ

神垣に涙手向けて拜むらしかへるを待ちし親ら妻子も

湊江によろづよばふ聲すなり功を積みしふねや入りくる

たらちねのみおやの御代は白雲のよそぢのよそになりにけるかな

たらちねの親の御前にありと見し夢の惜くもさめにけるかな

こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ國のすがたも

つかさ人さゝぐる文は多かれど花見るほどのひまはありけり

この春は梅うぐひすも忘れけり民やすかれとおもふばかりに

からのこす山田のおくて打なびき寒きあらしに時雨ふるなり

消えのこる軒ばの雪も解けぬらむふる春雨の音のどかなり

春風のさそふと思ひし梅が香のうれしく袖にとまりける哉

かぎりなき大海原の波の上にたな引渡る春かすみかな

埋火をかきおこしつゝつく〲とよのありさまを思ひける哉

くれぬとて山路をいそぐ旅人のそでしづかにも春雨ぞふる

山里の軒のかけひの音はして雪静かなる朝ぼらけかな

消えのこる松の木かげの白雪にさす影さむし有明の月

漕ぎいでゝふねの中より見渡せば雪おもしろし浦の松原

山風に吹きおろされて今日もまたふるもとの里は霰降るなり

あし曳の山田のいほの竹ばしらかたぶくばかりつもる雪哉

山ざくら匂ふあたりに朝な〱たな引わたる春霞かな

あらいその松の木かげにしほ風をよきても咲ける山櫻かな

きのふ今日春もふけひの浦風に浪路をかけてちる櫻かな

曉の月こそくもれ山ざくら梢にのこる花やちるらむ

おく山の青葉がくれのおそ櫻春におくれし色としもなく

老まつの枝にかゝりて咲にけり若むらさきの藤なみの花

春風の吹きのまに〳〵ちり來るはいづこの庭の櫻なるらむ

木高くも繁れる松をつたひ來て瀧の岩根にかゝる藤なみ

花時をさむしといひてとはざりしたにの櫻も若葉さしけり

降る雨にをがさとり〴〵賤の男が水口まつる小田の苗代

池水はこほらぬかたもなかりけり何處かをしの夜床なるらむ

しほ風をつばさにかけて冬の夜の長濱づたひ千鳥なくなり

木がらしの吹く度ごとに散り積る庭の落葉はいくへなるらむ

山川の水は氷のとぢはてゝ風の音のみたかきころかな

難波江のあしの枯葉におくしもの深くも冬はなりにけるかな

あしかものむれて浮べる池の面はつばさの風に浪やたつらむ

霜がれのあしの葉さやぎ吹く風に結びそめたる薄氷かな

さゆるよの月の光に池水の汀のかもの數も見えつゝ

ふる雪のしらふの鷹を手にすゑて朝狩きそふ冬は來にけり

武藏野は雪も消なくに朝がすみたな引そめつ春のしるしに
まどの戶を叩くあらしの音さむし池の氷もいまかとづらむ
風さわぐ池の汀のあつごほり浪のすがたにむすびける哉
玉川の淸きながれにやどりても猶おぼろなる春の夜の月
いそざきの波間の月の影落ちてあかつき寒く千鳥なくなり
此ごろは垣根の柳軒の梅みな鶯の宿となりぬる
今朝はまたいづくの梅に宿るらむとほく聞ゆる鶯の聲
奥山の谷のうぐひすいでゝなけ都の梅はいまさかりなり
立よりて折らむと思ふ庭のおもの梅の木ずゑに鶯のなく
玉琴の音にひかれ來て鶯もをすのと近く聲合はすらむ
てまなべて行人多し誰が里も梅の盛りになりやしつらむ
わらびをる人もかへりしかた岡にきゞすなくなり春の夕ぐれ
若葉さすいそ山かげに打よする波のと涼し夏や來ぬらむ
ぬぎかへし袂にかよふ朝風のうらめづら敷夏は來にけり
五月雨に水のあふれてものをみな舟にてはこぶ川面の里

夏山の若葉なびきてふる雨の涼しき暮になく郭公
たまさかに來なけばこそは郭公多くの人にめでられにけれ
たらちねのみおやのみ代の舊事を思ひぞいづる庭のたちばな
燕とぶかげのみ見えて田植時家に人なき小山田の里
まどちかく花橘はかをれども山郭公いまだ來なかず
この夕べむら雲はれてほとゝぎすすゞしき月の影になくなり
とのゐ人語らふこゑも絕え果てゝ更行く夜半に水鷄なく也
いせの海の淸き渚に打よするなみの音こそ涼しかりけれ
瓜畑におりたる人の見ゆるかなしづが垣根の夏の夜の月
玉川のはやき流れの底すみてさばしる鮎の數も見えつゝ
炭がまに通ふ山がつ寒からん朝霧ふかし小野のやまみち
朝のまに物學ばなむ幼子も晝は暑さに倦みはてぬべし
厚氷もちはこぶまにとけぬらむ盛しうつはに水のたまれる
水無月のてる日の影はさしながら時雨にまがふ蟬の聲かな
和田の原追風をうけて行くふねの片帆にかゝる夕立の雨

雨ぎぬをかくる間もなくゆく人の車にかゝる夕立の雨

月白く冴えたる庭と思ひしは隈なく雪の降れるなりけり

窓のうちに扇とりてもあつき日に照る日を受て小草かる見ゆ

軒近くかけつらねたるともし火のまたゝく程の風だにもなし

百日さく花まばゆくも見ゆるかな今やあつさの盛りなるらむ

風渡る木かげをかよふ小車のとまれば蟬の聲きこゆなり

旅人を野邊にのこして夕立は高嶺はるかにこえにける哉

はらはずば思はぬ方にかたぶかむ露おきあまる撫子の花

長くなりまどかになりて蓮葉にまろぶも涼し露のしら玉

宵にみし螢はきえてあかほしの影こそうつれ池水の上に

日ざかりは筆とる事ももものうくて扇をのみぞ手ならしにける

あらがねの土さへさくる日盛りのあな心地よや今の村雨

夕づく日かけろふ森の木がくれにひぐらし鳴きて秋風のふく

吹く風の音こそかはれ山の端の松もはじめて秋や知るらむ

露だにもいまだ結ばぬくさむらに一むらそゝぐ雨のすゞしさ

吹きまよふ風のまにまに誘はれて家のうちまで積る雪かな

ふゞくゑの上に夜露もかつちりてすゞしくなりぬ竹の下風

やり水につばさ洗ひて日ざかりは鳥も庭をあらさゞりけり

なくせみの聲ばかりして吹く風の音もたえたり岡の松原

あふぎのみ手にならしつゝ日盛は筆をもえこそ取れざりけれ

日をさけて夏の木蔭をゆく駒の上になき立つ蟬のこゑかな

行く水は照る日にかれていさゝ川風になみよる薄かるかや

ぬば玉のゆめにふたゝび結びけりすゞしかりつる松の下水

そらねかと思ふばかりに夏の夜のあけがた早く鳥が音ぞする

青丹よし奈良のうちはゝ都にてありし時にや作りそめけむ

野道にてあらざりしこそ嬉しけれ旅のやどりにかゝる夕立

さま〴〵の重荷をつみて日に燒し砂の上を車ひくなり

重荷ひく車の音ぞ聞えける照日のあつさ堪がたき日に

かたはらの人の言ふ事きゝとれず蟬の聲のみ耳にひゞきて

くさ雲雀鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさゝれざりけり

浪の音とほざかりゆくひきしほに蟲の音たかし濱の松ばら

有明の月もさし入る窓の戸に影さへ見えてなくきり〴〵す

をちこちに尾花なみよるかげ見えて月すむ野邊に秋風ぞ吹く

遠山のあらはれけりと思ひしはおきに浮べる雲にぞありける

天の原みちたる星のかげ消えてつきの光になれる空かな

つゝみゆく人かげたえて墨ぞめの夕ぎりふかし寺じまの里

音ばかり聞えし浪の見えそめつ浦わのさぎりはれ渡るらむ

千よろづの民と共にも樂しむにます樂みはあらじとぞ思ふ

神つよの御代のおきてを違へじと思ふぞおのが願なりける

つはものと共に勇みてすゝむてふ駒のこゝろも人におくれじ

千萬のあだをおそれぬますらをも此暑さには堪へずやあるらむ

限りなき世にのこさむと國のため斃れし人の名をぞ止むる

勇み立つ心の駒を引とめていたで負ふ身や侘しかる覽

岩が根のこゝしき山を照る日にもたゆまずこゆる我が軍びと

つはものゝ糧もまぐさも運ぶらむ牛もいくさの道につかへて

端居してつき見るほども戰ひのにはのあり樣思ひやりつゝ

み越路の雪にこもりて少女等は夏のころもや織り出すらむ

あらたまの年の終りも近づきぬ暑しさむしと言ひくらす間に

おのがじゝ務めををへしのちにこそ花の蔭には立つべかりけれ

敷しまのやまと心の雄々しさは事ある時ぞあらはれにける

まごゝろを歌ひ上たる言の葉は一度きけば忘れざりけり

言の葉の誠の道をつきはなのもてあそびとは思さらなむ

照る月のひかりはいまだ寒けれど春にかはらぬ梅が香ぞする

何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身の爲にこそ

花になり實になる見れば草も木もなべて務のある世なりけり

庭つどり告げぬ先にと思ひしはまだ宵の間のこゝろなりけり

煙草くゆらす暇も惜しと思ふ日ははや西にかたむきにけり

いかならむ事に逢ひても撓まぬはわが敷島のやまとだましひ

幼子が物書く跡を見ても知れ習へば習ふしるしある世を

國のためふるひし筆のいのち毛のあとこそ殘れ萬代までは

枯れづるもいまだ拂はぬ朝がほのかき根ゆすりて秋風ぞふく
あらしとも思はざりしを芭蕉の葉吹きやぶりたり庭のあき風
おち鮎のながるゝ見えて桂川すみまさりゆく水のいろ哉
ふじの嶺に初雪見えてうちひさすみやこも寒き秋かせぞふく
家なしと思ふ方にもともし火の影見えそめて日は暮にけり
故郷の老木のまつもをさなくてみしよながらの緑なりけり
波風のあらしといひて今宵またおなじ港にうき寢をぞする
波たかき沖の小島のひとつ松いつのよにかも根差初けむ
さゞれさへ行く心地して山川の淺瀬の水のはやくもある哉
後ろにはいつなりにけむ漕ぐ舟の行方はかるかに見えし島山
ことそぎし昔の家のつくりさま今も田舍にのこりけるかな
時の間に硯の水のかわくにもけふの暑さのしられける哉
巣立ちにし雛あさらせて一つがひたづぞ下り立つ浦の蘆原
草まくら旅の宿につきてのちうれしき雨のふり出にけり
世の中のあらしを知らぬ谷底の松は靜かに千代をへぬらし

あげまきも牛ひき連れて歸り來ぬ夕げのけぶり見ゆる我家に

むらきもの心つくして報いなむおふし立てたる親のめぐみに

若竹のおひ行末を思ふよに庭の敎へをおろかになせそ

杖つきて道行くまでに老いし身も昔たづぬる栞となる

白玉をひかりなしとも思ふかな磨き足らざる事をわすれて

たらちねの庭の敎へは狹けれどひろき世に立つ基とはなれ

千歳にはあらずともよし常磐なる松のみさをにならひてしかな

久しくも我が飼ふ駒のおいゆくを惜むは人にかはらざりけり

暫らくはをさな心にかへりけりよみならひにし書を披きて

そのもりや獨り見るらむ昔わがあつめし庭の秋ぐさのはな

なにがしの寺の文字あるふる瓦たまにならべて飾りける哉

浦風も荒磯波も今朝なきてかもめとび立つ鳥羽の海面

つねに身の養ひ草をつみてこそ人の齡は延ぶべかりけれ

臥す龍の岡の白雪踏分けて艸の庵を訪ふ人はたれ

山の奥島のはてまで尋ね見む世にしられざる人も有りやと

縣守心づくしのほど見えてわらやの煙たちまさりけり

おくりにし若木の松のしげりあひ老の千年の友とならなむ

降雪を袖に拂ひて臣共と馬はしらする今日のたのしさ

つかさ人まかてしのちの夕まぐれ心しづかにふみを見る哉

したはしと思ふ心や通ひけんむかしの人ぞ夢に見えたる

をり〳〵に思ひぞいづる國の爲心くだきし人のむかしを

秋の夜の長にあかす燈火をかゝげて文字をかきすさみつゝ

いそのかみ古事記は敷島のやまと言葉の栞なりけり

踏む人は許多あれども言の葉の道の高嶺は誰か越ゆらむ

いとまあらば踏分て見よ千早ふる神代ながらの敷島の道

思ふ事ありのまに〳〵つらぬるかいとまなき世の慰にして

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひ入りたる道の爲には

雨たりに窪みし軒の石見てもかたきわざとて思ひすてめや

思ふ事思ひ定めて後にこそ人にも斯くと云ふべかりけれ

松ばらのをぐらくなりて秋の野の尾花が末に月傾きぬ

九萬餘首の御製

大行天皇が、御歌に御心を傾けさせられしことは、萬民の洩れ承る處で例年の御題を降したまはることにみても、思召の程は伺ひ知られるのである。陛下其昔は七卿落の一人たる三條西季知卿に就いて、御習作遊ばれしが、明治十五六年頃よりは高崎正風男に就いて御研究あり。日清戰爭以後は殊に御上達の跡著しく、御製の恐くは殆んど金科玉條として、仰ぎ奉るに至つた。陛下には主に、黄昏か、夜間に御製のお作を遊ばされた、古來、歌人として有名なる藤原家隆卿すら一代の作歌三萬首を越えなかつた、而かも卿は專門の歌人であつた、陛下は歌人に在さずして、十萬に近き御製を遊ばされ、既に數の上に於ても、歴代の天皇中、唯一人に在すのみか、在野の歌人と雖、恐らく陛下の御製の非凡に對し得べきものは一人もない。さればこそ、陛下の御崩御遊ばさるるや、世界の新聞紙は、陛下の御稜威をたゝへ奉ると同時に、陛下を不世出の詩人なりと稱揚したものもある、殊に先年二十七八年役の頃御製「世の中はみなはらからと思へどもなど波風の立ちさわぐらん」と云ふ一首は、ロイドの譯に依りて時の米國大統領ルーズベルトの知る所となり、大御心に感激して、日露仲裁の談判も此が爲に大いに効果を生じたと云ふことである。其の他 陛下御

製の中で、英譯又は獨譯となりて、世界に傳はつてゐる者も少くはない。又先帝は自ら御稽古遊ばして御樂しみになつたもの〻、御發表になることは好ませたまはなかつたのを、高崎御歌所長が獨斷で責を負つて世の中に發表したのである、而し其爲に世道人心に益する處は如何に多大であつたか分らぬ、且又單に天然の風光を御翫賞遊ばされた御製の中にも、先帝の天資和歌の道に秀れさせたまふを拜察するに難からぬ、御佳作は實に少からず在つて、日常の御見學を直ちに詠じたまふ御感受性の御鋭敏には近侍と雖驚嘆したと云ふことである。高崎男の生前には、隔月に三百首、四ケ月目に八百首位を御下げあり、御製は凡て掌侍小池道子刀自が飛香舍と云ふ罫紙に淸書したものを、侍從が高崎男の許へ持參するので、男は禮裝して之を拜見し、佳作傑作に點を附したる後、御歌所寄人、又は參候が拜寫し、原書は之を返上し、寫本は全部御歌所に保存し御佳作御傑作は之を書き拔きて、高崎男の許に保存して居たのである。先帝は御製に優れさせたまひしのみならず、御批評眼も高く在し、全國の臣民より例年新年御歌會に奉進する和歌は勿論、毎月の宮中月次會の和歌も、陛下自ら御覽遊ばされるを常としたのである。世間では、高崎男が御製に加朱し奉られるやう噂する者もあるが、決して然うでなく、殊に日淸役後は次第に御上達遊ばされたので、加朱し奉るやうなことは更に無かつたさうである。實に陛下は空前の武運めでたき陛下にましましたと同時に、又文運にもめでたき　陛下に在たのである

皇室と婦人

御朝見の御式に參列す

澁澤男爵夫人　澁澤かね子

踐祚朝見の御式は、聖上皇后兩陛下登極令の御規定によりまして、三十一日午前十時に行はれたのでございます。式と申しますと、兩陛下は定刻時間に正殿に出御遊ばして、皇族初め文武諸官に初めての拜謁を賜ふ御儀式でございます。私も參列の光榮にあづかりまして、主人と共に參內いたしました。

陛下には玉音朗かに御勅語を御朗讀遊ばされました。その御英姿を拜し奉りて、衷心恐悅に堪へられませんでした。然し御擧動の何となく御悲哀の御樣子をふくませられたのを拜しまして、たゞ〳〵恐懼の外何とも申しあげやうがございません。實際悲喜交々とはかゝる場合を形容するのでございませうか。

朝見式には御夫人が少うございました。男子のお方は大禮服に喪章をつけられ、金モールで立派に見受けられましたが、婦人方は黑の喪服、黑のヴエールと云ふ姿で、いつもの參內と違つて際立たず、どこにどなたが御

參内になつて居られるやら、よくわかりませんでした。お互の喪服を見るにつけ、其の姿の何となく、しめやかで、只々無限の感に打たれ、御側近く奉趨はいたして居りますものゝ、私は茫然として、夢路を辿る心地して式場を退りました。

大内山の御奥の方からはいろ〳〵な蟲や小鳥の聲など、殊に蜩の聲さびしく聞え、誰れもハンカチーフを絞りました。歸途の自働車の中でもいつもにないその轢轆の響までが私の胸を刺すやうに轟いたのでございます。二重橋附近に參りますと、哀悼の人々で充されて居りました。或る人は天を仰ぎ、地に伏して慟哭し、悲痛の情に身も心も傷らるゝばかりに狂してゐる人もございました。

人間と云ふものは、智や意識の生活ばかりするものではないが、日本人は殊に情の生活をしてゐる事が多いと思ひます。陛下の御崩御前後の有様でも明かにその情が表れて居ります。此のうるはしい情こそ、世界は廣うございましても恐らく日本人の外には求め難い事であると思ひます。

日本國民が皇室を尊び、先祖を敬する念は一種獨特なる美點であると思ひます。私共が生活するにいたしましても皇室に對する觀念、先祖の意志などを見て日常の行動をして居るのでございます。それでありますから日本の家庭は、夫婦と云ふ關係に依つて結合され、先祖と云ふ觀念によつて統一されてゐる日本固有のもので、外國の家庭と相異なる處だと思ひます。其家庭で感化された感情が、皇室に對しては忠誠無二の精神となつて表はれるのでございます。

皇后陛下に拜謁す

男爵母堂　高崎恒子

畏れ多い事でございますが、聖上陛下の御崩御遊ばされましたについて私の父（記者云、夫人は故御歌所長高崎正風氏令嗣未亡人です）も丁度同じ病氣で今年二月死亡いたしました事故、殊に私は始めから父の病床に看護致したので父の苦しみましたのが今にも眼に見える程でありますから陛下の御病勢を號外で承はる毎に、父の時の事が思ひ出されまして、どんなにてそお苦しみの中に今頃はお出で遊ばされるかと、只管恐察致して居りました。そして萬に一つの恃む可からざる事を恃みて、幾度かく心臓の鼓動を騒がせたのでございます。遂に天の祐も耆婆の藥も及ばず悲しくも御崩御との大喪を發せられました時、まるで夢中で父の寫眞に向ひ、生存中ものいひかはす心地して、御崩御の報を傳へました。今までに生存して居りますと、どんなにてそ歎く事か、何しろ、四十餘年間も、陛下のお側近く奉侍して居つたのでございますから、私共の悲嘆より更に一層甚しかつたであらうと思ひます。

先帝陛下には拜謁いたした事がございませんが、皇太后陛下には、先年拜謁仰付けられました。それも表向きでなかつたものですから、和裝の禮服で唯女官のお方にお目にかゝる積りで參りましたら、柳原典侍から、陛下より拜謁のお許しが出たにつきてちらへとの御案内で、拜謁場に參りま

した。陛下は私の參りましたのを御覽遊ばされ、こちらへ來て掛けるやうにとお言葉を賜はりました。どう御返事申上げてよろしきやら、畏れ多く思はず默つてただ御禮を致しますると、柳原樣から、お頂きなさいとおつしやつて下さいましたので、恐る〳〵腰をかけて頭を下げて居りました。すると女官のお方の手から、お茶とお菓子が運ばれました。お菓子は、角落しの白木の箱に入れられてでございました。良人は御承知の通り、日露戰爭の時に戰死いたしましたので、今年十五になるのが後繼して居ります。それで、皇后樣も御存じでゐらつしやいますので、何かとお慰め下さいましたと同時に、子供をよく敎育するやうにと有難いお言葉を數々賜りまして退りましたが、今にそのお言葉が耳に殘つて居ります。この御言葉に對しても、又、父の志に對しても、私はどうか子供をよく敎育して、御恩の萬分の一だもつくさせたいと心懸けて居ります。

兩陛下の御眞影を頂いてでございますから、朝夕禮拜致して居ります。

末代まで傳ふべき美はしき感情

宮中顧問官法學博士 穗積八束氏夫人　穗積まつ子

私は二三年前から腎臟が惡くて、七月半頃から鎌倉に子供達を連れて參つて居りましたが、先帝陛下の御不例を承り、間もなく歸つて參りました子供も二十八日に歸宅させ、新橋に着いたら直ちに二重橋に行つて遙拜し歸宅するやうに申し付けました。恐れ多い次第でございますが、先帝陛下

の御崩御前後の二重橋に集る人々を見ましても、日本の皇室は國民の皇室で、國民は陛下の赤子であると云ふ事實が遺憾なく表顯されて居りました日本國民のてのうるはしい感情が、日本全土の浦々までも發露されて居る事を聞きましても、陛下の御威徳の忝けなさに涙が溢れるのでございます實に斯ういふ國土に生れた私共は幸福でございます。

當家には、兩陛下の御眞影は頂いてございますが、三大節以外は取りはづして片附けてございます。掛けて置きましても其の室内で、子供の多い事故、誰れ一人寢轉ばないとも限りませず、又失禮な動作をせぬとも限りませんからはづしてあります。三大節にはかけまして、主人始め家族一同禮拜しまして、主人は參内、子供達はそれ〴〵學校に參る事にして居ります。當家は神教でございまして、何方かと申しますと舊式で六ケ敷い方ででございます。

すべて人間の守るべき道徳のもとは、宗教によらなければなりませんので、其の宗教が神教であらうが、佛教であらうが、兎も角、一つの宗教を持つて居ると云ふ事は必要な事であります。婦人にしましても、宗教を信ずる婦人は、何の信仰も持たぬ處の婦人に比べると、其の貞淑なる事に多少の相違が見えるやうに思はれます。此の貞淑に見える婦人の外貌はたゞに外貌ばかりに止まらず萬事にわたつて影響する處があります。宗教心のない婦人の中に強氣に見える婦人があつても、それは眞正の強氣ではありません。殊に宗教心のない婦人には思ひ遣りと云ふ事が乏しいやうでございます。又生活の困難などに對つても、眞正の強氣をもつて之に打勝つ事

が出來ず、却つて墮落の淵に沈み易くなるかと思ひます。かゝる無信仰の婦人方は丁度香のない花のやうでございます。香の無い花はいかに美しく咲いて居りましても、世間の愛と同情とを引く事が出來ないと思はれます斯う考へて、私はいつも自分の信仰を進めたいと思つて居ります。

我國の君臣の至情はほんとに之れを科學的に説明する事が出來ないと思ひます。平生無事な日に考へても其の熱誠は殆んど想像がつきません。陛下の御不例。續いて御崩御と云ふ悲愁の極に達した間の我々人民の熱誠。此の眞心からの熱心な感情が千萬代の後まで、國家の有らん限り保たれて、しかも益々強く頼もしいものにして行くには、何うしてもその養成を家庭に待たなければならぬと思ひます。その忠烈な感情を家庭で養成し始終燃え立ち、事端に現れて行くやうにするには一家の主婦たる人が、熱誠の心を無言の間に傳へるやうにして、知らず識らず、子供達の頭へ深き印象を與へるのが必要だと思ひます。

觀櫻の御宴

比志島陸軍中將夫人　比志島雪子

毎年四月には、お濱御所で、觀櫻會、十一月には赤坂御所で觀菊會のお催しがございまして、毎年日は定まつて居りませんが、大概一週間前後に御通知がございまして、娘があれば十五歳以上連れて行かれることになつて居ります。招待状を受けますと、行くか否かを前以て御返答申上るので

ございます。

近年は身體が惡いものですから參りませんが、以前は娘を連れて參りました。畏れ多い事でございますが先帝陛下の御崩御につきましても、觀櫻會の時の事など思ひ出されます。殊に主人が近衞に勤務して居りました時に、拜謁を仰付けられ、御酒など賜はり、宮ノ小路侍從が、普通御用ひになる洋盃を出すと、これでと、御自身の御手に持つて召し上つて居られた洋盃を御出し遊ばされました、ゆつくりのめ、これは酒の肴だと、花瓶に挿してある菊の一輪を折つて、胸にさして下さつて、いろ〳〵有難き御言葉など賜り、今にその菊が押し花にして、洋盃と共に保存してございますが回想の感に堪へられません。

觀櫻會、觀菊會には、陛下が御主人役にならせられ、宮内官のお方が接待役で、實におそれ多い事でございます。

此の時の服裝は男女とも洋裝でございます。金モール爛々たる紳士方や思ひ〳〵お好みの模樣、色合で、ベルト裳を共に曳きつゝ居られる淑女方で、燦爛、實に見る目も眩しき計りでございます。

御所には隅から隅まで塵一つ認めず、道には白砂を敷かれて、一莖の雜草も見えず、路傍には櫻は勿論、いろ〳〵な珍樹珍草で、色、花、人のさま〴〵にまるで醉ひ心地でございます。

午後一時に　兩陛下の行幸啓がございまして、君が代が軍樂隊によつて奏されます。この時の君が代は何とも申されません。天國にでも上つたやうに無我な心持になつて了ひます。

それから、陛下はおもむろに花間の道を御徒歩遊ばされますのですが大君の洽き惠みに咲きほころんで居る花までが最敬禮するかと思はれます此の時までとりどりに花間を歩いて居る人達は皆道の兩側に整列します。先ぶれに侍從の方がお通りになりますが、帽を左右に打振つてシー〳〵と通られます。ほどなく　皇太子殿下の行啓、次には一間ほど離れて、陛下、そのあとに一間ほど離れて、皇后陛下がお進みあそばされます。次には皇族妃殿下、侍從、式部宮内官のお方がお通りになりまして、玉座にお着きになるのでございます。畏れ多い事でございますが、陛下のお通り遊ばされる時に、拜顔致さうと思ふて居りましても、いつの間にか頭が下りまして、拜顔致した事がございません。お通り越し遊ばされた後を御見送り申しますると陛下には、玉顔を左右に正列して居る人々の方にお向け遊ばし、お通りになるのでございます。

西行法師でございましたか、伊勢の大廟に詣でゝ、

何事のおはしますかは知らねども
忝けなさに涙こぼるゝ。

といつて涙を流した通り、實際、陛下のお通りの時、丁度私の胸がその通りでございました。話がそれましたが、それから玉座にお着きになりますと、食堂が開かれます。美麗なる幾百の卓、椅子は忽ち殘りなく人をもつて充されます。いろ〳〵と結構な洋食の饗應がございまして、漸く一時間程もして居りますと、又君が代の音樂が響きわたります。元のやうに思ひ〳〵の處で整列いたして居りますと還幸遊ばされるのでございます。

錦の御旗の下

加納子爵夫人　加納諭子

私などが申上げるまでもございませんが、我日本の國體は萬世一系の天子が統治し給ふ君主國で、全世界に比類ない國でございます。

而して皇室はと申しますと、皇室あつての人民で、人民あつての皇室ではないのでございます。それは建國基礎の歴史で明かでございます通り、伊弉諾、伊弉冊の男女の尊がお降りになりまして、天照大神、瓊々杵尊、うがやふき不合尊、神武天皇といふやうに、天孫をお降しになりました。瑞穂の國は我子孫の王たるべき地なり、寶祚の隆なる事は天地と倶に窮なかるべしと、天照大神も宣はれたのでございます。

その天孫がいろ〳〵に分岐して人民が出來ましたのでございますから、皇室あつての人民で、人民あつての皇室でない點は、各國に比類のない。根本的に異なる處でございます。

それでありますから、一時王政が衰へて、鎌倉、足利、徳川時代の數百年間は、武門政治となつて居りましたが、決して皇室を侵し奉る事はなく却つてどこまでも皇位は嚴として動きやうがなかつたのでございます遂に明治維新に際し、政權を返上した樣な美事な歴史を殘したのでございます

多くの世界各國では、皇帝と申し上げるばかりでございますが、我日本では、天子樣と昔から申し上げて居ります。實際、陛下は天のお子樣でで

ございますから御當然なのでございます。

戰爭時代には擧國一致して、皇室には忠、親には孝、即ち出陣の門出に兩親兄弟姉妹等よりは「陛下の爲め名譽の戰死をせよ」「家名を汚すな。」と送られた言葉に刺激せられて、一身を拋ち、妻子を捨てゝ進みました。夫れ等の從軍者が骨をさらし血を流して戰つた結果、勝利を得たのでございます。御稜威によることとは申す迄もございませんが、上は天子、下は津津浦々の賤が男女まで擧國一致するこの美風は世界各國に對して誇る處でございます。と同時にこの擧國一致と云ふ事が戰爭時代のみでなく、現に今回は
先天子の御崩御の時に亦擧國一致して喜憂を共にし、同じく憂愁の涙を拂はぬものはございませんでした。此の擧國一致と云ふうるはしい思想を永久無限に子々孫々の末まで保つて行かねばなりません。

世界は廣しと申しましても、我が日本帝國ほど誇るべき歷史を有して、人種を同じくし、人民を赤子と愛し給ふ皇室を奉戴する國が、何處にありませうか。加ふるに國土豐饒、氣候中和、山水明媚、實に世界に稀れに見る處でございます。

擧國一致の中心が皇室であらせらるゝはいふまでもありません。即ち旭の御旗、錦の御旗を擧國一致の目標と致し、此の御旗の下には、上下、朝野、貧富、貴賤、老若、男女の別なく、直に合して一となり、財を拋ち、身を捧ぐる、至誠奉公の念を忘れる所なく、つくしたいものでございます。

拜讀、胸打顫ふ御宸翰

御歌所參候遠山氏夫人　遠山稻子

先帝陛下の御崩御につきましての感想でございますか、まことに恐れ多い事で何と申し上げてよろしいか只唯斷腸の思ひでございます。

陛下の御聖德の高くいらせられた事を思ひ、四十五年の間の御稜威の日月と光を爭ふ程、盛にあらせられた事を考へると、數ならぬ身まで、有り難さに涙の溢れるばかりでございます。御不例と承りました時、一意、神明の御加護あらんことを祈誓致す日本國人民の熱誠は、前後に比類もない教訓をのこしました。二重橋前の萬をもつて數へる　陛下の赤子が、ひとしく熱禱をこむる有樣は、忠義そのもの丶表徴といつても差支へはなく痛く外國人にまで感嘆させたのでございます。此の忠烈の民情を見るにつけても思ひ出されるのは、我々日本婦人が、更にこれから將來に向つて爲すべき事でございます。

先帝陛下の御崩御に際し、深き悲愁に沈んでゐる間にも至誠をもつて將來の自覺をなし、一層責任を感じて皇室に對し奉り、國家に對し、世界に對して、私共日本婦人は何事をか爲すべきところがなくてはならないと思ひます。それが即

先帝陛下の御志にそひ奉るばかりに止まらず又、　新帝陛下の御旨に答へ奉る私共の務めであると思ふのでございます。

恐れ多くも、御維新當時、先帝陛下には、三條公岩倉公に御宸翰を給はり、つぶさに、陛下が、我々人民に對する御胸襟をおもらし遊ばされてあります、それを拜讀いたしますると、胸の打震ふのを禁ずる事が出來ません。

「皆　朕ガ罪ナレバ、今日ノ事、朕自身骨ヲ勞シ、心志ヲ苦メ、艱難ノ先ニ立チ」

とございますが、何と云ふ御言葉でありませう。靜かに考へて見ますと今日の日本婦人程幸福なものはないと思ひます。尤も婦人ばかりではなく日本人民凡てが幸福でございます。上には斯く迄至仁なる聖天子を戴き、其の赫々たる御聖徳の下に、安全に私共の充分なる才智技能を何等の検束せられる處なく、政治の上にも、社會の上にも、唯道徳の命令と、法律の命令のその範圍内に、自由に活動の出來るといふ、このやうな時代に生れたのは、何と云ふ幸福でございませう。幸福を感ずると同時に、私共は深く期するところがなければならぬのであります。

御宸翰

朕幼弱ヲ以テ、猝ニ大統ヲ紹ギ、爾來何ヲ以テ萬國ニ對立シ、列祖ニ事ヘ奉ランヤト、朝夕恐懼ニ堪ヘザルナリ、竊ニ考フルニ、中葉朝政衰ヘテヨリ、武家權ヲ專ラニシ、表ハ朝廷ヲ推尊シテ實ハ敬シテ是ヲ遠ケ億兆ノ父母トシテ、絶テ赤子ノ情ヲ知ルコト能ハザル樣、計リナシ、遂ニ億兆ノ君タルモ唯名ノミニ成リ果テ、其ガ爲ニ今日朝廷ノ尊重ハ、古ニ

倍セシガ如クニテ、朝威ハ益〻衰ヘ、上下相離ルルコト霄壤ノ如シ、斯ル形勢ニテ何ヲ以テ天下ニ君臨センヤ、今般朝政一新ノ時ニ膺リ、天下億兆一人モソノ所ヲ得ザル時ハ、皆朕ガ罪ナレバ、今日ノ事、朕自身骨ヲ勞シ、心志ヲ苦メ、艱難ノ先ニ立チ、古列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勸メテコソ、始メテ天職ヲ奉シテ億兆ノ君タル所ニ背カザルベシ、往昔列祖萬機ヲ親ラシ、不臣ノ者アレバ自ラ將トシテ之ヲ征シ給ヒ、朝廷ノ政總テ簡易ニシテ、此ノ如ク尊重ナラザル故、君臣相親ミ上下相愛シ、德澤天下ニ洽ク、國威海外ニ輝キシナリ、然ルニ近來宇內大ニ開ケ、各國四方ニ相雄飛スルノ時ニ當リ、獨我國ノミ世界ノ形勢ニ疎ク、舊習ヲ固守シ一新ノ効ヲハカラズ、朕徒ラニ九重中ニ安居シ、一日ノ安キヲ偸ミ、百年ノ憂ヲ忘ルルトキハ遂ニ、各國ノ凌侮ヲ受ケ、上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ、下ハ億兆ヲ苦メンコトヲ恐ル。故ニ　朕ココニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業ヲ繼續シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ハズ親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ　遂ニ萬里ノ波濤ヲ開拓シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カンコトヲ欲ス。汝億兆、舊來ノ陋習ニ慣レ、尊重ノミヲ朝廷ノ事トナシ、神州ノ危急ヲ知ラズ、　朕一度足ヲ擧レバ、非常ニ驚キ、種々ノ疑惑ヲ生シ、萬口紛紜トシテ　朕ガ志ヲナサザラシムル時ハ、是レ　朕ヲシテ君タル道ヲ失ハシムルノミナラズ、從テ列祖ノ天下ヲ失ハシムルナリ、汝億兆能ク朕ガ志ヲ體認シ、相率ヰテ私見ヲ去リ、公議ヲ採リ、朕ガ業ヲ助ケテ、神州ヲ保全シ、列聖ノ神聖ヲ慰メ奉ラシメバ生前ノ幸甚ナラム。

十四歳より御所に仕ふ

權女嬬の一人

私の父は永年宮中の大膳職をつとめて居りましたが、先年歿しました。宮中へは七歳までの自分の子供を連れて行かれることになつて居りましたそれで時々父に連れられてよく行つたものでございます。女官方が可愛がつて下すつて、皇后陛下のお側に連れて行つて下さり、種々おもちややお菓子を頂きました、そして淋しいから又遊びに來るやうになどおつしやつた事等覺えて居ります。其の時分に頂いた人形等は御覽の通り大切に保存して居ります。

私は十四の時に　英照皇太后様のお住居の青山御所に、雇として御奉公にあがつたのでございます。十八の時に始めて、權女嬬といふ女官の位を宮內省から頂いたのでございます。それも上が聞へて居りますと、幾年間も雇として居るのでございます。雇の內は普通の着物で勤めるのでございますが、位がつきますと始めて、褂に緋袴を着け、下げ髪をするのでございます。以前と違ひまして、宮中の儀式には凡て洋装でございまして、日常は一寸した着物で緋袴で居ります。

英照皇太后様が崩御遊ばされた時は、京都まで御送葬申し、その後東宮御所へ轉任し、御慶事の時には伊勢太廟御參拜の砌、御供を仰付けられ、宮中へも御參內の折は、御供いたしました事等思ひ出しますと、

先帝御崩御について、轉た回想の感に堪へられません。勤務は何々係何々係と皆役割が定まつて居りまして、働くのでございます。

宮中以外の御所では、女官には典侍とか、内侍とか云ふ稱號はございませんので、皆名をお呼びになります。時としては姓をお呼びになる時もございます。

女官の住居はお廊下續きのお部屋で、壁の中じきりがありまして、隣と境されてあります。上の方は、三間四間のもあります。私は三間でございました。女官は又自分の身まはりの世話をして貰はねばなりませんので、皆下女を使つて居ります。

兩殿下とも、土曜と日曜には、御和服を召されます。殿下は菊の御紋のお羽織、妃殿下は九條家の下藤の御紋の着物で、時としては被布を召されることもございます、お茶碗も殿下のは、菊の御紋に、妃殿下のは、下藤が付いて居ります。

御朝食は殿下は先に召し上り、御仕度を遊ばし、學問所に入らせられまして、講師から教授をお受け遊ばされます。其の間に、妃殿下はお仕度を遊ばされ、殿下が英語の御時には、妃殿下は、御習字、殿下がお習字の時は、妃殿下が英語と云ふやうに、午後二時まで、御學課がございますので二時すぎますと、自由に御運動遊ばされます。

御夕食には給仕の女官は五人、段々に並んで出るのでございます。

御食事の御獻立は、朝と晝とは、二汁三菜、夕には二汁五菜と御定めになり、至つて御質素でございます。

宮中奉仕の女官にも種々の位があり、またそれ〴〵役割が違つて居ります。兩陛下の御身近く仕へ奉りて、御用を承るのは、典侍、並に權典侍でございまして、掌侍以下の女官も、時には直接の御給仕を承る事もございますが、多くは典侍、權典侍の旨を受けて、お次の間に奉仕するのでございます。

典侍、權典侍は、華族の出身で、其他は士族の出身でございます。

玉座近く奉仕して細々の御用などするのは、内豎と申しまして丁度小姓と相似て居ります。之れは學習院通學中の華族の子弟より四名を選抜いたして、年齢は十二歳以上十四歳までに限られて居ります。時間は午前八時から、午後三時まで、二名宛隔日交代に勤務して居ります。

記者云、此の話をされた女官は、今は宮中を下りて市井の間に閑居してゐる方です。

因に云ふ。先帝陛下　皇太后陛下の御側近く仕へ奉れる女官の方々は、高倉壽子の方（當年七十三歳）柳原愛子の方（畏くも今上陛下の御生母）の兩典侍を初め、權典侍は千種任子、小倉文子、園祥子、姉小路良子の御四名、掌侍は小池道子、中山榮子、壬生廣子の御三名、權掌侍は藪嘉根子、津守好子、六角章子、北島伊登子、吉田鉦子、山川操子、粟田口綾子の方方、權掌侍取扱、同心得、命婦、權命婦等には、香川志保子、日野西薫子、堀川武子、西西子、生源寺伊佐子、平田三枝子、吉田愛子、樹下定江子、大東登代子、藤島竹子の女官の方々が、宮中に奉仕して居られるのです。

女子自ら動け

茅原華山

我邦、今日の女子の地位は、起るか倒るゝかの秋である、なに、そんなに心配することはない、果報は寝て待てといふ諺もあるから、倉皇て騒がなくても何うにかなるだらうと云ふ人と、如何にも世の中の人は女を馬鹿にしてゐるし、屈辱に遭ふのは慨嘆に堪へぬけれど、何んなにもがいたつて、焦つたつて、戰つたつて、人間の力では何うとも出來ない、諦めて成行に任す外はないと云ふ人とが、多い。果して女子は此で宜いのであらうか。

女は唯、受動的に働いて、他の者から『せられる』ものであらうか、四圍の境遇が女子をするまゝにして『せられ』て居れば、女子は宜いものであるか。決して然うでないと思ふ。

天道是乎非乎と云ふ事は昔から支那人の言葉にあるが、天道は是でもない、非でもない、宇宙の萬有は人間を愛しもしない、又憎みもしない、特に女だけを繼子扱ひにして、男を寵兒にすると云ふやうな不公平なものでない、誠に萬有は公平氣私である、萬有が人間の境遇を造るのでもなければ、又人間の考を左右せしめるのでもない、矢張り萬有に靈長たる人間が自動的に働いて、萬有そのものを自動的に使はなければならぬ。詰り萬有をして吾意志に服從せしむるのだ、吾理想、吾目的、吾經倫に服從せしめて進んで行く、即ち社會といふものは仕方がないものではない、仕方のあるものだから、吾意志を以て、之を改善し、進歩せしめて行くと云ふのである。

然う云ふ風に、吾から計畫を立て、自から動いて行つて、地位を進めようと云ふ考を持たない以上は、現今の女は倒れてしまふ、たゞ嫁に行きたいといふことばかりで、外に何ものをも持たなかつた日には、現今の女の地位は何うして進んで行かう?。

西洋の文明諸國の婦人だつて、女はお嫁に行くのが唯一の目的だと云ふやうなことは思つて居ない、又親が娘を敎育するにしても、其目的は、娘の才能を充分に發展させ、完全なる人物にしたいと云ふのが第一の目的であつて、結婚すると否とは豫め問ふ處ではない娘自身も亦然ういふ積りになつて敎育を受けてゐる。嫁入道具として學問はして居ない。

私は先年スコットランドのセント、アントリユーと云ふ所の女學校で、女生徒を集めて三個の問題を提出してみた、其結果は左の通りだ。

第一、崇拜する人物。
（これにはネルソンと答へたものが多かつた）
第二、自國以外の世界で好きな國。
（これには殆んど日本國と云つた）
第三、自分の將來の目的。
（これには、敎員、官吏、タイプライター、記者、政治家、醫者、辯護士、會社員などゝ答へたが良妻賢母となると答たものは一人もなかつた）

其時校長は、自分の國でも昔は良妻賢母の思想を持つてゐたのであつたが、今日斯る思想のなくなつたのは、皆生活難から起つた結果であると答へた。

一體生活難と云ふことは、何うして起るかと云ふに之は世界の大勢の推移から來る自然的壓迫と、或る人爲的壓迫との二つが原因となつて居るから、根本から防禦することは出來ないが、出來るだけ緩和することは出來る。それが目下の急務だ。

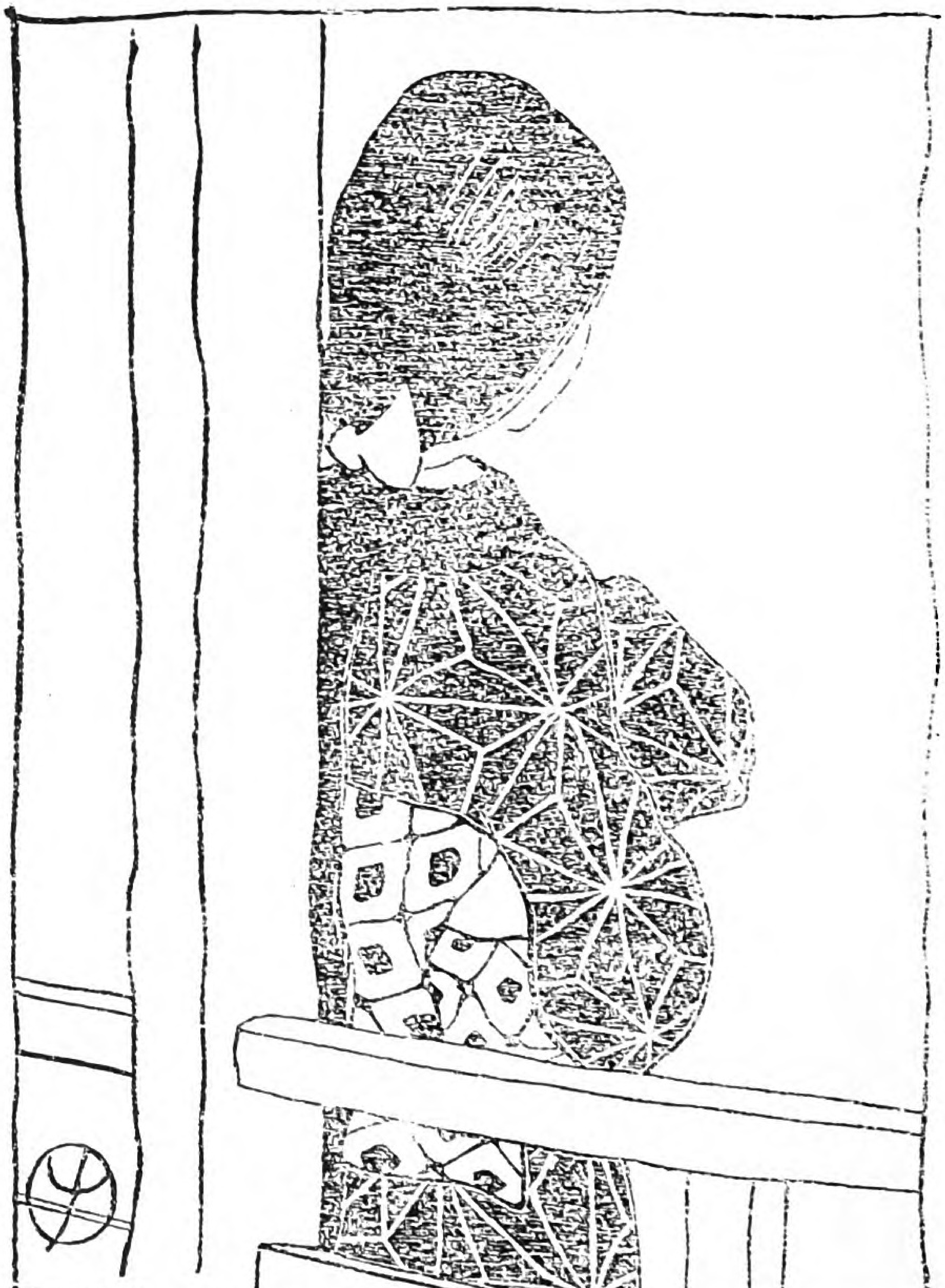
生活難の結果、女子の嫁入口の少くなるのも當然だ昔は聟八人に嫁一人と云つたものが、今は聟一人に嫁八人と云つた有樣で、此處に到ると全く女子の價値がない。女子をして價値あらしむるには、何うしても其天賦を自覺し、發揮せしめねばならない。

第一、女子の方から結婚を申込むといふことからして間違つてゐる、花は咲いてさへ居れば、蝶や蜂は飛んで來る、花の方から蝶や蜂を求めには行かない。

見る人の心々にまかせ置きて高嶺にすめる秋の夜の月

といふ歌の通り、女は見る人々の心々に任せて置いて高嶺に輝く月となつて居れば好い。自分に價値さへあれば美しい花とも譬へられ照る月とも思はれ、男子は蜜蜂の如く花を慕つて來るし、また仰いで其月の光を見るであらう。

一方から考へて、然う女子が獨立した態度を取つた場合には、オルドメイトが多くなつて、人口の增殖上憂ふべきことだと云ふ人があるかも知れないが、それは殆んど杞憂に過ぎない。結婚は人性の自然の現象であつて、假令法律で禁じやうが、道德で止めやうが、人性の結婚が無くなる憂はない。尤も少しはオルドメイトが增加しても關はん、結婚する女が少くなれば、男子の方で妻を得ることが困難だと云ふので、自ら女子を大切にするやうになる、之れ頓て女子の地位、價値の高くなる所以である。



女の地位を高めるものは、女自らの外にない空しき聲を高くするのは、嘲笑を招くだけだが、根本から女子の地位を高めて行くのは、今後の新しい時代の婦人の力に待つ外はない。

自ら求むる生活の不安

女子高等師範學校校長　中川謙二郎

生活の不安と云ふ事に就いては、私は事實をくはしく知つては居りませんが、果して、生活の不安と云ふ心配が若き婦人達にあるならば、それは本人の爲めに氣の毒な事であります。一體不安と云ふものはどういふ場合にでも決して好い結果を持つて來るものではありません。如何なる場合の不安にしても、其れは多くは自ら求めるのであつて必然のものではありません。いつも自身で作るものであります。私は當人の心の持ち樣一つで其の不安の狀態から逃れる事が出來るであらうと思ふのであります。

それはどうかと云ふと先づ自分で自分を顧みると云ふ事が必要であります。自分で自分を知ると云ふ事は困難なもの丶樣に普通考へられてをりますが、決して絶對に出來ない事はない。訓練次第で自分を見る事が出來る樣になると、不安を感じなくなるでありませう。

今一つは自分を正しく見て貰ふ樣にする、間違つて自分を見られぬ樣に、自分を露出する樣にする必要があります。あくまでも誤られぬやうに正しく解釋せられる樣にすると同時に、他人を見ると云ふ修養がなければならないのであります。人を見ると云ふ事にも是

れ又一種の力を要する譯でありますが、自ら努めて此の三つの用意を起點にしてゆけば、恐らく不安を感じる事はなくなるだらうと思ふのであります。

どうも生活の不安に限らず、若い婦人達はさう想像を畫いて不安を感じてゐる樣な事が多いのはまだ世界の狀態をよく知らず、人を見る事も、自分で自分を見る事も出來ないからであらうと思ひます。

もつとも生活の不安と云ふ事は獨身生活にはあり易い事だらうと思ひます。アメリカ人等には其の種の例は多いが、實際、獨身生活をする人に取つてはある條件がない限りは不安なものに違ひありません。親も兄弟にも離れて居る。而して夫もない。子もないと云ふ孤立の境遇にあるのだから、不安を生じるのは當然でありませう。

此れ等の事を考へる時は、私は一般の人は必らず結婚をしなければならぬものだと考へます。ある事情の下によんどころなく、結婚をしない人とか、よほど特別の才能がある人が結婚をするよりも一つ何か仕事をして社會の爲めに盡さうとか云ふ一人一人の上については強いて結婚をせよとは云ひませぬが、實際獨身で年を取つた人について聞くと、悲慘な感じがする事があります。

矢張人間は社交的に生れて居るので一人社會から離れて居るよりも世の中に入つて段々箇性を磨かれて行くのが當然であります。

つまり特別の境遇にゐて自分は醫者になつて世の中の爲めに盡さうと云ふ樣に考へる婦人とか、或は其の他の事情のある一人一人については止めはしないが、世間一般としては矢張婦人は結婚すべきものゝ而して天職を果たすべきものだと思ふのであります。

兎に角世の中は大體に於てよくなりつゝあります。從來考へなかつたところの問題を、樣々の方面から新らしく考へる樣になつて來たと云ふ意味に於いても亦よろこぶべき事であります。



無名婦人傳

（七）母が人の妾であつたばかりに子供の時から涙の乾く暇もなつかた敎師の妻

武子（岡山）

明治三十五年、私がまだ東京に居た頃、近所に非常に仲よくして居た小富さんと云ふ人がありました。小富さんは、すなほなおとなしい子で、私より一つ年上でした、尋常二年の半ば頃迄は、雨の日風の日學校通ひに誘ひあひ長夜のつれ〴〵に、今はモウ亡き數になりました宅の祖母が、松山鏡の話なんかしますと、大變熱心に聞いた人で、今も尚ほ其顔が目に見える樣です。日曜日にはよく湯島天神などに遊びにいつたものでした。小富さんのお母さんは、元京の藝者だつたのが東京の某紳士に身受されて妾として私の近所に御出でしたが、そう云ふ人に似合はぬおとなしい人で、小富さんは其間に出來た子なんです。私も幼い時でよく覺えませんが、其の年の八月十七日の夜だとたしか思ひます。小富さんのお母さんとお父さんなる人と、はげしい爭をなすつて、小富さんは泣いて私の家へ飛んで來ましたつけ。それから小富さんはお母さんと、近在の方へこしておしまひなすつた。あとで聞ますと、小富さんのお母さんは其紳士と別れてしまつたんですと其後私はまもなく當地に來てしまつて絶えて樣子を存じませんでしたが、或機會から十年ぶりに友より、なつかしい小富さんの消息をきゝました。

さても其の後小富さんの内には之と云ふ親族もないのでお母さんと二人、東京府下に淋しく、毎日お母さんは人様の洗濯やお裁縫をして、かよわき腕に小富さんを何でも近在の小學校に引續きあげて入らつしやつたんですが、あゝそれは暫くの間でした。翌年の春未だ淺き如月二日、お母さんは心臓と云ふ病氣で、はかなく此世をお去りになりました、小富さんは木から落ちた小猿の如く、たよりなき身になりました

小富さんは、やつと十歳でした、お母さんの死と共に小富さんは、すぐお父さんの××家に引取られたのです。此××家には小富さんに義理の姉さんに當る華子つて云ふ人と、この人のお母様の靜代つて云ふお方と、三人の下女と六人家内、父は日中は不在勝ちで「お前は妾の子だよ子だよ」と華子さんは云ひ、又あざけりの目を見はつて落度あれかしと願つてる下女、其間に立つた小富さんの苦勞は中々ではありません。しかし義理のお母さん其の人は小富々々と可愛がつて下さるので、小富さんは嬉しく思つてをりました。が、これも暫らくの間でこのお母さんは流行病で死まして、次に向へられたお母さんは華子さんには伯母さんにあたる人で、こんどのお母さんは、全く反對で小富さんを大層嫌つて、さなきだによからず思つて居た華子さんや、下女と一所にな



つて萬事小富さんに、つらくおあたりでした。尋常卒業だけで其後は朝はとく起き、夜はおそく床につき、氣苦勞しつゝお裁縫に通ふ事五年、花の朝に、秋の夕に人知れずどれ位涙をしぼつた事でしやう。かうして居る內、諸方より緣談持ち上り、其內に某軍人あり、小富さんのしほらしい事をいづくよりか聞てぜひにと申込み、父は良緣なりと云ひ、小富さんも異義のあらうはずなく、新生涯に入るのを心ひそかに樂しんで居りましたのに伯母さんと華子さんは、小富には過た結婚、釣合はぬのは不緣の基だとか何とか云ふて、破談にせんと人を以て、其軍人に私におとなしい小富を惡く云ひ、あまつさへ彼れは身元も知れぬ女で妾の子だとつげたので、たうとう破談になりました。まもなくこんどは敎員から緣談の話ありしに、お母さんに異義あり破談となり、次に銀行員より話しがありしも、妾の子と云ふ三字のもとに破談となりました。其內華子さんには、他家より養子を迎へたので、益々居づらく成つて、私が出たらお母さんも華子さんも滿足でしやうと思つて幾度か家出せんと思つてる內、中國の田舍の敎師と婚約が成り、十八の末結婚式をあげ、今年の七月、玉の如き男子出生、只今は空氣の淸い田舍に、自然を友として靜にお子さんの成長をいのつてをられます。そして只今も里方の伯母さん華子さんを、露怨まず「お母樣お姉樣」としたしんで、何か事があれば、きつと相談に出かけられますつて、どこまでお美しい心でしやう。長い十一年間の此消息を聞まして、私は本當に涙にむせびました、居所もわかりましたので早速手紙を出した所、くわしい〳〵返事がまゐりました其の末に「私もこんど男の子が出來ましたが、今からこんな事を云ふてお笑ひかも知れませんが私はこの子には妾なんて云ふものは一生もたせまいと、かたく心に決してをります」私はもつともだと思ひまして、又袖をぬらしました。

（八）十一の歲から奉公して六十歲の今日まで主家の恩を一日も忘れぬ健氣な婦人

行く雲（德島）

さきは根井と云ふ小さい漁村に生れまして、十一の時私の母の守として、初めて私の祖母に使はれる事となりました。尤もさきの母も、元は私の家に使はれて

ゐたさうであります。
一人子の我まゝに育ちましたのでと、さきの母も心配してゐましたが、そんな事は藥にしたくもありませんで、やさしうよく仕へて、私の母を大事に、世に云ふ子守根生と云ふ樣なものは少しも持ちませずさう云ふ風で御座いますから、他の女中達にも「おさきさんおさきさん」と、可愛がられてゐました。

その內に、母もだん〳〵大きくなり歩く樣になりました、其頃からさきは、しかたのない樣な短い絲くづでも、拾つて大切に貯へてゐました、不思議がつて尋ねても只笑つてゐますので、別に氣にもとめませんでしたが、後にはそれが立派な反物となりました



ふとん等には却つて結構で御座います。宅ではその切れを今も尙しまつてあります。十五やそこらの小供の心掛けとも思はれないと、祖母はよく申して、ほめてゐます。

其內に年も立つてさきは二十になりました。

其時は私の家も百姓をいたしてゐました。

私が生れました時は、もう田地を小作に預けてありましたので、お恥かしう御座いますが、百姓の事等は少しも存じませんが、其年は何でも日照が長く續きまして、例はあふれる計りある小川の水もわづかですので、皆爭そつて水車で入れたさうですが、小川の事とて水に限りあり、稻は枯れかゝりましたが、ひとり

不思議に宅の稲のみは、水の不足がなく立派に植つけが出來ました。村の人々は皆「××の田地はどうも不思議な神樣でとだ」と云ひ合ひました。

あゝそれも皆さきの働きにあらうとは。？

二十のかよわい女の身で、毎夜人の寢靜まる頃、そつと家をぬけ出で丶、水車をふみに行つてゐたとの事が後にしれました。

これが世の常の女の、出來得る業でありませうか。さきはいつも「主人の物は、自分の物と思へ」と云ふ事を申してゐましたさうで御座います。何しろ夜半は水を田に入れる者がありませんので小川には有餘る程水はありましたのです。自分の田地さへ、夜は水を入れる者もない、まして女中のなか〱一通りの業ではありません。

それに又、他の女中は、夜を樂しんで色々つまらん遊びをいたしますが、さきは自分の淺學を悲しんで、毎夜かゝさず、米をつきながら勉強したとの事であります。

私の祖母も、さきには非常に、よく目を掛けて、歸したくないので御座いましたが、だん〱年は長けると、氣をもみまして、お別れ申たくないと、泣いて賴むさきを、よくとき聞せて、二十八で養子を迎へてやりまして、涙をのんで暇を取らせたと申ます。

今はさきも村で相當の生活をして、六十に餘つても今尙益々壯健に、時には濱へ出て、荒男にまじつて細引さへするとの事です。又それでいて嫁には大さうやさしう可愛がつて、又嫁も「お母さんお母さん」と何から何迄、相談すると、いつもよろこんで可愛い二人の孫の手を引いて、必らず月に一度や二度は私の家に遊びに參りますが、參りましてもお客樣らしくせられては氣持が惡いとか何とか申して、下女と一緒に一日色々な用事を手傳つてくれまして、夕方歸ります年取つた祖母は、口ぐせの樣に、「私はこの年になるがまだあんな下女はどこにもみない」つて申してゐますめづらしい、やさしい、美しい、はた男々しい、女ではありませんか。

さきが家のためにつくしてくれました事は、なかなか此拙い筆に書つくす事は出來ません。

私の家の今日あるのも、少からずさきの力に由つたのだと思つてゐます。

（九）幼少より男手に育てられて藝が身を助ける不幸の境遇に陷りし母の前半生

中西りか子（備中）

櫻さく春のこと、久方ぶりに姉の家に親子づれで押かけて行つたのでした。その夜雨がどしやぶりに降つて明るいランプの灯影にとけた四人の手に、紅模樣の九谷燒きのさかづきは交る〲廻りつ〻あつたので——

『ねえ、一つきかして下さい、是非、久しぶりに耳の掃除をして見たいぢやありませんか、はるうさめーのチンチンハ：：ハ：』をきりかけにぐつと呑み干して母にさしながら、兄は揚氣にさわぐのでした。



『かれてれ十何年手にせんのやよつてなあ』といひながら、それでも否みもせず母は右の手頸にちよつと唾をつけて三味をとるのでした。きゝ人は食卓をぐるりととりまいて眞中におかれた花ランプのまたゝきに、瀬戸燒の皿に赤や青の色彩が美しくかゞやくのでした・・・

雨に吸はれる母の美しい聲は細くながくつながつて雨はしとくと降りしきる私はふつと母の前半生の悲しい歴史を思ひ出して張氣な唄の中に、どてか〻悲慘な歴史がつきまとつてるやうで樣々な思ひ出を胸

にゐがいたので――

三石の物恐しい隧道を出て三四の驛を過ぎた小驛を離れて、色の濃い松の馬場の果に母は生れました。××の中田といへば、あゝ、と誰でも點頭く位な、大きな『くわぶろや』に六人の兄妹の眞中で、母はすぐれて美しく、しかも何不自由もなくすく／＼と麥の穗が暢びるやうに生立つたのであつた。然しその幸福は僅か六年で砂上の樓閣よりもまだ、もろくも破れたのでした。生母の死！傾きかけたる家產、これらが重りつもつて六人の忘れがたみを抱へた、男やもめの家政の切りもりは目もあてられぬでとくみじめなものであつた。三人の女子には三味を、三人の男の子には張子の虎を、かくしてその六人のいぢらしくいぢけた樣子をながめつゝ大人氣のないだん／＼と衰微して行く家に凝つと、思ひに沈んだ祖父の氣のよわい風を私はいつも／＼涙ぐめるのであつた。夕日が赤く××山に落ちて行く頃、菜の花をきざんだのや、たんぽゝの莖など千切つた飯事の道具をそろ／＼としまひかけて、日が暮れると祖父は六人の子の眞中に臥せつて、『ヨー――向ふの方からどん／＼と流れてきた。も一つ來い定一にやろ、も一つ來いよお小夜にやる…ウン、よし／＼まてよ、もつとこいお高にやる――』これが毎晚の添寢の乳で、やがては親も子もすや／＼と寢入つてしまふ。こんなあはれな生活をつゞけて母は十二三になりました。祖父はみるかげもない我子のみすぼらしい姿が眼について秋のくれのこと『そら、買つてきたぞ』と勇ましくも新らしい反物、絲もなければ裏地もない、けれどうれしさに裁つだけは隣の小母樣に手傳つてもらつてまもなくできあがつたものを、うれしさに隣へもつて行つた。『えらい早うおできだすな』小母樣はかういひながら見終つてオイ／＼なき出したのでした。『母親のないお子つてこんなもんかいなほんとにな、おいとしなげに、みなはれや衽がないさかいかう早うできましたんや』今でも母は此失敗をくり返して私たちを咽ばすのでした。

にべも艶もない生活に飽き果てゝ祖父は後妻を求めました。六人も繼つ子があつて、かてゝ加へてだんだん衰弱してゆく昔堅氣な家に何でものずきに來よう。

それでも殘つた財產を目掛けて六人もの後妻が入り替り立ち代りきたのでしたけれど、みな勝手に衣服や金錢を持て逃て了ひ、七人目の人には死なれ、遂に世は亂れし家庭から世の浮き波に漂ひ出たのでした。

東京往來 下

皇城一週記

外島浪之介



▼「我庵は松原遠く海近く富士の高根を軒端にぞ見る」とは太田道灌が始めて江戶城を造營して己が居館靜勝軒から武藏野の風景を展望して詠んだ有名な歌であるが、其以前は鶉鳴き、雲雀居るうけらが花の野の末で海に面した丘のさきであつた。其處へ立派？な江戶城は建てられた。然し、五百年も昔の事であるから例令道灌及び父道眞が當時の大築城家であつても、其が大したものでなかつた事は當然であらう。然し當時城郭は山上に建てるべきものであつたのを、始めて平野（多少の丘はあるが）に建てた卓見は認めなければならない。

▼始め道灌の築城した位置は、今の舊本丸と舊西丸（今の大奧の邊）一帶で、郭內には、竹林も、梅林も、神社も、山も、家來の住居もあつた。本城は舊本丸（半藏方面）邊の高處にあり、居館は舊西丸（二重橋方面）邊にあつた。そして戰爭の時、立籠るべく本丸へ行くには堀を一つ（三の丸）空濠を二つ（二の丸、一の丸）越えて石段を登らなければならないと云ふ。それ等の經營を滿一ケ年で成就し得たのは、現今の四分の一の大さであつたから出來たのであらう。

▼道灌自身は江戶鄉に建てた故、江戶城と謂ふが又平河城（麹町に同名の町あり）千代田城（二重橋外楠木銅像邊其町名あり）向岡城（參謀本部の丘の昔名）などと古い文書に稱へて居る。文明十八年道灌、上杉定正に殺されてからは、上杉の臣曾我豐後守等代官として城を守り、上杉が亡び北條時代には遠山丹波守其他兩三の代官が守つて居たが小田原城陷ちゐると

同時に、江戸城は豐臣秀吉の手に歸し、天正十八年四月に德川家康が關東八州の大守に任ぜられたので、慧眼なる家康は、衆議を排し、一家老の城であつた江戸城を居城としたが、(江戸城が出來てからそれ迄恰當百三十五年である)。家康が堂々と小田原門(今の櫻田門)を這入つて大手(今の內櫻田門)から毀れかゝつた古城に乘り込んだのが同十八年八月である。歷史家は此事を「關東御入國」「關東御打ち入り」などゝ云つて居る。

▼所謂「關東御入國」當時の江戸城内は、「侍共の屋敷多く皆こけら葺でもなく木曾そぎなどで、寺なども二三ケ所有之。館の臺所はかやぶきにて大きけれど古く云云」とか「西の丸邊は田畑多く、春は桃櫻つゝじなどの花も咲き云々」などとあつて、城の內外は、靈岩夜話によると「今の坂下門邊から平川門邊は土壁の塀で、その他の土手の上には竹や木が茂り、四五ヶ所ばかりは海端に出入する處がある」と云ふ。地圖を見ると今の中堀(和田倉、馬場先)から東南一帶は遠淺ながら、舟の往來が出來る海であつて、入口としては今の櫻田に板戸の無い門があつて、今の二重橋前へ出る位であつたらしい。

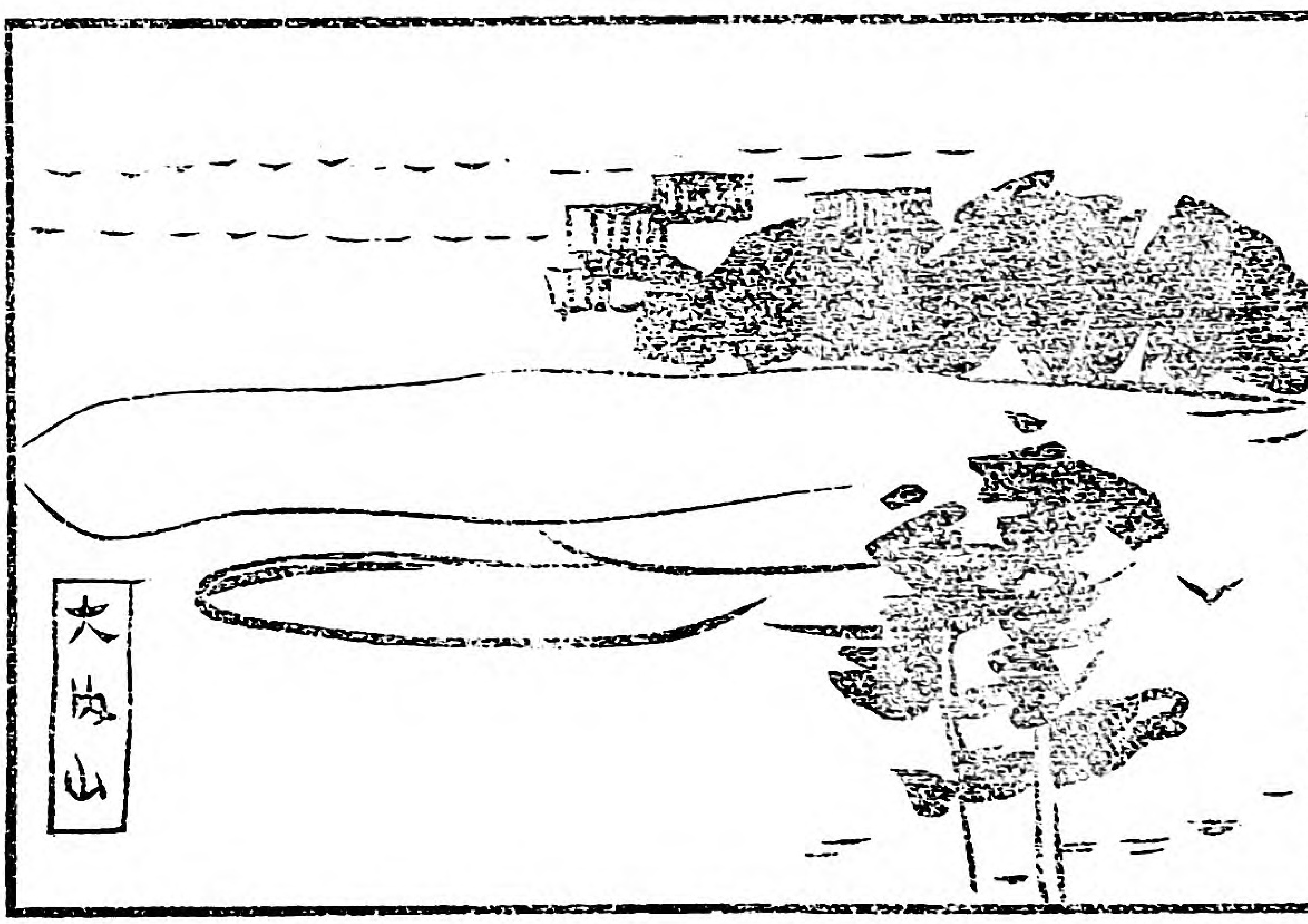
▼今、二重橋前から、櫻田門を出發地として馬場先、和田倉、竹橋、田安門、半藏、三宅坂と云ふ順に、德川時代の變遷を略述して見ようと思ふが、天正、文祿、慶長の十數年間に渉つた修築工事があり、又、關八州の大守から將軍になつたその前後であるからそのつもりで見て貰ひたい、猶、此處に丸の內と稱するのは田安門、一つ橋、神田橋、常盤橋、八重洲橋、數寄屋橋、幸橋、虎門の內を云ひ、祝田、寶田、元千代田を唯宮城前と云ふ事も記憶してもらひたい。

▼天正年間二重橋前の廣場は馬置所であつた。馬場先門の名に今は殘つて居る、前述の如く今の帝國劇場や三菱原の邊は海であつたから、宮城正門の道の南岸(今の祝田町)荷物揚場で北岸は今の(寶田町)は人足や人人の寄合所になつて居た。同じく和田倉門內の帝室林野管理局の邊は僧侶の居た處で、巡査派出所の處は(今の元千代田町の一部)は米藏であつた。和田倉門の名

は此から出た。古く御倉門と云つたらしい。

▼櫻田門、元は小田原門と云ふ日比谷公園の邊は海岸故、物揚場があり、肴屋や、網屋などの板屋が多かつた。海を埋めてから今の日比谷の電車交叉點の處に日比谷見附があつて、そこから幸橋迄今の電車道路に添ふて堀であつた。公園内の池は昔の儘の一部を保存したので石崖も昔の儘である。

▼三宅坂や、神田の駿河臺の土で海を埋め、足りぬ處は堀を深くしたり、幅をひろげたりしてその土を盛つて、大名の屋敷にした。今の龍の口の電車の敷石の置いてある邊には、二三の寺が有つたのを取り除けて始めは第二の倉を建てた。文



部省の處は第三の倉で、竹橋の西は大きな竹林であつた。

▼九段坂から半藏、三宅坂、櫻田門までの濠は道灌時代にはなかつた。徳川になつて掘られたので、その土を今の丸の内の大部分を埋めたり盛り土に使用した。始めは幅十間位であつたのを第二回めに現今の廣さに掘にして底も深くした。

▼斯くして海を埋め濠を掘り、神社佛閣民屋を他に轉じさせ、土木工事が終つてから各大名小名に屋敷の割當てをした。

▼太田道灌時代の土手は元より、新に出來た土手は皆伊豆から石を運搬したのである。土木工事、石の運搬、土手の上松樹等殆ど大部分は大名の負擔で

あつた。

▼今電車から外濠の土手を見ると、石崖などの破損したのがあるが、之は電車の振動によるので明治三十年頃迄は、一回もかゝる不體裁な事はなく、蟠龍の如き老松と、透間の多い石崖は昔のまゝに、三百年の努力を物語つて居た。

▼昔の石崖の組立は縦の石と横の石と大と小とを相互に組合してある。今のは面積の廣い方のみ表面にしてあるから、雨でも少し降ると膨脹んで、直に毀れる。今見附の石崖の石の間に鋼鐵の大きな釘が澤山さしてあるので感心したが、老人に聞くと、徳川時代には、往來に雪駄の鐵が落ちて居るのを石の間に挾むと、身體が健全になると云ふ迷信があつて、決して釘ではないと云ふことである。

▼教科書的に現今の宮城の位置を云ふと「四圍悉く麴町區に屬し、東方は元衛町、大手町、元千代田町、寶田町、祝田町、西は隼町、山本町、麴町一丁目、元園町、五番町、南は外櫻田町、永田町、北は一番町、代官町、竹平町」と云ふ様に東京の人でも知らぬ様な町の名があるのは、總稱して之を丸の內と云ひ、又その丸の內には公私の大建築や空地の多い爲である。

▼參謀本部の地圖によると、櫻田門から一週して半藏竹橋、九段、平河橋、和田倉、櫻田の堀の長さは約そ一里半强あると云ふ。

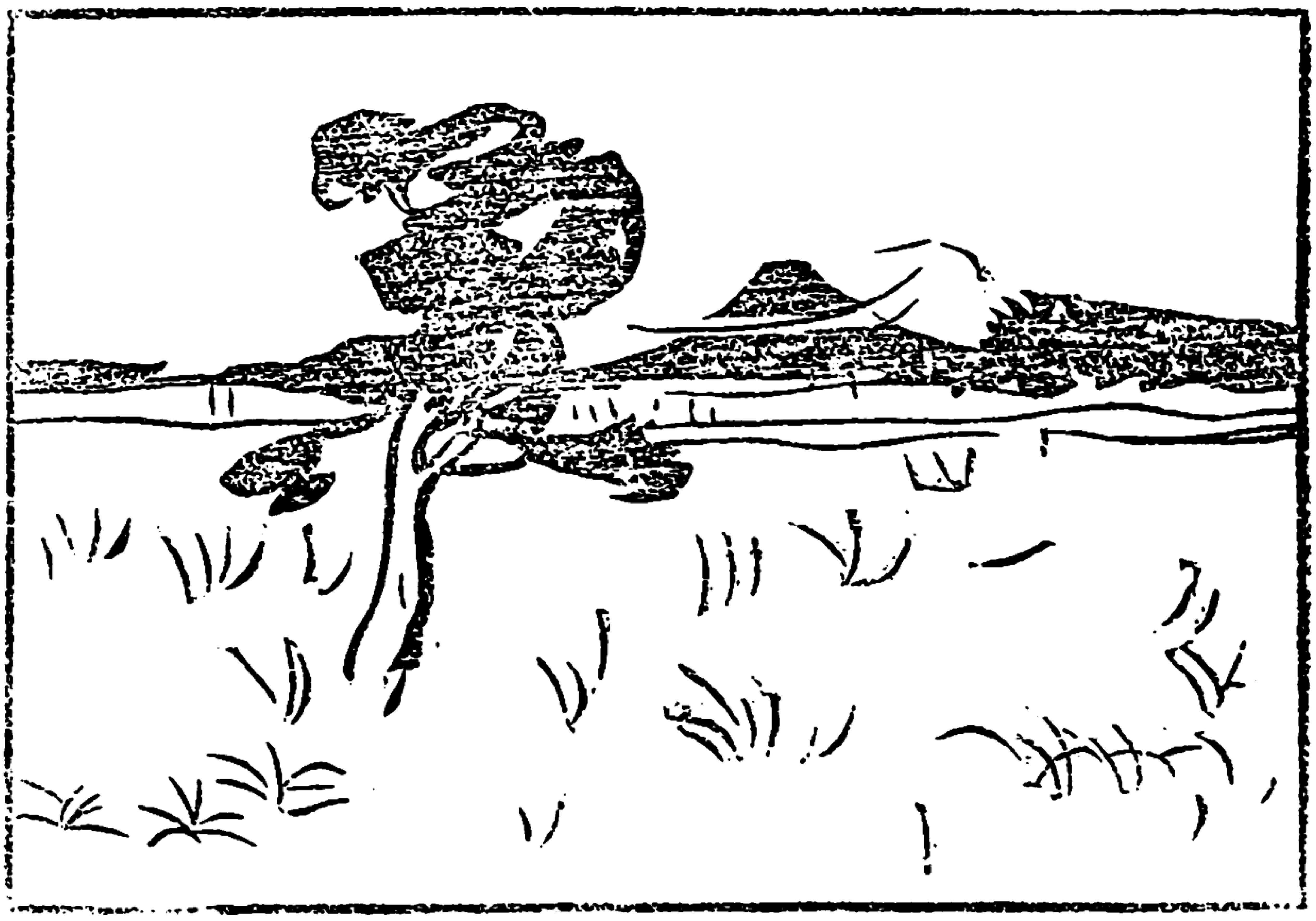
▼二重橋は宮城の正門で　陛下の外は皇族殿下及び臣下は特別の事情、正式公式の參內の外は通行を許されない、臣下としては破格な事で、近くは東郷大將の凱旋の時と、伊藤公爵の朝鮮併合後の二回のみであつたと思ふ。

▼二重橋は橋が二つある故二重橋と稱するので、眼鏡の様な石橋のみを云ふのではない。二重橋前に佇んで城內を拜すと、坂下門と正門の間邊に高い櫓が松樹の間に見える。伏見櫓又富士見櫓と云ひ、徳川の時、伏見城から轉したのである。參謀本部の邊から皇城を拜すと一二の建物が見える。日清、日露の記念館であらう三宅坂から半藏門にかけての森は、所謂吹上御苑のあ

たんぼで、山あり、川あり、四季の花が盛りであらうと思はれる。

▼東京市史によると、舊西丸か宮殿でその東、坂下門の方に宮内省、舊本丸の天主閣が中央氣象臺、その他は空地で、元の二の丸、三の丸に内藏寮、宗務寮調度寮、内閣、主馬寮等の各役所があると云ふ。

▼今の御内苑は、元は紅葉山と舟見山の二つの丘があつて、自然の美を備へて居たと云ふ、茲に金澤文庫の書籍と、徳川の書籍を集めて文庫を建てたのが有名な紅葉山文庫で、今は内閣に屬し、内閣文庫と稱し、その所藏本を内閣本と呼んで居た、今は三年町、虎の門の女學館の側、御料局の處にある。



▼太田道灌以來竹藪であつた處で今も大きな竹林をなしてる處は、宮城内にある。通用門から半藏の新見附に行く堀の内に見えるのが五百年も經たそれである。

▼宮城の入口は正門より右に廻りて坂下門、大手門、平河門、清水門、通用門、半藏門、の七ヶ所ある。

▼徳川時代から今日迄宮城には螢が多い、加ふるに近郊二三の小學生が日露戰爭以後、毎年初夏に二重橋々畔に數十萬の螢を放すので益々多くなつた、夏の夕暮丸の内を通ると必ず點々として清光を放つて居る。

▼東京市内に橋梁も多いが、交通の頻々たる今日では、殆ど半が鐵や石になつたけれど

宮城の橋の大半は日本式の木橋である。橋の灣曲せる形や、青銅の擬寶珠を見ては何となく昔がなつかしくなる。又、今も徳川の儘の城門の形の殘つて居るのは和田倉門、田安門、のみで其他三十六門の內には全く形のなきもの多く、或は升形のみ有し、又石崖の一部のみ在ると云ふ有樣で、益々昔の面影は無くなり、唯龍の口とか日比谷御門の如く名にのみ存せる樣になつてしまつた。

▼現在の宮城前は全部芝原で小松が生えてゐる。建物としては大阪の住友が建てた楠氏の銅像が日比谷寄にあるのと、和田倉の方に帝室林野管理局があるのみであるが、その外になると官署のみが多い。先づ櫻田門外には司法省、大審院、控訴院、地方裁判所、海軍省同大臣官舍、貴衆兩院議事堂及び議長官舍、外務省、露國大使館、伊太利公使館、御料局、日比谷公園、海城中學、第一中學、華族會館、勸業銀行、帝國ホテル太神宮、內務大臣官舍、三井集會所があり。馬場先から和田倉の方面には元海であつた處に警視廳、帝國劇場、東京府廳、東京市役所、商業會議所及び郵船、古川鑛山、海上保險、明治保險、高田、生命保險等の諸會社、建築中の中央停車場があり、常盤橋、神田橋方面には本局電話交換局、鑛山監督所、地質檢査所、商工中學、大林區署、印刷局、稅務署、會計檢査院、憲兵司令部、內務省、大藏省。一の橋方面には騎兵聯隊の一部、文部省、佛國大使館等があり、竹橋內には、近衛步兵一二聯隊と、近衛師團經理部、一旅團司令部、近衛軍樂隊などがあり。御通用門外には馬上の北白川宮殿下の御銅像がある。更に半藏新見附を出れば、英國大使館、日本中學、衛戍病院、兵器本廠、三宅坂の方面には陸軍監督部、陸軍省、陸地測量部、參謀本部同所の前に有栖川宮殿下の御銅像があり。德川時代に有名な石の井戸清水の井戸と云ふ井戸が陸軍省の崖下にある。それ等數十の官私の建物に關する歷史地理的の説明は餘り專門的になるから除く。

▼要するにわが　皇城は、帝都の中央に在つて、濠の水と、高い石崖と。古い松樹とで輪廓を飾り、所々

の御門は、封建時代の城の跡を想はしめ、威嚴と、懷古と、壯麗と、廣濶とを兼具へてゐる、毎日其周圍を電車で往來してゐる人は、何とも思はなくなつてゐるだらうが、初めて見たる帝都の印象としては、わが皇城の如きは尤も嚴肅なものであらう、而かも東京の東京たる所以は、實に此皇城の嚴存にある。

附けて云ふ、宮城の外に帝都の內外に在る離宮御料地等を知らんと欲する讀者も多からう、此處に其所在地だけを附記す。

青山離宮（今上天皇御座所、赤坂區青山）。御產所（青山、現今は三皇子御座所）。赤坂御所（四谷、明治初年皇城炎上の砌大行天皇の御座所たり）。元東宮御所（四谷、新築西洋館）。新宿御苑新宿御料地。代々木御料地。豐島岡御陵（小石川音羽護國寺附近）。鳥居坂御用邸（麻布）。高輪御用邸（芝區高輪、內親王殿下御座所）。芝離宮（芝新錢座）。濱離宮（京橋區の濱邊）。霞關御用邸（麴町區霞關）。橋場御用邸（淺草區小松宮大妃御住居）

誄歌

大行天皇御葬儀の際に奏せらるべき誄歌は日本武尊が伊勢の能褒野に於て崩ぜられ給ひし時、后宮皇子達の御陵を遶つて泣き悲しみ給ひし御歌を千八百年の今日にそのまゝ復興されたるものである。

（一）なづきの、田の稻幹に、稻幹に、這ひ纏らふ、ところ蔓。

（二）淺篠原、腰惱む、天は行かず、足よ行くよ。

（三）海が行かば、腰惱む、大河原の、植ゑ草、海がはいさよふ。

（四）濱つ千鳥、濱よは行かず、磯傳ふ。

此の歌は、田の稻莖に、野老蔓の纒きつくが如く吾等は御墓を離れがたし、折柄尊は、八尋白千鳥と化つて空を翔り濱の方に飛び去り給ひしを泣く泣く御後を慕ひ奉り、翼なき身は空飛ぶ事もかなはねば篠原の中に腰を沒して足に任せて走るのみ。海に入つて追ひ奉らんとすれば腰も浸つて、河原の草の水に漂ふが如し、濱千鳥よ、濱より行かで何とて追ひ付き樣のない磯をのみ傳ひ行くことぞ。と云ふ意味である。



むかしの人

葵村

政さんはお妾であつた。八つの時から漢籍の素讀を習はせられて居た。私の眼に「お妾」の文字は樣々な色合をつけて映つて居た。然し政さんは水仙のやうな女であッた。色で云へばせめて水淺黃ぐらゐで、赤、桃色、紫と云ふやうな色氣は少しも無かッた。透きとほるやうに色が白く歌麿式の瓜實顔であつたが眼元と口元にいつも淋しい氣分が漂ッて居た。そしてその淋しい顔が時々甘えるやうに、にこッと微笑むとき、私はいつも、暮れ方の河原にぽッつり咲いた夕顔を思ひ出すのであッた。

政さんの室は二階の八疊であッた。政さんは火鉢の鐵器をぴかぴかに磨いて、メレンスの友禪の座布團にいつもきちんと坐つて居た。中學の二年と云へば私は既に十四であッた、羞恥性の私も漸々政さんに慣れて、いつも學校から歸ると繪具と木炭紙とを持つて二階へ昇ッて行くのが常であッた。

ある夕方であッた。南の窓を明けると千束町吉野町の立て込んだ瓦屋根に靄ともつかず夕闇ともつかず、ぼッと霞むで、その中に公園の明りが薄い茜をぼかして居る。十二階の下から吉原堤へかけて一列に赤い軒燈がほのめき初めて人や車の往き通ひが遠くに靡いて



聞える。私は物干に立ッて夜露にしッとりとして來た浴衣の肌ざわりをなつかしむで居た。俯いて下を見ると瓦斯の光が座敷から扇形に庭に映して、植込の槇の葉に最早夜露のきらめきが見える。とッと高笑の聲が靜まると三味線の撥音が冴えて聞える……

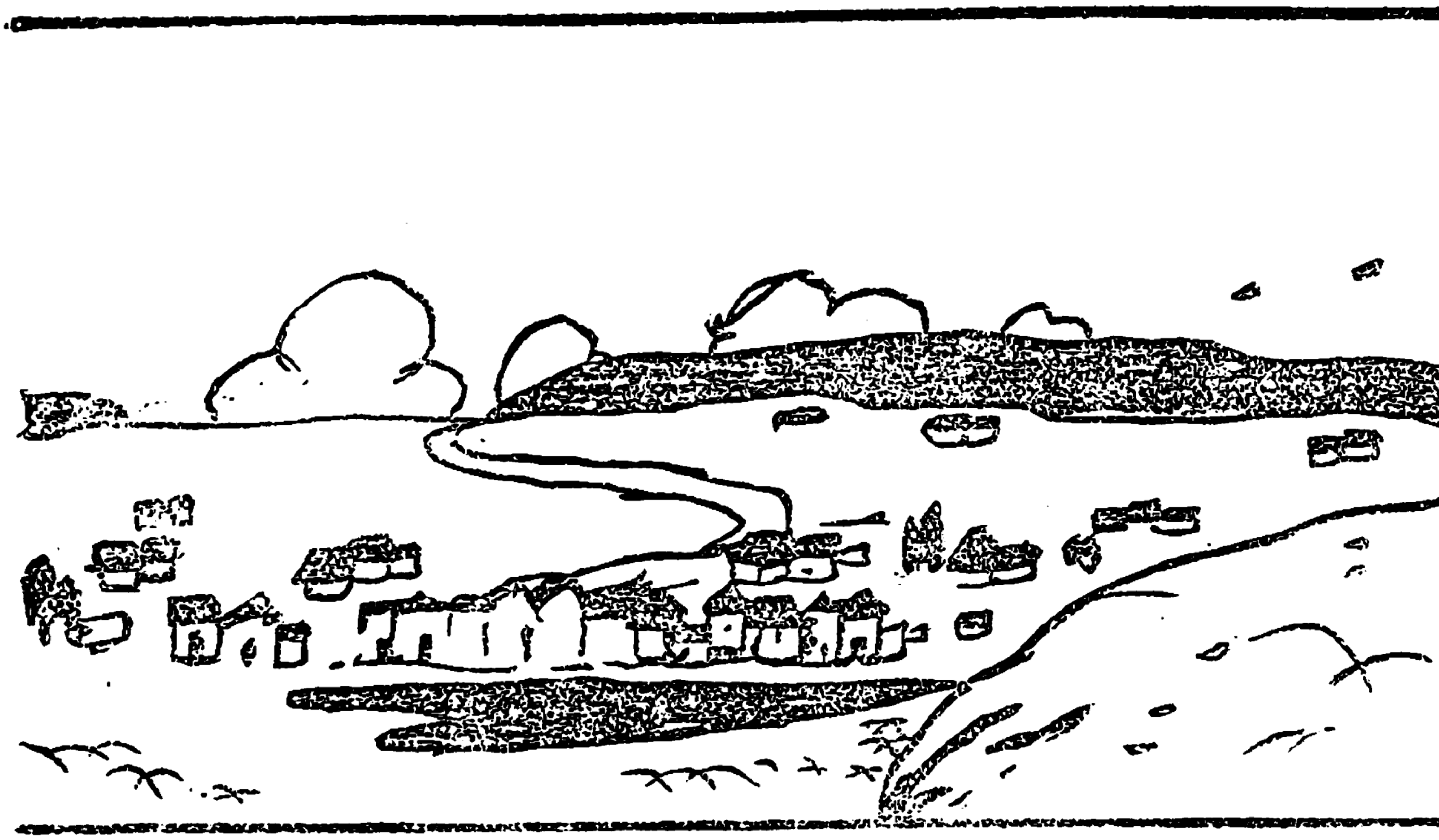
下階では例のお客樣があッてお酒が初まッたらしい。母樣は今に苦しい聲を振りたてゝ氣狂ひの樣に淨瑠璃を語ることであらう。父樣はまたをかしな踊を初めることであらう、それを見ると私を叱る時の顏が憎らしくッてたまらない。

私はそれらに背いて、たッたひとり物干に立ッて居る。最早杉板が足の裏に冷つてくなッてきた。而かもたッたひとり――島流にでもされたやうに立つて居る。然し私はその淋しいのがうれしかッた。なぜなれば私は酔ぱらッた父樣の手を無理に逃げて來たのであるから。

下では三味線のさんざめきに連れてどッと笑聲が崩れた。それを聞く度に、私の胸のなかの蟠りは益々堅くなるのを覺えた。幼い心が何となく胸一ッぱいになつた。

……と振り返ッて見ると何時かお湯から上つて來た政さんは爪立して岐阜提灯を檐に懸けて居た。そのすらりと流した樣な姿勢が何よりも美しく見える。

下階の賑やかさに比べて政さんは矢張り淋しい河原の夕顏であつた。二人は窓の敷居に腰を下して永く談し合ッて居た揚句、政さん



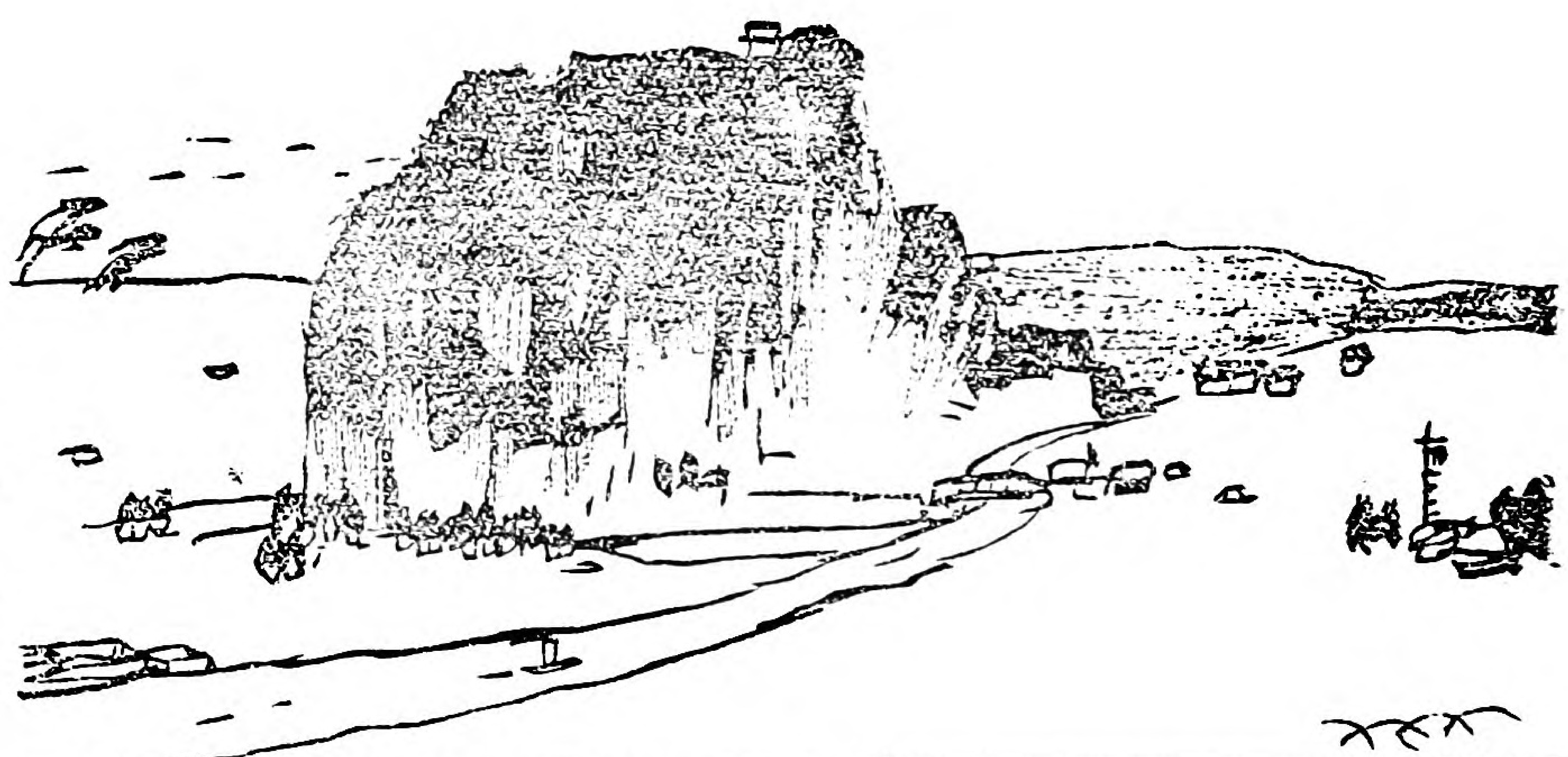
は言ひ辛さうにして居た唇を初めて開いた。
「だつて貴樣の本統の母樣ではないの」
私は只默つて居た。
「異つて居るお母樣？」
私は微かに點首いた。
「尤も、隨分年が違つて居るわね」
深い沈默が暫し續いた。恐らく政さんも私の胸の蟠まりを解して呉れたらう、深い嘆息をしながら、
「妾もね、隨分苦勞したのよ、稚さい時から」
政さんの言葉は私を慰めて呉れるよりは寧、私の涙を誘ふのであつた。

其後私は何時も政さんの室を隱れがにして居た。私は實の母の樣な政さんに甘えて居た。

その内に學期試驗が濟むだ。學校好きの政さんは私に何か御褒美を上げると云つた。そして私は『若菜集』と『落梅集』とをねだッた。二人は仲見世の本屋へそれを買ひに行つた。

初めて思ふ詩集を手にした時のうれしさは言ふ迄も無い。歸路の私は足が殆んど地につかなかッた。馳け出す樣にする私の手から『若菜集』を取ッた政さんは一寸披いて低聲に口誦むだ。

處女ぞ經ぬるおほかたの



われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河を見かへれば

政さんの焦れッたいくらゐ遅い足取は觀音堂の銀杏の樹の下まで來ると、ぱッたり止まッてしまッた。

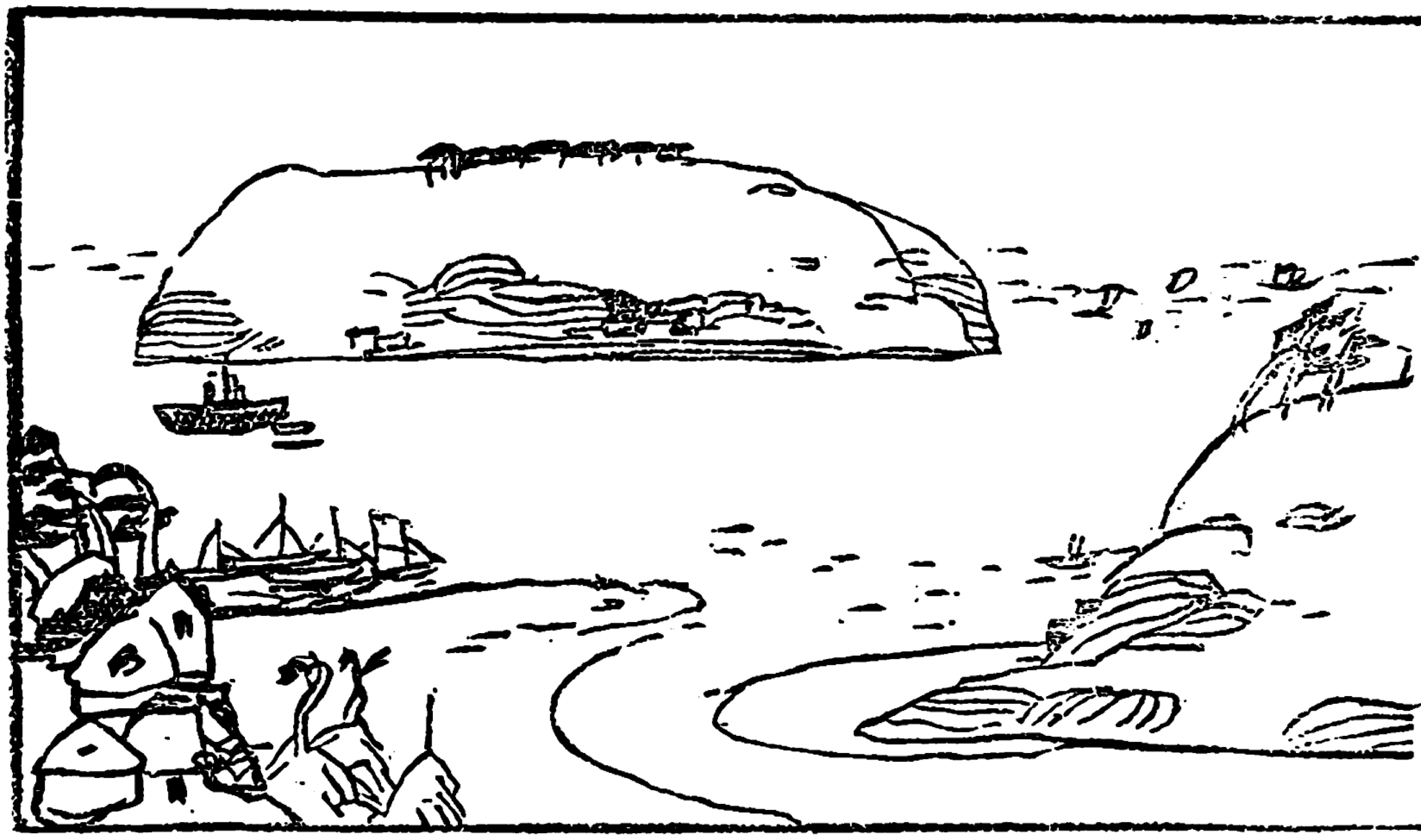
「なぜ、こんなに悲しさうな歌が好きなの」

堪へ兼ねたやうに本を閉ぢて私に渡した、私は再び同じ所を讀み返した。

「最早、家に歸ッてから讀みましやうね、雨が降ッつて來たわ」

政さんは琥珀の洋傘を開いて、浴衣の袂に私の頭を蔽ふた。思ひなしの爲か政さんの瞼には涙が浮かむで居たと思ッた。銀色の太陽が白い水蒸氣にかぶさッて見えながら、横に流れた藍鼠色の雲の一重から照り降り雨がぽつり〳〵と落ちて來た。二人の歩みは遅かッた。私はこの時初めて「詩の悲しみ」と云ふものを覺えた。

其後私は益々繼母と疎くなッて、政さんの室を只一と隠れがとして居た。夜はいつも政さんの床へ寝に行ッた。兄弟のやうに枕を並べてそしていつも『若菜集』を披げながら寝たものである。友禪の布團のなかに白い手に抱かれて、七五調のなだらかな調子に搖られて、病める少年の胸は靜かに眠るのであッた。



むかしの人

一年半餘りで政さんは家を出て行ッた。その間に怎麼な關係があッたか私は知りやうもない。學校へ宛てゝ私に送ッて呉れた手紙と寫眞を級友に見られて顏を赧めたことがあつたが、それには只仔細あッてお暇を頂くことになりました、妾は今小さい家を一軒借りて居ますから遊びに來て下さいと書いてあッた。

繼母は出て行ッた政さんを私の前で殊更に惡く言ッて居た。それが私には何よりも辛い事に思はれたが、就中政さんが娼妓上りであると聞かされた時には、私も少からず惑ふた。

疑問は面白くなく解決された。政さんに貰ッた手拭に「大文字、羽衣」と染めてあるのに氣がついた時、私は何と云ふ譯は無く欺されたと云ふ感じのするのを止め得なかッた。私はあれ程慕ッて居た政さんを、其後一度も訪ねなかッた、――政さんは矢張り泥田の者のやうな氣がしたので。

* * * * *

其後最早幾年になるであらう。破られたる家産の中に人になッた私は他を顧る暇がなかッた。一夜醉ふて前後を知らず、車上冷風に伴れて頰に落つる雨粒に醉眼を覺ました私は、ふと昔の政さんを思ふて懷舊の情に堪へない。泥とは何ぞ、清水とは何ぞ、私は政さんに遇ッて私の薄情を、さなり道學者の薄情を詫びなければならない。私は愛の負債を返さずに濟まッた。

夢のかたち

江森美子

何がために息せるかなと柔きをゆびの色をとがめ初めにき

安らさになれし手足を彼等如土にませなば命かはるや

かてみ行く一群ありき春の夜に三味線をひく青ざめし子を

動揺の限りに死なん其の後ちに我等が夢に形給ふや

御佛の如くも見ゆる老僧にやはらげられしかまくらの雨

たゝへつゝ一人一人にかゝへ見る古き寺院の圓柱かな

大寺の一間にほかげはなやぎてうち交りたる若き群かな

我が瞳空に遊べる日になりて海に別れぬ小さき海に

うす日さす墓場に赤くたゞよへるせきたんさんの匂ふ血液

強烈に燃ゆるひろ野の青草をうちすくみつゝ眺め居しかな

胸もはた瞳も空も青々と火の如燃えん青草の原

このまゝに死なば安しと深きふかき悶えのはてに横たはるかな

めでたけれ罵る者の無き日こそ王者にも似し胸を抱ける

みかへれば夢のやうにもつゞくかな其日そのひは安からざるに

マンドリンかなで給へり若人が顔よき子らの垣にまかれて

思ひあまる一人言をば清らにも神にさゝぐる祈りとぞしぬ

日月名所見立相撲

勸進元　伊勢　天の岩戸

差添人　信濃　姥捨山

日の方		
大關	伊勢	二見之浦
關脇	山城	紫震殿
小結	播磨	高砂浦
前頭	宇治	朝日山
前頭	彼岸	中日の入日
前頭	山城	日の岡
前頭	攝州	住吉の浦
前頭	江戸	霞ヶ關
前頭	遠州	汐見坂
前頭	伊勢	白子海
前頭	河内	生駒山
前頭	攝州	天保山
前頭	大阪	淀川
行司	兵庫	福原都

月の方		
大關	近江	石山
關脇	江戸	武藏野
小結	陸奥	象潟
前頭	山城	双ヶ岡
前頭	播磨	須磨
前頭	山城	廣澤
前頭	山城	嵯峨野
前頭	南都	三笠山
前頭	駿州	田子之浦
前頭	壹岐	和田之浦
前頭	紀伊	玉津島
前頭	大和	布留野
前頭	兵庫	和田之岬
頭取	八幡	八幡山

和漢浪風名所見立相撲

勸進元　紀伊　片男浪

差添人　伊勢　神風

浪の方		
大關	滋賀	漣浪
關脇	阿波	鳴戸
小結	播磨	舞子濱
前頭	陸奥	三尋窟
前頭	陸奥	中の汐
前頭	越後	親不知
前頭	紀伊	加田の浦
前頭	安藝	嚴島
前頭	相模	江の島
行司	安藝	舞頭瀬戸

風の方		
大關	秦	安房宮
關脇	山城	比叡山
小結	大和	有原の里
前頭	木曾	御嶽山
前頭	淮	野風
前頭	近江	園城寺
前頭	丹後	天の橋立
前頭	尾張	夜寒の里
前頭	江戸	土手八街
頭取	土佐	土佐山

（和田信二郎氏所有）

耳袋（九）

猿丸太夫

▲仙人掌が體中に水を貯へ、マルモットと二十日鼠が水を呑まずに生きてゐるのは、其の體が六分まで水だからである、われ〳〵人は太古から火を勝手に製つた、將來は必ず水を自由に製るやうにならねばならぬと、教授ダブルユーマツキー氏言ふ。僕おもんみらく、魚類は水中に生死するから人間も全くの水の世界に呼吸することが出來ねばならぬ、植物は土を喰つて生きてるのだから人間も生きながら腰から下を埋られたつて生きてられるだらう。

▲娘が年頃を過ぎても聟の來手が無いので、娘には濟まず、世間も耻かしと焦心せる五十親爺「おらも今でこそ小前だが、こんなでも村では山本の本家や西村の次だつた家柄だから、養子を取るばつて、せめて女學校（然り女學校也）位卒業して、カバン持て役場へ出るやうな男をと思ふのだ」と夜なべの繩ないか何かしながら言つてたのを例の夜になるとうろつく若い衆が窓の外に立つてゐてすつかり聞いて了つたからたまらない、それから村ではどんな年よりでも子供でもカバンを持つてると、近はん所へ聟にゆけると揶揄するまで一つばなしになつた。天縁空しからずやがて聟が來たさうだが、飾り立てた荷の中にカバンが有つたかどうか、つひそれは聞きそこねた。あるじの男は京都船井郡の人也。

▲人に知らさぬ物思ひを英吉利の田舍娘達は三日月さまに訴へる、三日月さまに願かけると必ず聽いて下さると彼等は信ずる、をかしいお呪ひは閉店する前の店で歌留多を買ふことであるさうすると必定良い聟がねを授かると彼等は信ずる。も一つはこれから結婚式に列しようとする花聟さんを、何處でもよいから一目見て、側目も振らず驅け戻る。そして自分の室へ人に知らさず入つてしまうと三四月中に必定嬉しい縁談が極まるものと信じて居る。印度では蛙を殺した娘は必ず一生涯亭主の運が惡いと信ぜられる。それからベンガル一帶の地方では、數多き蝶がヒラ〳〵と家の中に舞ひ込み飛び廻るとその家には近い中に縁談があると信ぜられる。もしその舞ひ込んだ蝶が家内の年頃の若い男女の誰れかの身を廻つて飛ぶと側のものはそーらお

前は近々いよ〳〵良いお嫁さんが出來ると言つて囃し立て、囃された人もさう信ずるのを常とする。三日月様に願かけてといふから日本にも新月に合掌する女はあるだらう、けれどランプに集つて身をこがす蝶（蛾）を見て嬉しがる者はどうだか。

▲ある村にでけ善といふ男あり、でけはどういふとてから來た綽名か知らず滿更水呑百姓でもないから常に羽織を着たがつて、野良へ行くにもカバンは離さず、不圖道で言葉をかけ合つたり、東西を聞かれたりすると、カバンからすぐと小さな手帳を出して先方の住所姓名を書留める。戸籍調の巡査ぢやなし、選擧には投票を頼むといふのでもあるまい、何をするのかと誰しも驚いて別れるが、でけ善は毎年十二月も押詰ると二人まで書記を雇うて一々年賀状を出すのである。貰つた人の中には何處で近づきになつた人だつたかと首をひねるのもあるといふ、こんなのは罪が無くていゝ。

▲田舎にはところ〴〵に新聞の投書箱が下げてある、ポストと間違つて葉書などはふり込むあわて者もあるさうだが、一所懸命の智惠をふるつて書いたらしい文がよく入れてある。「やたのをけやのしげてわをかくのあつかいかずたよつるエわをかくをけべつをするからいきませぬしげてわべぴたよしんぶんにだしてくださいねかいますよ」として三錢切手を貼つた表書に「なこやしのしんぶしやまではいたつたのみますどこでもよい」とあつたのが、名古屋新聞社へ配達されたのだお角といふ女が桶屋の重公（或はしげ子）に輕蔑（虐待？）されるのをはかなんで訴ふるところなき苦しさに新聞に縋つたのだらう、考へれば涙がこぼれる。

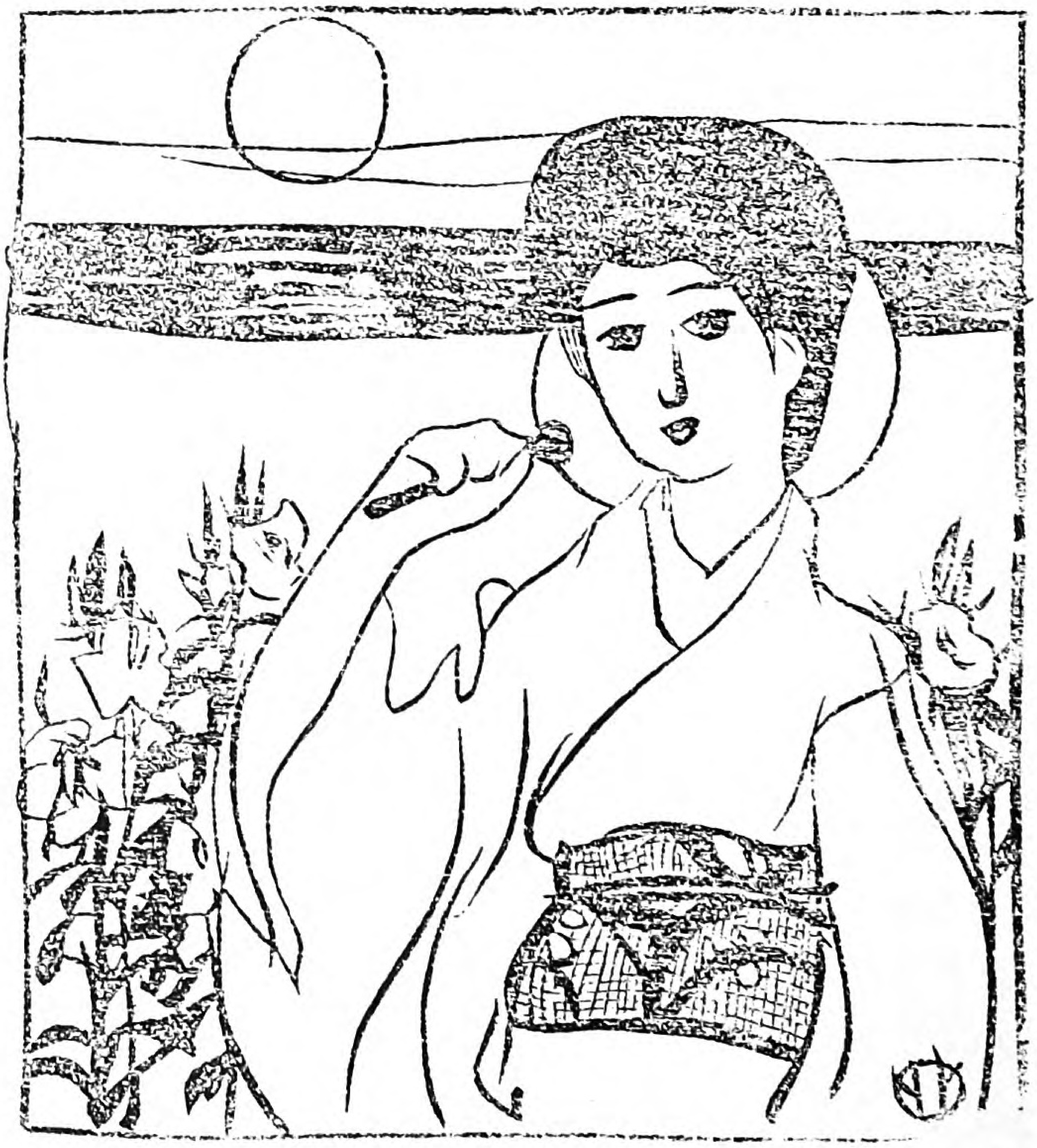
▲奈良縣宇智郡宇智村に、古くなつた疊よりは新しいのがいゝと十七になる女と、古い女房を取替ようとした男がある、三人の子供を置いて里へ逃て行つた女房にあてゝ、降參するから戻つてくれ、みねとは屹度手を切る、就ては手切金をやらならんから、十圓だけ持つて來てくれと言つてやると眞に受けて工面して持つては來たが中々おいそれとは金を出さない、宿六苦心慘澹して、情婦と心中の手妻を其の目の前でやつて苦悶して見せたので、仰天して立騒ぐ隙に財布を引浚つて梵天國を極めて了つた。賢なるかな。

▲シカゴ女の大足とは昔から有名なものであるが、此程同市の女醫ケロッグ孃の新説が面白い、曰くさ馬鹿には比較的足の小さい者がある、足の大さは智力の發達と平行するものであるから、家の中では可成上草履

を穿き子供は出來るだけ跣足にして置けど。この女は大足なんだらう。

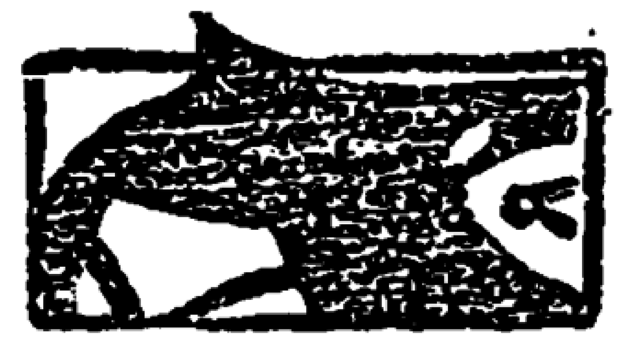
▲京都市長川上親晴氏が富山縣知事を休職になつた時母堂が「休職は閉門と同じことだから親晴ドンは腹を切らねば此の母に濟むまいソレとも切腹が出來ぬから永の暇を遣すから勘當同樣に心得如何なことがあつても對面は差許さぬ」と申渡された。親晴氏驚くまいことか、人を頼んでまで手を換へ品を變て休職と閉門の相違を說明したがお母さんたうとう聽かず、京都市長に選ばれてからやつと勘氣御免になつた。

▲朝鮮大邱府守北面掛寧洞に住む金岩佑（五四）は、今より二十九年前、右の頰に小さき骨が出來しも、差して痛



味もなかつたので、其儘に打ち捨て置きしが、次第次第に太り、遂に牛角の如き形となり、長さは二寸四分あり、質及び形狀は、牛角と異なる事なく、其根元にも五個の石塊狀のものあり、男なら不思議だが朝鮮だつて山ノ神は有らうから無理は無いまだしも蛇にならぬのが可愛いぢやないか。

▲シンドと云ふ中央亞細亞の回々敎徒の中には、結婚後、庭の中で大きな籠に牝鷄一羽と雛を澤山入れたのを置いて、一度花聟が其籠の上に腰を掛け、その籠を取上げると雛が方々へ逃げ散るそれを花嫁が一生懸命に逐ひ捉まへて、捉まへた數だけが將來花嫁の産む子供の數だと信じられてゐる。



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉



○「日やけどめ」について　文壇社から皆樣に御わけすべき總量は五十ポンドとキメましたのが、間もなく品切れとなりましたのに、それと御存知なき愛讀諸子より續いての御注文折角の御希望を無にして代金を御返しするも氣の毒であるから、面倒でも尙五十ポンドだけ再製してとの讀者本位の社長からの義理詰に、强つての辭みもならず、再應こしらへてやりました。所が近來になり讀者の或御方々から、社の方にはもう品切れとの事故、是非私にこしらへて異れとの御依賴、それではあの再製したのもないのかと代理部の方に問合せました所、まだ二十ポンドほど殘つて居ると申すことですから誠に御手數ですが、どうぞ社の方から御取り下さるやう御願ひ申します。

○無名にて御贈品下されし方々へ。繪葉書、肱掛、枝折、刺繡の施された名刺入又はハンカチーフ等を御名も知らず、御處もわからぬ方から御めぐみ下されましたが、御厚誼は誠に感謝の外ありませんけれど、折角頂いても、下すつた御方の誰方やらを承知しませんでは、どうも御受けしても心底から御受けしたやうな氣が致しません、本當に親切の御志より下さつたのでしたら何卒御芳名や御住處を御知らせ願ひたう存じます。でもなければ御返しする事も出來ませぬから手許には止めて置きますけれど、永久に自分のものとして身につけずに置く外ありません。さりとは心殘ることではありませんか。

○返事もせず調劑もして上げなかつた方々へ。何々をこしらへて送つて異れ、着次第若くは引換にやるといふやうな御手紙に對しては、失禮ですが御望みに應じないことにしてあります。私は化粧品を商賣に糊口して居るものではないと云ふことを御承知置き願ひます。又返信料を添へてない御質問にも、その御文意によつて大方は御答せぬことにキメました、高が三錢の切手を惜んでの譯ではありません、質疑者の誠意を缺くと認めるからです。

○返事を差上げたとのある方々へ。例へば或化粧上について何々は何と御答申した後、その件について再び御手紙下さる節は、何卒前の其何々は何といふことを再び御書添願ひます、又御手紙には其都度御處や御名前を略さずに御書きつけ下さいまし、數多き中のことゝて、悉く記憶致して居りませんので、先の御手紙を探すだけでもそれだけ御返事がおくれることとなるからです。又御名前御處等は、よく解るやう御認め願いたう存じます、それが不明のため、遂御返事を申上げられないこともあるからです。

問　今年二十歲になりますが、十二三歲の頃麻疹にかゝり、熱さましを服みましたら腫物が一時に引込み、二三日して又浮いたのが、今も夏になると、丁度麻疹のやうなものが全身に出來て痒くて困ります、醫師は痒疹だと申しますが中々癒りません、何卒よき處方を（熊本、野の花）

答　多分濕疹と申すのでせう、これはむしろ皮膚病專門醫に御尋ねなさるべく、化粧學の範圍外です。

問　（一）御敎にあづかりました指甲花とは如何なるものでせう、（二）梧花水は何處に賣つて居りませう、（三）頂いた毛生劑をつけました上に髮油をつけても差支ございますまいか（桂の花）

答　（一）どんなものつて困りましたね、歐全書に山谷の中に生ず、苗高さ一二尺、莖微く赤黃色を帶び、其葉淡綠、背皆微く白色を帶し、葉の長さ匙頭樣の如く、黑豆の葉に似て、微く寬く兩葉對生す、黃花を開き、實を結ぶ、形蓮翹の如く小さく、中に黑子あり、小くして粟粒の如し、其葉味甜しとある佛指甲と申すのがそれです。（二）三越などでも賣つて居る筈です。（三）差支ありません。

問　フスマと申すのは當地にございませんが、若しや言葉が違ふのでせうか、御地の賣店を御敎へ下さい（下野、花ふゝき）

答　さア御地では何と申すか解りませんが要するにウドン粉を採つた残りカスのこと、當地から高い運賃を掛けて御取寄せになるまでもなく、無論御地にもあること、存じます。

問　いつぞや御敎へ下さいました美人香と申す洗粉は顔に塗つて洗ふと効力がございますでせうか、又艶肌劑や純植物性洗粉を使ひました後につかひましてもよろしいでせうか(岡山、くま子)

答　美人香を氣永く御つかひになれば肌面を細かにすること確實です、艶肌劑はその美人香で御洗ひになつた後に御つけになるべく、艶肌劑を御つけになつた上を直ぐ美人香で洗つてはいけません、純植物性洗粉は其の原料の多くが美人香のそれと似て居りますから、美人香をお使ひになれば、洗粉の必要なく、純植物性洗粉を御つかひになつて居らるれば、別に美人香の必要はありません。

問　(１)私はアレ性で寒氣に向ふとヒビ、シモヤケが出來ます、そして此三四年は始終顔に吹出物が致し、殊に夏はひどいのでございますが。(２)眼の色を美しくする法。(３)眉と睫毛を濃く長くする法。(４)賣品中に秀絶した現代的の化粧料。(５)皮膚を白くする法。(６)青色のおしろいの賣店と代價。(７)キメを細かにし艶やかにする法等を御敎へ下さいまし(若松、花子)

問　(１)ヒヾ、シモヤケの良劑はいくらもありますが其吹出物とはどんな吹出物ですか。(２)(３)及び(４)は本欄では申々答へきれません、詳しくは拙著「新式化粧法」と「合せ鏡」とに述べて置ましたからそれを御覧下さいませ。(５)誌上では御答するも如何がと存じます。(６)青色と申して實は緑色です、三越、丸善、白木等に賣つて居ります、それはキセロルプードルドリの青と仰しやればわかります、一個七十五錢と覺えて居ります。(７)文壇社に御申込みになり、コールドクリームと艶肌劑とを御求めになり、それで始終法の如くなされば目的が遂げられます。

問　(一)日本製の粉白粉と白粉下クリームの最良品を。(二)生際の毛を長くする法を(丹波、露女)

答　(一)何れも大抵似たり寄つたりのものと認めます。(二)少々皮膚を刺戟する缺點がありますけれどカンタリス丁幾、沒食子浸劑各五匁、麝香エッサンス一匁、アルコール十匁、薔薇水百匁よりなるものが比較的有効です。

問　或化粧上のことで直接蘇波先生に御伺申したいことがございます。先生の御住所を御敎へ願ひます(雪國の白百合)

答　牛込赤城下町です。

問　(一)短身で困ります、四五寸位長身する法を。(二)顔が只白くなく、眼の圍りや頬を生彩ある美貌にすべく、紅や肉色白粉などをせず、自然にする法を(高知、愛讀女)

答　(一)五六年前米國で發明した長身器というものがありました、私も高價を拂つて購つて試驗して見ましたが、別に何の甲斐も見出すこと出來ませんでした、他にはまだ聞えて居りません。(二)は拙著新式化粧法を御一覽下さい。

問　(１)ニキビの療法。(２)皮膚を滑澤ならしむる法。(３)頭髪を黒くして艶なきを艶澤ならしむしむる法。(４)髭のあしきをよくする法を。(神戸、澄浪)

答　(１)神田旅籠町文光堂からニキビ劑を御求めになり、それを御つかひになつて御覧なさい。(２)姉妹劑を氣永く御つかひになればよろしいと信じます。(３)コールドクリームをすり込みなさい。(４)大根と生姜の汁を搾つてのむとよいさうです。

問　(一)キセロルクリームは何處で求めませう、代價は何程でせうか。(二)長身藥又は機械はございますまいか。(三)全體女子の普通身長は幾尺でございませうか(京都、達子)

答　(一)御地に近い處では大阪の丸善洋品店にある筈です、一個五十錢と六十錢とあります。(二)(高知、愛讀女)さんへの答を御覧下さい。(三)さア幾尺でせうか、兎に角姿勢美の上から見て、どうしても五尺はありたいと思ひます。

問　私は毛深で鼻下や頬の邊りに濃いのが發生して化粧の邪魔になります、皮膚に無害な脱毛法を(孤乙女)

答　硫化バリームと澱粉とを等分に合せたものがよろしいでせう。

問　(一)赤毛を黒く致しますには。(二)夏は顔の色白く、冬になると赤く且つアレますのには(群馬、伺ひ女)

答　(一)鷄卵で洗つて桐の𦯶の煎じ汁で永く御洗ひなさい。(二)コールドクリームで遥法のマッサージを御やりなさい。

問　(１)二三年前から鼻頂に黒き毛穴のや

うなものが出來まして これを壓すと脂肪のかたまりとも思しきものが出ます、おしたあとは穴になり幾日かすると又たまります、これの出來て居る所は赤黑くなつて居つて壓出して二三日經ちますと薄い皮が剝がれます、一體に鼻のあぶらが多い方なのですが、これを直す方法を。(2)世に申す猪鼻は何としたら見よくなりませうか(神田、喜美子)

答　(1)犬山椒の葉を陰干にしたのを酢でもんで御つけなさつて御覽なさい。(2)これは化粧術によつて扮飾する外に致方ありますまい如何に扮飾すべきかは、一應その形を拜見した上でないと申上げかねます。

問　亞砒酸を適度に服めば白色になると云ひますが危險はないでせうか、實は或漂白劑と申すものを高價で求めましたがうの毛程の効もありませんでした、過酸化水素は脂肪質でなくば効がないといふですが、何か外に有効な白色劑はございますまいか(岡山、壽美)

答　亞砒酸は無論危險です、適度と申せば日本藥局法に規定されてある服用極量以下を申すのでせうが、それなれば或疾症の療藥として害もありますまいが、白色劑としての服用は、どうしても中毒するだけの量を使はねばならんのですから、これ程危險なことはありません、亞砒酸をのんで白色になるのは中毒した結果によつてあらはるゝ身體の纖質的現象であるからです。佛國の婦人方に多くこれを服用するものがあつて二つとない生命を失ふものゝ少くないのはこれが爲めです、中毒量だけ服用せんでは白色劑として何の効もありません、過酸化水素は仰しやる通りです、他の白色劑については「新式化粧法」と題する拙著中に述べて置きました。

問　或所から販賣致して居る雀班の藥を使つて見ましたが更に効能がございません、何卒先生の御手許で御調製下さるわけには參りませんでせうか(石川、きよ子)

答　こしらへて差上げませう。

問　アブラ性で鼻の兩側にプツ／＼したニキビの細かいやうなものが出來ます、これをつぶしますと又翌日は前のやうになりますが(下關、白菊)

答　(神田、喜美子)さんへの(1)の答を御覽下さい。

問　(1)俗に云ふ顏面にあるホウクロの療法。(2)過酸化水素は顏の黑いのを白くしませうか。(3)藤波先生の御宅と御本名を。(4)文光堂のニキビ劑は確かに有効でせうか(鳥取、ため子)

答　(1)ホウクロとは何でせうね、ホクロのことではありませんか、ホクロなれば櫟をやいた灰と石灰を等分に交ぜノリのやうに煉り、その中へ白もち米を二千粒程入れて置くと五六日して水銀のやうになりますから、それをホクロの上に御つけになると大抵は二三回でとれます、(2)永く御つかひになると相當の効果を見られます。(3)宅は每度申す通り牛込赤城下町ですが、本名をとは恐入りました、芙蓉といふ雅號で御免蒙りたいと思ひます。(4)相當有効のものと確信して居ります。

問　吹出物によいと承りましたキセロルオートワレツトと申す化粧品は何處に賣つて居りませうか代價も御一所に(愛知、とよ子)

答　三越呉服店にあります。

問　(一)みそのとの色おしろいは色が黑くなると申しますが本統でせうか。(二)小鼻の毛穴の黑いのを直す法を(麴町、京子)

答　(一)誌上では、存じませんと御答致す外ありません。(二)(神田、喜美子)さんへの答を應用なさいまし。

問　(1)健康體なるに係らず汗が多く、暑中にも顏色あしくありますが。(2)四年程前からニキビが出來て、當地の皮膚病醫の療治も受けましたが直りません、聞けばグリスリン一〇、〇と酒精二〇、〇、安曾香酸五、〇、蒸留水一〇〇、〇を混和したものがよいとのことですが、外に良劑がございますなら(熊本、ふみ子)

答　(1)オイシドリがよいでせうけれど、これは猛烈なる毒藥ですから醫師監督のもとに御もちひにならぬと危險です、兎も角フオルマリン石鹼で始終御洗ひになつて御覽なさい。(2)神田旅籠町文光堂から御わけすることにしてあるニキビ劑を御試用なさつて御覽なさい。御示しの處方の如きは恐らく間違ではないかと存じます。それに安曾香酸とは安息香酸のことでせう。

問　私は二十一歳になりますが三年前から春秋二季顏にハタケが出來、今以て直りませんのですが(山口、しづ子)

答　エピカリン一匁を十匁のアルコールに溶解したものを御つけなさい。

十月一日初號發行

講談世界

價 一冊 貳拾錢 送料二錢 半年分一圓二十錢 一年分二圓三十錢

口繪（石版密刷大判）美人風景數枚入

講談內容

武士道銘々傳、俠客傳、人情物語、怪談、探偵談、落語、小說、演藝界、雜錄、月旦、文藝百華園……

講談文藝懸賞大募集

（締切――九月十日）

△俳句……（題＝秋季亂題）
△小品文……（十行以內 題＝公園）
△狂句……（題＝緋縮緬）
△情歌……（題＝金齒）
△一口噺……（題＝女湯）
△冠句……（題＝恥しい）

投書規定

（用紙）は端書に限る、一種五首以內但一人にて何種投稿するも可なり（認め方）總振假名付住所氏名を明記する事、宛名は東京神田旅籠町一丁目文光堂內講談世界編輯局へ

賞與規定

△特等三圓△一等一圓△二等五十錢
三等三十錢（發表――十月一日號）

本誌體裁 菊判二百頁材料豐富

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 （電話下谷八一九） 振替東京一九五五

―（賣捌）東海堂○良明堂○上田屋○東京堂○北隆館○至誠堂）―

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

コールドクリーム

コールドクリームの美顏料として最も有効なことは、世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も續々これが有効なること且つ其調製方並に原料までも御紹介になつて居らるゝ程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて賞がれて居るコールドクリームは至つて高價なために、日本にはまだ輸入發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても、似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません。從來藤波先生は皆様方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが僅かづゝ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が雙方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆様方に御わけすることにしたのです。コールドクリームの効用は既に御承知のことゝ存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顏なり御手なりに擂込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、

アレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持って居ります。

但し「コールドクリーム」は美顏劑で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちませんお化粧下用としては「艶肌劑」が適當で「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顏の姉妹劑です。

定價 金壹圓 五十瓦入
送費 市内四錢地方八錢 滿韓臺灣三十錢

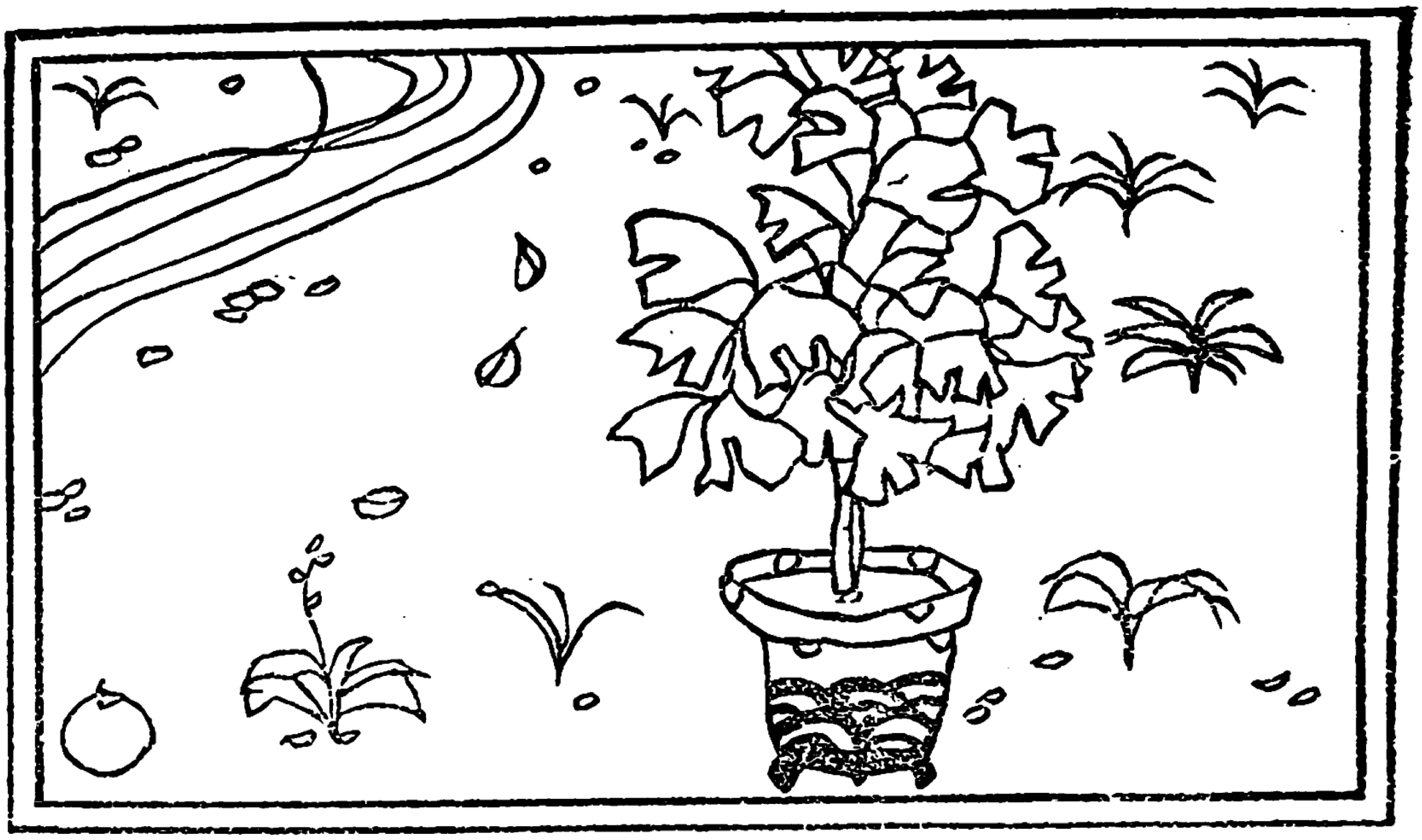
女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

艶肌劑

文明とは時間を儉約することです、「何か一品で、顏のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌劑であります、右の某侯爵夫人の御望みは夫人御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆様方に本劑を御わけして差上げることにしたのです。

定價 金六拾錢 五十瓦入
送費 市内四錢地方八錢 滿韓臺灣三十錢

專賣元 東京京橋區大鋸町十二番地 振替口座東京第壹七貳九番 (電話京橋六〇七番) 女子文壇社代理部



誌友欄



小説

○死の幻

水野葉舟選

向島　小林たか子

私は今暗の影の迫つた薄黒い部屋に寢て居る。

私は病氣なのだ、熱が高いので頭がひどく痛い、何だか頭の中で一寸法師が大勢ならんで鋭い銀の毒針でそこら中無暗につゝきまはして居る樣な氣がする。

左ばかりむいて居たので肩がめり〳〵と痛い、一寸寢返りをすると頭に乘せた氷嚢がずり落ちる。直さうと思つたけれどめんだうだからはふつて置くとさかさになつたせいか、つめたい水が首に流れ込む。たまらなくいやな氣持なので枕元にはふり出してしまつた。

頭の中が、かわき切つて體中の濕氣と云ふ濕氣が、しめ木にかけてしぼり取られてしまつた樣に思へる。

誰れか來てくれないかしら、私は一人で居るのが淋しくつてしかたがない、もう部屋は眞暗になつてしまつたのに誰か來ちやくれない、燈火もつけてはくれない、私は泣きたくなつてしまつた。

聲を出して見樣かと思つてもそれだけの勇氣がないいくら忙がしくつても、用が多くつても誰か一人ぐらゐ手のあいた人がある筈だ、なければこしらへる筈だせめてあかりだけでもつけてはくれないのか。

此の暗の中に何か恐ろしいものが潛んで居る樣に思はれる、自分のつく呼吸までも恐ろしい。

下では小供等が賑かさうな笑ひ聲がする、私は世の中に誰も――親身でさへも――私をかまつて、私のために心配してくれる者がないのかと思ふと皆を呪つてやりたくなる。

私は昨日から細く碎いた氷のかけらの外は何も口に入れないのだ、いつさめる熱とも解らない。

かうして私は弱つて、弱つて、口もきけない、體も動かせない、みじめな姿になつて死んでしまうのではないかしら、ふと私は自分の死が、皆――笑つたり騷いだりする餘裕があつても、病氣の私をかまつてくれ

ないのに對しての復讐の樣に思はれた。家の人たちが皆自分自分の務に忙がしく、其間に忘れられた私が一人で悲しくみじめな樣子でつべたくなつて死んで居るのを、私の事を思ひ起した誰れかゞ此所に來て見出したとしたら。

あゝ私は其人の手にもつた燈火があんまりかすかな光しか放さないので顏を見分ける事が出來ない影の姿はだん〳〵ほの赤くなる光のうちに私の方に近づいて來る「どんな、ちつとはいゝ？」と枕元に音もなく坐つて私の死んだ耳にさゝやくのは、姉さんの聲だ、北海道に行つた姉さんの聲だ、いつの間に歸つて來たのだらう、長い間會はないから見たいと思つたが、だめだ、私はもう死んで居るのだから、如何あつても再び生きた人間と顏を合せる事は出來ない、世界が異ふもの。

「眠つてるのかしら」と云ひながら私のつべたい頭にさわつて見る、びつくりした樣子ではつと手を引いて驚きと恐の滿ち〳〵た目を、私のこはばつた動かない顏の上にすゑる、死人と二人きりで夜の世界に住むと意識した時に、姉さんの顏には恐の表情が見る〳〵廣がつて、姉妹としての親しさも、人としてのあはれみも、意外の驚きも皆瞬時に影をかくした、そしてふ



天（賞）　結髮　芝區　後藤明あさ子

るへた人間とも思はれぬ聲で「誰れか來て下さい」とさけぶ、急に世界がさわぐし出した。

誰か梯子を上つて來る音で私の幻は破れてしまつた、足元のから紙がすつと開いて人がはひつて來る、私の閉ぢた目の中にランプの光が赤く廣がつた。

「氣分は如何だい、何か食べて見ないかい」と母の聲が云つた、私は眠つたふりをして居た。

母が來てくれたのが何だかつまらない、誰もかまつてくれる者がなくつて、一人物悲しく病んで居る自分の姿を、もつとしんみりと眺めたい、もつと悲しい事を想像して一人で泣いて居たい。

母は私が眠つて居ると思つて私の頭などにさわつて見てから、氷嚢の位置を直して枕元に心を細めにひねつたランプを置いて靜かに出て行く。

梯子をふむ音がひとつ〳〵永遠の暗の中にきえてゆく。（天賞）

○叔母

静岡市　狩野京子

學者、變人、讀書中毒、失戀、〻、是等は多くの人達が私の若い叔母を評した詞であつた。

初めは學校の模範生として話の引き合には、きつと名を出された私——校長のお說と校風の型以外一寸も動く事を知らなかつた私を暫くの同居の間に一種の注意人物と化したのは此叔母であつた。美衣が何だ、ボンが何だ、表皮と眞價と同一には出來ぬ、とか吾々は蜃氣樓を見て眞の宮殿だとは思へない萬能の神の爲した人の子であるならば大自然の中に生れた因果に消えてはゆかぬ理想を授かりたい、など考へる小憎らしい現在の私の素地を作つたのもたしかに此叔母である。

音もなく、戰ぎもせず散つてゆく、櫻の花の一片每が丁度、春の精を奪つてはゆくやうに思はれる日の夕「○ちやん、來てでらん」と叔母は私を机の前に呼んで其な話をした、「お前は色々な本を讀んぢやありませんよ」「だつて叔母樣も・・・」「だからさ、私のまね爲るんぢやないの、嫌はれるからね」叔母の話は續いた、叔母がまだ學校の頃、友達と山へ遠足した、咽が非常に渴いたので皆して谷川の水を呑んだ、そして叔母ばかりが上流に蛇の死體のあるのを知つた——「ねえ知らない方が幸だつたでせう、どうせ呑で了つたものは」微笑の影は次第に叔母の顏から消えて其眉ばかりがピ

り、と動いた、私は默した、而し此時の私は已に生意氣な問題を胸に藏してゐた、人には秘めて。

叔母はよく日記を書く人だつた、述懷は一種の慰藉也だが自分程の興味を持て聞いてくれる相手が無ければ仕方もない、と云ふ譯なのだつた、ペンを持て机に對つたらもう呼んで答のない位は毎々の事で、御飯忘れるのさへ別に珍らしくはなかつた、併し、其日記は秋の或日の午後、かき集めた紅葉ばと共に空しく煙に化して了つた、私の胸には只僅かの記憶を殘しただけで、「吾等は苦しまんが爲に、又或はんが爲に人とは生れしが、見よ吾等が背負はさるゝ數多くの相矛盾せる本能を、或物は左せんとし或物は右せんとす、超脫の意の下には必ず執着の情あり、信仰の幸福には常に疑問の誘惑のまつはるを見る、斯くて人は皆其執るべきに惑ふ、辛うじて踏み過ぎ來し吾等が一步一步、そは實に血汐に沁みし足跡の連鎖に外ならざるなり。觀念連合の早きを示す走り書きの文字はかく讀めた、それは其、間もなく盡きようとする時、丈高いコスモスの茂みに叔母の視線のさえぎられた暫時を、利し得たのであつた。是は私が叔母の日記を見た最初で、同時に最後であつた。

此日から一月許りの後、私は叔母と停車場で別れた彼時叔母は二十一私は十八。例のコスモスは復び莖をのばした、が叔母からは何の便りもない。

そこで村人は復種々な噂を初める、東京で教師をして居るとか米國で百姓をして居るとか、臺灣だらうの滿洲だらうのと、七十五日を八つも通り越した此頃は死んだのではあるまいかと云ふ噂が出來てきた。

死？そんな事はあるまい、成程叔母は自殺罪惡說を冷視しては居た、併し生にも增した死の無能をも信じて居たらう、あの繼叔母が死んだのなら、叔母に親しみのある人の心にさへ只疑問を止むる丈、それで無ければ精神病者にされて了う、私はそんな思して叔母の影を見送りたくはない、何年生きても同じ事だかも知れぬ、併し生れ落ちてすぐ教へられもせぬに物理を應用して母の乳を吞み得た筈の人の子は、只死ぬ爲に生長したのではあるまい、叔母が今迄には隨分考へたらう悶えもしたらう、そして凡てを自分一人の胸に藏めて……死んではつまらぬ、もの足らぬ。

叔母樣、私は是から怒力して讀書します、考へもしますそして叔母樣に近づきます。　叔母樣一葉樣だつて二十五では悟れなかつたぢやありませんか、ですから叔

母樣長生きしてもつと〳〵と考へて下さい、私は毎日毎日叔母樣の事考へて居ます。村の單純な人達はね話しても解らないから話さなかつた叔母樣のお心も知らないで隨分色々な噂をします、でも異ふ社會の人達ですものかまひませんわ。獨言に答はない。

あゝ夕陽は沈む、彼の紅い光を收める國、そして叔母樣は居なだらう、やはり獨りで…。(入賞)

○誇

橫濱　千鶴子

「では亦明晩、七時からきつと」男を自分の細君にででもする樣に熱いキッスを――顏を洗つたまゝで未だ石鹼の香の高い額に與へた、そしてボンネットの曲を直して右手に、バイオリンの袋に入れたまゝのを渡した亦可懷し氣に固く握手した、彼女はなされたまゝに、振離しもしなければ、別に握返しもしなかつた、片手にバイオリンを持て片手でスカウトの後を褄取つて俯だれて石段をおりた。男は可懷しみに堪られ無い樣に情の籠つた聲で「エレン!」と高く叫んだ、そして思出した樣につか〳〵彼女の側に馳寄つた、ズボンのポケットから幾等かの銀貨を取出して彼女に握らした。

彼女は心から嬉し氣に微笑むだ。

そして媚びる樣な眼差しで男を見て「有難う!では亦明日例の場所でね」此樣云つて此度は彼女から男の手を取つて強く〳〵握つて輕く振動かした。

男と別訣れた彼女は何んと無く突放された樣な淋びしい氣分になつてぶら〳〵歩行き初めた、朝の深沈としめつた空氣は冷え〳〵する程に身にしみ渡つたが亦其れだけ淸々しい心持になつた。頭に分明と落付きをあたへた、小石の敷詰めた石段を、心臟に輕い鼓動を覺えさせて、ゆつくりと登つた、登り切るとほつと太い息を吐き出して今來た方を振返つて見降した。

橫濱の一帶は朝靄に包まれて淡く彩色られた、其中を神奈川行きの電車が小豆程に黑く見えて走つて行くミイン敎會の長方形の建物と圓形の正金銀行の屋根とゴミロクの高い火の見が際立つて威大に見えた。深綠色の海の中に細長い築港がうねつて其側に小さな蒸汽船が大きな達摩船を引綱して行く、遙沖に二本マストの商船が黑烟吐きながら今しも水平線下に沒し樣としてる、彼女はうつとりと船の行衛を見守つた、平常になくつく〳〵自分の身を悲しく思つた、過去にし昔の

柔らかい少女の胸が今更に忍ばれた、——ふとした事から故郷に流れて來たミニストルなる彼れと甘い初戀に落入つて、終には親の承諾も得ずに飛出して夢の様な樂しい亦苦しい日を、種々の見知らぬ國から國へと流離ひ歩いた。彼はギターを、彼女はバイオリンを搔き鳴して街頭を流して歩いた。或時等は公園のエルムの影で自分等二人に相應しい、丁度其都會で流行の歌劇の一曲を、胸に包むだ青春の血汐の漲りを思ふまゝに押出す様に胸を躍らせて奏した、平常なく二人の意氣はしつくり合つた、そして奏し終ると彼女は突然彼れの胸に物狂ほしく飛付いて熱い〳〵キッスを與へた



（地賞）夕風　淺草　石川一枝

そして何時までも〳〵、丁度戀に醉つた青年が歡會の嬉びに、固く抱擁する様に媚えて彼の腕に寄つてなかなか離れなかつた。其當時の樂しさを繰返すとあゝして別離れた彼に對する今迄の反感は去つて返つて可懷しく思つた何時か山手の大通りに出た、黒色の艶々した其尾の如何にも房々した一對の馬に乘つて若夫婦の直ぐ前を通つた、女は柔順しやかに横乘に打乘つて指輪の輝く手で手綱を持て快濶に話しながら行く、純白の餘り装飾のない腹部でキュッとつまつて身に合つた服や、山高形の帽子を止めてある貝に彫のしてあるピン等が如何にも流行

に後れまいとする女の努力があり〳〵と見える。彼女は其スタイルを羨望的な眼で見送つた。今更下宿屋の五階の薄暗い室に歸る事は否になつた。あの光線の具合の惡い小さな室を、思ひ出すと如何にもいやに、自然今の遣瀨無い境遇が染々悲しく胸をついた、如何して一人で此先生活て行かうかしらと電燈も點けず夕暗のせまツた窓際に頭に手を當てゝ考へてる自分自身の悲哀な姿を思ひ浮べた。

私には諸ての男に愛されるだけの美貌がある、人に聞かせるバイオリンがある、と一種のプライドと自尊心とによつて賴りない心を自から慰めた。

先程別れた彼によく似た男が側を通つた、長すぎる位ピンとした茶褐色の髭や高いカラーがいかにもよく似てた、彼女は彼と云ふ事が頭を持上げた。

「私は彼に戀して居るだらうか」ふと此樣な事を思つた、先程もらつた銀貨がカチヤンと音響がした、彼女は大罪でもをかした樣に戰慄した。

醜業婦、ふと此樣思ふと堪らなく侮辱を感じた、誰れが〳〵彼樣な奴に金の爲めに、其銀貨を投付て、私は貴君なんか愛してやしない一寸とも〳〵ときつぱり云ひ切つて仕舞つて其れなりに別れ樣と興奮した心で思つた、其下から男の失望する氣の毒な顏が眼に浮ぶと堪らなく嬉しい氣がした、其處に女性の美しさの持つて居る權威が見とめられる樣に思へた。

バイオリン！……

「別れ樣〳〵」ユダのキッスを今迄續けてゐた事を云つて驚かしてと彼女は力強い心で決斷めた。

勝誇つた氣に滿ちて此度は違つた道から彼の家に急いだ。（入賞）

○母

千葉琴子

「お父さんは？」

と長火鉢の傍で淋しい顏をして居る母に尋ねた。

「何處へゐらしつたのか、いつでも遲いんだもの」

と呟くやうに、じれるやうに云つて、勝手元で立ち働らいて居る恒をよつと見返り乍ら、

「旦那樣の分は要らないからね、春子のお膳をこしらへてお呉れ、あゝ殘さないですつかりつけていゝよ」とすぐにまたふり返つて、

「春子や、ほんとによく歸宅ておくれだつた、母さんはもう淋しくてね何しろ桂子が死亡てからと云ふもの、がつかりして氣がぬけてしまつたからね、からだも思ふ樣に動けないし、父さんがまた少しも家にゐらつしやらないんだから――」

「やつぱり村の用なんですか、もう選擧運動もあゝ飛んだこと、F樣は

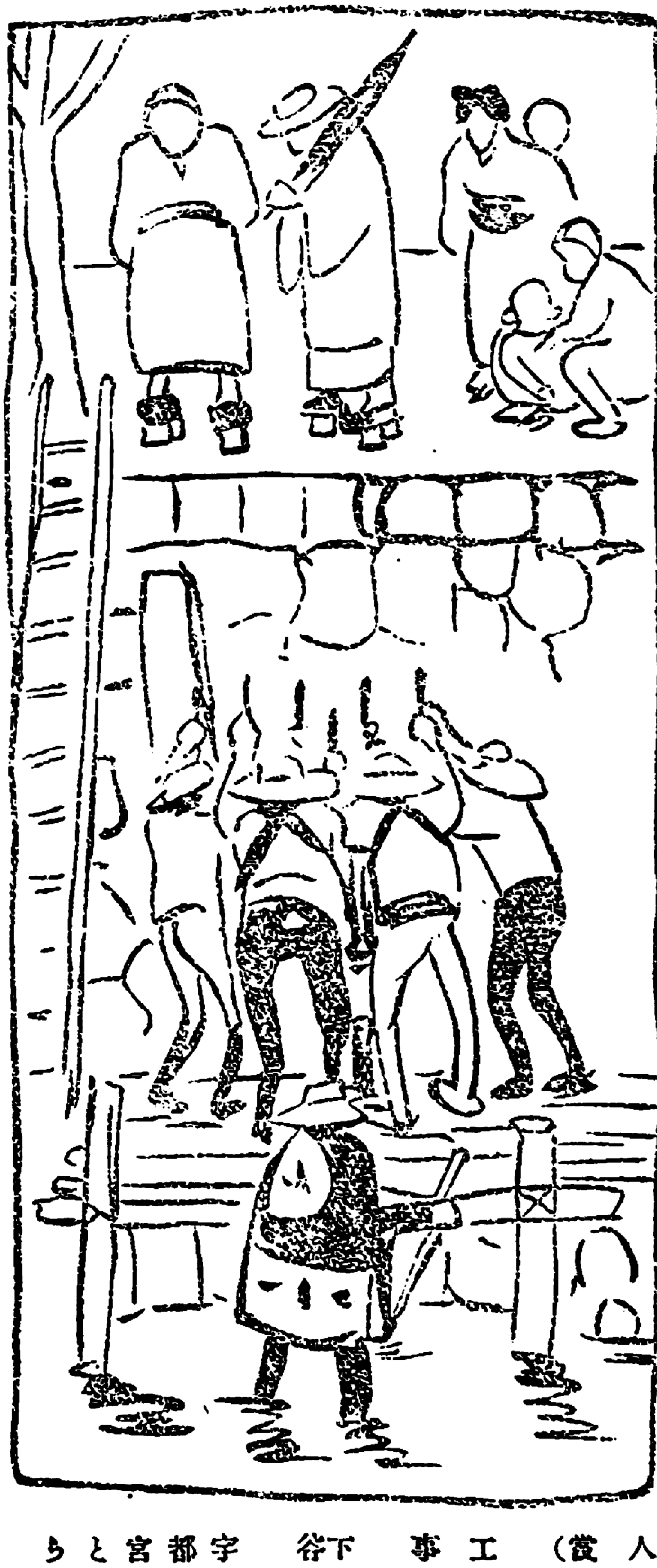
落選なすつたのね、私新聞をみてほんとにびつくりしましたわ、あれ程人格の高い信用の厚い方が――一體如何したわけなんでせう」

春子は心持晔をあげて、いかにも力なささうな蒼白い母の顏を覩た、僅かの間にげつそり憔れてヒステリックな眼が一層凄く、ランプの光に輝いてみえた

「だから云はない事ぢやない、まるで氣違ひみたいになつて二晩も三晩も家へ歸らず、眼を惡くしたり咽喉を痛めたり――おまけにそれが桂子の初七日もすまない中にさ――そのあげく肝腎のお父樣が當選らないなんて、馬鹿げきつた話ぢやないか、商人は商人らしくさへしてゐりや間違ひつこないんだのに――人には惡くとられたりして、お父さんにも困つてしまうよ」

また解らないことを！と心には思ひながらも春子は輕く頷いて、

「でもね母さん、働らくのが愉快なんですわ、店の方はお祖父さんがすつかりなさるし、父さんは用がないんですもの、人間に仕事のない程淋しいものはありませんからね、外へ出るのは尤もですわ。母さんもさぞ退屈でせうね、每日何してゐらしつて、おしごと？　だつていつもぢやあきるわね、ちと保養にでもゐらつしやいな」



人）（當　工事　下谷　字都宮とら

「どうしてお前、そんな事云ひ出して御覽、お祖父さんが大變だアね、格別出たくも思はないけど――身體が惡るきや氣もふさぐし――只お前の歸るのが樂しみなばかり。ね、汽車も出來たんだから時々は來ておくれよ、母さんはもうお前ばかりをたのしみにしてかうやつてゐるんだよ」

哀願する樣な口調で云うのを春子はうつむいて傾聽いてゐた。

友達同志での勝手氣儘な話の時こそ、因習の黴臭い暗い家を呪ひ、本能的に愛するほか子供に何の權威もない世の親たちをあはれんでゐる。家庭と云ふ小天地の中に、ねて起きて笑つて泣いて、意味もなく生を祝

ひ死を悼み、五十年の生涯を生きんが爲に生きる人等と立ち交つては行かれないと叫んではゐるけれど一度我家の敷居をまたぐと、流石に何とも名状し難い一種の情の暗流を覺えてつよい言葉も出なかつた。よわよわしい、疲れきつた、母の樣子を見ると胸を壓されるやうに感じた。

春子の母――家以外の世界をしらず、書物をよむだけの興味も學力もなく、何の鍛錬、克己と云ふ事も知らず、日々無聊に苦しんでゐる身、二人の子供を側におき、情的滿足を少しでも充たしてゆきたいとの願は決して無理な事ではなかつた。性來が陰氣なので洒落な父と氣が合はずいつも激しげな顔付で茶の間の火鉢をまもつてゐる、その痩せた姿をみるのが春子にはつらかつた。激しい情に驅られてはもう一切をすてゝ、没して、母の犠牲にならうかと思ふ事さへあつた、併しこれは一時の衝動的の感情だつた。父に依て生れ、父母の爲に生きると云ふが、我家の外によい家はない、兩親のやうにゑらい者は世の中にゐないのだと思つた、それは幼な時代の美くしい夢にすぎなかつたのだ。一歩世間に踏み出して、より大きな、より不思議な、珍らしいものを見て、まづ驚愕と恐怖とに驅られ、次にその心臓に蝕ひ入る樣な不安を何とかして除去しよう、根本的に解決しようと、幼稚な頭腦に苦しんだあげく、自分の今までベスト中のベストと信じきつてゐたその樂園――家庭の中には何の助力も與へてくれるものがないのだと知り、そしてその對象を求めねばならぬとあせる時に、如何してなほ父母の事を考へてをられやうか。自分を愛してくれた、育てゝくれた、けれどそれは動物の本來性がする事だ、人間としての親の務は子供の身體と精神とを同時に健康にしてやらねばならないのではなからうか、自分も子として情的に父母を思ふ、その念慮はすてられない、けれど世の中を一目見たその瞬間、本能的變で解決されない、複雑な、強烈な刺戟にふれたその後に於て、やはり家庭に閉ぢこもつて、この外に世界はない、骨肉の外に人はない――と思はうとしても不可能だ。何かを求める、求めて止まない、そしてそれは家庭――少なくとも自分の――には見出し得ぬのだと知つた時、情的執着をしいて絶つて、果しらぬ曠野へ旅立たうとする、このかなしい心的傾向を拒むことは出來なかつた。否このみちを進むのが近代人のとるべき態度、ゆくべきところではなかつたらうか、何處までも〳〵この心の底の底まで欲するものに出逢ふまで、只突進してみたい、長途のその旅の間には颶風も吹かう、龍巻も起らう、思はぬ迂路に迷ひ入つて荊棘に傷つき沼に陷いり事によつたら果敢なくも路傍の露と消えるかもしれないそれでもいゝ、本望だ、ゆくべきところにゆく、笑つてねむることが出來よう。

と春子は考へた。

然し何にしろ脆い弱い、若い女の心だつた、場合により時におされて追々に變轉してゆくのを自分でも制しきれなかつた、もう四五年もたつ中には一定した考も得られやうと思つてとにかくに表面だけは人なみにとつこめて來た。

姪の桂子が死亡なつたのは先月の八日だつた、姉や母や祖母のかなしみ――それは傍觀るのに堪へられなかつた、そして日数のたてばたつ程ます〳〵寂寥を感じて來るので、初七日がすんで歸京つた春子をすぐよび返して歸宅らせたのだつた。それはすべて母と祖母の細工だつた。

うすべりを敷いてお膳を並べて、お皿をめい〳〵の上にのせて、すつかり食事の準備が出來ると恒は店の若い衆共を呼んだ、血色のいゝ肉附の充實した、二十前後の若者がゾロ〳〵と這入て來た、そしてきめられた席について皆一緒に箸をとる、一番古參の番頭は、

「お嬢さん、大分足がお近くなりましたね」

とひとり笑つてみせたけれど、母の顔はとけなかつた。
輕くつけた御飯を半分程に減らさせ、澁いお茶で流しこむのを、春子は見てゐられないやうな氣がした、すいてたおなかも一つぱいになつて、箸を動かすのも大儀だつた。
すべて沈默に終る夕餉――それも母の顔付があまりと淋しいからであつた、よりつけぬやうに見えるからであつた。血氣盛りの若者が申し合せたやうに默りこんで、下をむいて義務のやうにお菜をつついてるのも、陰氣な女主人の顔をなるたけさけようとするからであつた、かきこむやうにして、幾度か茶碗を代へお茶が濟むと型の通り、箱膳の上へおじぎをし、めい〳〵臺所へ片付ける――と春子はたまらなく泣き出したいやうな氣分になつた。
愛兒の死がどんなに心を惱めたことか、兄は胸が痛むとかでT市の病院へはいつたといふ、格別の事はなさゝうだが姉も樣子を見がてらに出かけて、殊によつたら二三日逗留するかも知れない、と云ふ話であつた、それで餘計家の中が淋しい樣に思はれたのだ。いつも別宅から出張する祖父も如何したのか今夜に限つて姿をみせなかつた。
夕飯後母は火鉢の前で長煙管をとりあげて、しきりにスパ〳〵やつて居たが、
「春子や、今度は何日歸るの」
と曇つた顔をあげて云ふ。
「いつつて、月曜には歸らなけれやなりませんの、火曜の歷史が怕いんですもの」
「さう、一日位休んだつて、まさか落第はしないだらうがねえ」
と母の聲はかすれてゐた。
「そりやあ大丈夫なんですが――私だつて一日も長く居たいは山々なんですけれど――仕方がありませんわ」
と春子もやゝ悄れて云つた。
「落第さへしないもんなら、二三日とまつて行つておくれな、え、左樣出來ないの」
「だつて母さん、試驗の爲に、成績の爲に、する勉強ぢやありませんわ、だから仕樣が――」
と云ひかけたがふと話を切つた、生じひな事を口へ出して母の氣持を害ねるでもないと、
「まあ、今夜ゆつくり寢んでから、よく考へるとしませうよ、それよりか母さん、京橋の家は、もうすつかり普請が出來て、大變立派になりましたね、母さんも少し快くなつたら、是非行つて御覽なさいな、叔母さんもね、無理にでも引張つて御出つて仰有つてましたからね、あ、私と一緒にゐらつしやれると――行けない、母さん」
「そんな事がお前、出來るものかねえ、考へても御覽な、まだ藥がはなれないんだもの、はたから見ると何でもない樣でも、なか〳〵お前、からだだつて自由に動かせないんだよ」
「左樣ですかねえ」
折角氣を引き立てようとしたのに却つてます〳〵沈みこまれるので、春子は幾分失望して暫らく默つたまゝじつとランプの光を眺めた。ガスの灯よりも赤味をおびてそのくせ靜かな色をしてゐる、ジザイがみじかいので室の中はうす暗い、次の間の女中たちは湯にでも行つたか聲もしない、チィ〳〵と啼く蟲の聲が聞えて靜かな晩だ、父はまだ歸らない。
「兄さんは何處がおわるいんですつて、母さん」
「なあに氣管のどことかつて云つてたよ、肺病ぢやないかつてひどく神

經を起してね、梓子が死んだあとの疲勞たらう、今兄さんに弱られちゃ全く困てしまうがね」

「左樣ねえ」

とまた考へ込んだ、話はとかく沈み勝になる。

母はかうしてるのも大儀相に膝をくづして頭をおさへ火鉢に半分もたれてゐた。

「あ、母さん、お寢みなさいな、その方がいゝでせう、ね、床は――あゝ恒がもうちやんとしてありますよ」

と次の間を見返つて、蒼く搖れる蚊帳をみながらそゝのかす樣に云つた。

春子は母をねかしてから又更に深い冥想におちるので在つた。（人質、

（記者曰）　此篇は非常に長篇なる故、已むを得ず六號活字に組みたり、選者指定の順序を變へたるも此爲のみ、他意あるにあらず、作者及讀者の諒察を乞ふ。

○階上の書齋より

葉舟生

七月十八日朝

今日も暑い。しかしよく晴れた心持のよい日である。今朝、家中朝寢をして居ると、第一便の配達夫に大聲に呼び起された。そして、諸君の投稿の一束を受取つた。今月は分量も可なり多い。しかし、何れか見ても、何時も同じやうな題がついて居るので、先づ失望した。

今回、「女子文壇叢書」と言ふものが刊行される事となつた。その第一篇に前島優梨子の短篇が先づ公にされると聞いた。自分は諸君の仕事が一人づゝ果實を結んで行く事を祝さうと思ふ。自分は又、この叢書に依つて、從來一人一人の生活が漠然と見えて居たものが一層明かになつて來るのを豫期して居る。

それにつけても、この小說欄の標準を、更らに進めたいものである。自分は研究者の態度としては、諸君の投稿に向つて、多くの興味を持つ事が出來る。卽ち、日本の女の一部の人々の智識、感情、それを總括した生活と言ふものを知る上からは、諸君の書かれたものに依つて今まで心付かなかつた事を多く敎へられた。しかし、これを自分の姉妹の人々の創作として見る時には、その全體として、餘りに考察が無く、智識も洞察も缺けて居るのを心苦しく感じる。從つて、この欄の標準が、如何しても低い事を感ぜざるを得ぬ。

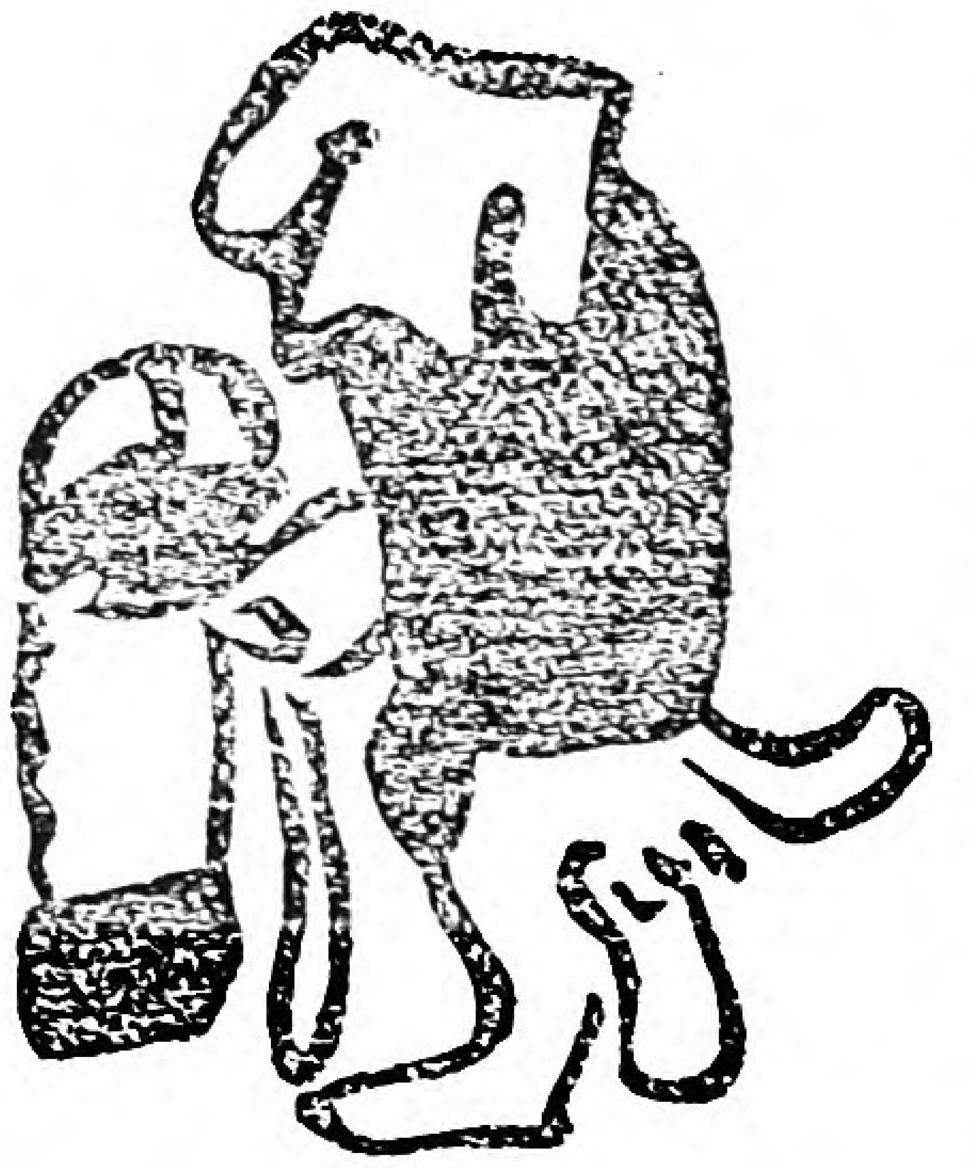
諸君はこの自分の偽らぬ言葉に向つて如何いふ心持を起されるか。自分は、次號から、諸君の私信の一部をこの欄で公にし度いと思ふ。諸君も思ふ處を書いて送つて頂き度い。但し、感傷に類する不平、われぼめの心から書いたものは決して取らぬ。そこはあらかじめお斷りして置く。

（手紙は女子文壇社内小生宛）

さて選評にかゝる。

坂田青夏の「敵とその家」粗雜極まる作である。その心のある處は平俗な境である、文章は舊い型通りのもの。たゞ達者であると言ふに過ぎぬ作。藝術的良心の働いて居らぬ事甚だしいもの。世良田優子の「敗者」幼いセンチメンタリズムである。このやうな思想と、生活の內容とはとくに捨てゝしまつて居らねばならぬ。千鶴子の「詩」は面白い。氣のきいた作であつた。根は極く淺くしか人生に突進して居ない。この人の持つて居る特異な材料が、この點の進步で彩られたらば、中々面白いものに成るであらうと思ふ。狩野京子の「叔母」は珍らしく元氣のあふれた作である理屈も相應に徹底して居る。書き方も、ものに煩はされぬ力があつて面

白い。ほゝづきの作が「お絆と祖母」「向家の娘」と二篇入つて居た。「向家の娘」には野卑な、少しも洗練されぬ言葉で書いてある。斯う言ふ事は現代の名家から來た悪感である。今の時代のその人々が、斯う言ふ事については意外に神經が痴鈍であるのは悲しむ可き事である。「お絆と祖母」の方にはじみな正直な描寫が見られた。落葉の「女教員より」生活が餘りに貧弱であるのを思つたばかり。泉梅代の「お町」古いセンチメンタリズムである。しかし快く書いてあつた。山崎都鳥の「賞與」はつきりと巧みに書かれて居る。面白いとは思ふが、まだいゝエルを出たものではない。浪の花の「南國より」女らしい心持で書いた手紙。無名氏の「夏の夜」纏り付くやうな文章がいゝ。クラシツクの香ひはあるが懐しい處がある。少女の時代を書いたものとして、何でもないものではあるが捨てがたい。磐田順子の「東京へ來た女」この人も東京に出て來たと思ふ消息を知つた。田舎の人の持つて居るオルガーな言葉と感情とが見えた。藝術としてではなく。琴子の「母」はよく書いてある。かなりしつかりした頭である。自分はも少しこの人の確實な技量を見たく思ふ。わかばの「下琉き」これはこの人の技量の確實さを思はせる作である。しかし、量は輕い。それと、あまり長いのとの爲めに割愛する。矢澤榮子の「三時間」は面白い。輕いがよく書けて居た。靜枝子の「彼の日より」も面白い。よく細かに心理の變化が書かれて居る。月草女の「八年振り」單純すぎるすつきりとは書けて居るが。のり枝の「乘換場」この人も進んで來た。背後にある作者の心





犬芝居　伊賀米田きよ

は、まだ平俗だ。壽賀子の「師匠の娘」は拙い事はないが、平凡である。新免さかえの「釜」には人に迫る力が無い。葵の花の「歸省」例によってじみな作。しかし見ばえのしない作である。小林たか子の「死の幻」は一歩深い處に踏み込んで居る。この人の進む道はまつすぐであるらしい。才が豐かである。葉子の「從兄の家」はしつかりした書き振りであるが、或る型を脱し得ぬ。これを見る時に自分は日本の女の一部の生活に向つてあまりに小さい殼の固いのに驚く。貞子の「宿屋の娘」前の言を繰り返し度い。

以上の中から「死の幻」「叔母」「母」「誇」「彼の日より」「夏の夜」「賞與」「八年ぶり」「三時間」「乘換場」といふ順序で九篇をとる。

○公園の女（つゞき）

東京　禮枝

一通りすんで仕舞つた頃、四五人の女がドヤ〳〵一處に上つて來て、おじぎをして二人の後をわりに靜かに向ふの隅に坐りに行つた。其の後に十歳許りの少さい女の子が、ちよこ〳〵ついて行つたので二人は不思議さに見送つたが、別にどうした子だともきいて見ない内に、佐々枝といふ女が「この子はね、自宅の隣りの子なんです、ついて來たがつて仕樣がないからつれて來たんです」、「さういゝ子だね」「ほんとにいゝ子柄だわ」「お母さんはあるの、さう何して」「自家に仕事して」「姉さんは居ないの」「居るの、新橋の藝妓なの」「アラさう、ちやあなたも今に藝妓さんになるんでせう」染吉は若々しくこんなことを云つてからかふのが好きな性の女だつた。「エ何？さうなんでせう、エ何ですつて、きこえない」染吉は耳に手をあてゝ向け乍ら笑つた顏をかたむけた。「アラいやだよ美ちやんは、染吉さんこの子はね大きくなつたら染吉さんのお嫁さんになるんだつてさ…」と佐々枝でない外の女が口を出したので、皆をかしがつて腹を抱へた。「まあをかしなことを云ふ子だね、私しやお前の情夫かいな」染吉はまたじようだんを云つて銀の煙管の首に白梅をつめたので、志喜若も思ひ出しておなんどゝ、何かの筥夜帶の間から、くすんだ色の煙草入れを拔いて、細い煙管を赤い唇の間にはさんだ。志喜若と染吉とはこの座中第一の人氣役者なので、座頭は外にあり乍ら、座主はとかく二人に我まゝを云はせるのだつた。けれ共返り新參の志喜若の方が三枚目に下つて居るので自分より年の下な二枚目の染吉を氣持よく思つては居られなかつたので、何かにつけてしひてとげをかくす樣な態度が見えた。小娘のかうしたそぶりにまで眉に痙攣を起して、心の目がグツとやせた女の顏をにらむのであつた。やせた女は、わりにそんなことを氣にしちやあ居ないらしい。「皆おそいわ、あたし先に一つぱい入湯つて來るよ」と立ち乍ら、手拭を鏡の向ふの竿から引つぱつた「私も一處に行かう」と志喜若も同じ樣に立つた。三十に近いやせた女と、三十を五つ六つ歩んだ大柄の女の、いなせなドテラを抱へた姿が、廊下のはづれからだん〳〵下に消えて行くのを見送つて、殘つた下廻りの女達の一人が小さいきこえない樣な聲で、「志喜若さんも四年前とはよつぽど折れたね、あれでも」と云つて、それから四年前の樂屋内の騷動や、その頃のその女の勢のそれは〳〵大したものであつたことなんかを、新らしく來た女達に話した。間竹格子のはまつた高い窓から入る薄いひなたが、過去を忘れ未來を考へずに、たゞその瞬間々々を奇麗に色どつて行くことと許りに骨を折つて居るかうした女達の白粉やけのした顏をぼんやりはひ廻るのであつた。（をはり）

○彼の日より

愛知　靜枝子

いよ〳〵嫁も定つて五日の日には杯まですんだ、結納も染めてましてあるのが出來次第送るやうに約束された、お重は杯の日からなんとなくおちつけぬ様になつた、心がいやにそはそはして、未だ見ぬ姉となるべき人をそつと心の中で描いてみる事もある、丸い輪廓のツンと高い鼻、撫で肩のすらりとした優しい幻の姿が浮ぶともう堪らなくやるせなかつた。何となく嫉ましい念も湧いた。「ほんたうに兄様は仕合だ。」自分の思はしくない縁談に引きくらべていつも斯う思つたそして今までにあつた自分の縁談と云ふものを、靜かに考へて見る、よく高瀬が〳〵と云はれて、幼い頃から深く胸に泌みてゐた高瀬の方の縁談がにべなく斷られてからは、今までの燥ぎやのお重もなんとなく、物想ひする様になつた。そして今に見ろツと苦しい瞳を見張つた、どうでもよい彼方より立派なところへ嫁つて一つ見せつけてやりたい、とはいつも彼女が願つて居るところであつた、それに近頃は少しも思はしい所が無いのだから、よけい堪へられないのである。

「もう自分は邪魔者だ」と妙に心が僻んできた。

夕方など薄暗い座敷の戸を閉めに行つて、暮れゆく庭に浮き出るやうに咲いてる白い紫陽花や、魔物でもひそんでるやうな暗い萩の茂みを見つめてゐる時など何とも云へぬ淋しさが襲つて、はら〳〵と泪をこぼす



親と子　陸前　黄川田かよ

がさへある。

よく譯の分ぬ物想ひに、玄關の柱などに凭れて、夕もやに煙りゆく遠い森の方を茫然と見つめて居ると、「お重々々」と指高に呼ぶ母の聲に、やつと我に返つて「おや忙がしかつたのに」と今更斯うして居るのがすまないやうな氣もする。

どうして自分は此頃こん麼心になつたんだらう？　やはりあたりが單調過ぎて淋しいせいだらうか、それなら嫂さんでも來て話し相手になつてくれたら、屹度この單調な日も無くなる、私の寂しさもなほる、と思ふともう今までの嫉みも僻みも夢の樣に忘れて了ふ、そしてひし〳〵となつかしさが込み上げてくる、熱い〳〵情のこもつた手紙に「未來の妹より」としてそつと出して見やうかとも思ふ、どうして自分の心は此麼に矛盾してるだらう、といつも思つた。

今朝お重は顔を洗つてるとふとお世辭のいゝ西隣の小母さんが、「お重さん大分朝顔が咲き出したから、一度見にいらつせ」と昨日垣根ごしに云つた事を思ひ出した、ザツと勝手だけ掃き出してよく知つてる隣の花壇へ行くと、薄紫の大輪や赤や白の絞りが、此涼しい夏の朝にふさはしくすつきりと咲き出してある。自分のくさ〳〵する心もいつか忘れていつまでも立ちつくして居た、「おやようこそ」と小母さんも出て來た、「お早やう」と云つたばかりで二人はしばらく默つて見つめて居つた、と小母さんは思ひ出したやうに

「此頃ね私××へ行つたら、大西さんの家もどうやらお嫁さんが定つたらしいが、貴女お隣だからご存じでせうと云はれて、私ほんたうに困つて了ひましたの、眞實でござんすか。」かゞんで草をむしりながら聞いた

「まさかそん麼ことがは……」と笑つて答へなかつた。「私はまた貴女が先とばかり思つてましたの、だが何んでご座いますわね、あなたはそんな事ないでせうけど私の姉の家ですが、此頃も姪と同じやうな嫁を貰ひましたら、皆んなが姉樣々々とどんな事でも嫁に頼むものですから、毎日姪は蔭に隱れて泣いてるさうですよ、お前みたいに娘の方から早くかたづけないと云ふが、あるものかつていつかも姉に云つてやりましたがねホ……」と無雜作に小母さんは笑つた。

なんとなくお重は自分の心を探られるやうな氣がした、そして自分に當てつけに云つてるぢやないかとも想はれた。「私は其麼人達とちつと違つてますわ、も少し強いから……」と云つてやりたかつたが、いつか瞳はうるんで居つた。けれどさうした運命もぢき自分の身の上にくるだらう、と思ふとお重は堪らなくやるせなかつた。

家へ歸るといつまでも〳〵机の上に俯伏して居つた。

投稿家に注意

△いつも注意することで、今更初まつた話ではありませんが、何うも澤山の原稿の中には、字の汚いのがあつて困ります、字は上手下手に拘はらず、正しく書くべきものです、正しければ美しい、美しければ選者の方も讀むのに快よいわけです、汚い字でなげやりに書いてある原稿は、内容を見るに先ちて、不愉快な感じを與へるばかりでなく、作者の不眞面目な態度が表はれてゐるやうで、採る氣になれないこともありますから、皆様も原稿の文字は成丈正しく書いて下さい（記者）

詩

河井醉茗選

○かなしめる者のうた

鐵橋

本郷れい

夕陽の光きらめく街の端の鐵橋を
過ぎて行く、過ぎて行く人の群を見給へ。
酒場の愉樂に荒みたる放浪人の足音に
川べりの毒だみの花がわびしく散り
ついと蜻蛉がたつて行く。
高架鐵道の長い連が空を斷て走つて行けば
静寂な寺院の晩鐘も亂調に鳴り響く
夜のちまたへ急ぎ行く商人の面には
何がなし暗きもの丶影ひそみ、
ひかれ行く荷車にはダリアひなげし
金蓮花紅く、紅く、ふるへて居る。
午後六時、
都會の街の入日どき
足磨れた鐵橋を行く、さまぐ\の人ぞ行く。
生きむため、樂しまむとて、はた意味もなく、
或は疲れてたどく\と……
橋うち渡り行く人の群に交れば堪へ難く、
暮る丶まで、暮る丶まで
あかく錆びたる欄により、うちつゞく人の群をば見てありぬ。

くらき雨の夕に

現在のひと丶きに生命あり、よろこびありと人は云ふ、
さあれ我が前なるひと丶きは、餘りに寂しからずや
散りやすい木苺の花をた丶いて小雨ふり
もろい木苺の花のほろ丶散る――
單調なる我が夕
現實の夢を求めんには餘りに曲もなからずや。

公園の夕暮と哀愁

淡く夢み初むる活動小舍のイルミネーション、
疲れた樂譜のにほひをかざつ丶
池のほとりを歩むとき
汀の樹立はうす青し
活動小舍の若い女が、青い衣きた女が

術なげに後れ毛をかき上ぐれば
噴水はさら〳〵と晩がたの風にさむる。

映畫をよぎる慘劇に、
狂女のいたましい表情に、
たあいなく流れた涙の、かわいて行くあつけなさ。
されどそれもなほうれし、然なり、
未だ歡樂の名殘褪せねば。——
やるせない寂しさに歩むともなく
公園を出でゝ行けば、よりどころなき詫しさの
また我胸を領し去る。

かなしみ

何故に悲しきと問ひ給ふかや、
我ら何の證なく生れ出でゝ
またいつの日か命召さるゝ
生物の運命思へば、悲しまであられむや。
何とせんこの寂しさを。——
生くるも佗びし、死ぬるは悲しと
近松の劇の女性の小人形は
傀儡師の箱の上に、をどり狂うて嘆けども
人形つかひは冷やかに。……
人形つかひは冷やかに、無意識に
生あるものをもをどらしむ。——

（天賞）

『鐵橋』は都會の情調を歌つたものとしては新しくない、模倣としては意義があると云ふことだけは云へる作だ、『暗き雨の夕に』は理性の明かに見え過る作だが、私はこんな詩も愛誦する一人だ、『公園の夕暮』は『鐵橋』より熟した情が籠つてゐる、眼を輝かし、神經を緊張させて見てゐる人の姿が想はれる、『かなしみ』は『暗き雨の夕』と同じ歩調から出た作だが、此方は少し感情が覺めすぎてゐる、もつと、ぼーつとした夢のやうな心持になつてほしい、人形遣ひもわるくはないが、斯う説明に落ちると却つて面白くない只面白いものとして見てもらひたい、大きな心で。

（評）

○月見草

福岡縣　いさを

初夏のあかるき入日とき、
黃なる花かすかに匂ふ。

開かんとする花の力強さよ、
かたく守りし蕾が一ゆり
かすかにゆれば
其瞬間。
うす綠の萼はそとやぶれ
こぼれいづる黃色、
あゝ其瞬間。

縛をときし花はうれしげにやさしく
かすかに吐息す。
夢見るごときこの花の蕾を破る力強さ

かくて、一つ一つ、ひらきし花は、
今、新しき月の光を吸ふ。

あゝ神秘の花。（璃寶）

月見草の咲く時を知つてゐる者は、此詩の好いところを知る筈だ。（評）

○夜の河岸

豊後　吉田夕草

黒色の水に沈默はつづく
死んだ樣な夜の河岸には行く風さへない
ものにおじけて見はつた眸の樣な星が
幾群か群をしてすゝりなく——私の心と共に——
どてからとこなく流れて來た
夜のうすあかりに
夏は涼しくふる……………
戀人の温い胸にすがつて泣く樣な
美くしいおとなしい——沈默と寂寥
——
……………
あゝいつまでも……いつまでも……



浴女　福岡みどり

カンナ

戀に勝ち誇つた若い女の
はりつめた情緒を思はせる
——夏夕べの赤いカンナよ——
ひろがる暮れの中に
活々しゃ美くしい姿を見せて——
いつとはなしに
闇に温順しく葬むられてゆく
若やかな……赤いカンナよ……
汝がなつかしい？
私の戀もさうした風に美くしく
温順しく暗……から
暗へ——
——葬むられて行つたのだ!!!

（入賞）

夜の河岸もわるくはないが、物足りないやうだカンナの方はすつきりとした好い詩だ（評）

○六月の歌

信濃　芳子

空には重い苦しみにつかれたる大氣のなやみ
一すじた晴間にも不安げな雲のゆきかひ
明るさをはゞかる六月の空に夜となく晝となく
雨が降る

あゝ疲れし我心を
夢破れし小島の小さな嘆きよ
思ひ出もない――望みもない只何する事もなく
て、一日を倦みつかれて窓による、北庭の濕り
地に
しと〳〵と降りそゝぐ悲しい雨の音何かしら陰
しげな青桐のヴエール越しに
ほそ〳〵と花にむせび泣く雨の素足よ
雨にうたれてうなだれし色あせし花のいたまし
さ
濃暗き葉蔭には蜜をしのぶ血を吸ふものゝかく
れ姿

桐の花咲く六月は
明るい階層部屋に新茶をすゝる甘んばしい香の
たゞよひ
あるひは
養蠶舍の板敷にこぼるゝもみぬかのなつかしい
手ざはりよ
しと〳〵と降る雨の絶え間に
まゆ引く娘の樂しい唄聲のひゞき

　純抒情詩風でないにしても、此位なら感情
が動いてゐる、只の描寫ではないが、もう
少し只の描寫をはなれてゐたら一層引き立
つだらう。（評）

○習作

豐後　赤き花子

暗い夜の寥しくも更くる時
私は外面に出て見た――

重く疲勞た空氣にそゝられて
湧いて來る樣々の追憶の――
――うすにぶい瞳の前に
打ち顫ふ樣々な追憶の――
暗い足どりして
青草の上を踏めど、
何うしても私の心に
まとまらず、のびてゆく。

夜は更けて
終列車の響き消えぬ
其の後の線路のなげき――
――暗い線路の重い歎き――
まとまらぬ思ひ出の
別れ〳〵て忍び歩めば
温き私の肌に、
物哀れな小さき聲して
歩み來る――線路のなげき――
――まとまらぬ哀しい追憶――
あゝ夜はふけぬ……

　注意して作つてある、少し注意しすぎて、
足もとを見い〳〵こは〴〵歩いてゐるやう
な態度もあるが、他の投げやりの作に比べ
たら、大いに稱揚して宜いのだ。（評）

○梅雨

富山　村山咲子

蒸暑しき日はつゞき
おもたき氣は重なりて
梅雨は誇らしき姿を見せぬ。

凡てのものは青々と生い茂り
されど悲しみはその中よりうまる
わが心いたづらに沈みゆく――

沈みゆく心を破る如き
神經のたゞれたる如き
いかに悲しき雨の音よ

青葉と雨と
青草とぬれし端と、水たまりと
わが目にうつる凡てのもの
たへがたきかなしみを誘ふ――

　縦から見ても、横から見ても抒情詩には相
違ないが、少し力抜けがしてゐる。（評）

○默せる戀

羽前　長澤美也子

うすら恥しい中の戀
日毎一つ道にて會ひぬれど――一言だにかはさ

ア、
二三日行き過ぎて後互に振り返つた時の——瞳
と瞳はかゞやいてあつた。
紅葉散る淋しき秋の日も
凩冷たい冬の日も……
二人の胸は常に暖かつた
默せる戀
……互に心を以つて心に
傳へた——

悲しやな
思へば……
戀しの君の
姿は失せぬ
いづく〜へぞ身をかくせし
や
無口なりし我が悲しさよ

空想らしく、また現實らしく、何れでも好いが今少し散文離れがすると更に好い（評）

○春の日の作

靜岡市　淡い子

桃色の
大きな
秋には
美しい美しい
花が充ちてゐる

双手にいだいて——秋を
廣い〜
海原のやうな



書見芝　村木萩子

若草の野を
をとめはゆく〜

一歩——一歩——
その度毎に
野の様と、配合のよい
桃色の秋か
花は落ちる
やはらかい草の

果しない廣い野邊の
かぎりない秋の花は
時の力の續くかぎり
桃色のをとめを
追うてゆく

遠く〜
霞のむかふ迄も
花は連つた

何事をか示すやうに——單純なロマンチックなれど、興味を持つてゐるから好い。（評）

右の外▲海の上（筑紫饒子）▲ピラミット（羽後さぎ草）▲蜘蛛の巣（近江、瑠璃香）▲夢のうた（大阪、杉山けい子）▲卯の花（柏木、N子）▲夏の花（東京、みぎは）▲白日の光（王子町、大浪せい子）▲折々の心（周防、若菜）



入事（散文）　編輯局選

○行きつまりて

十七歳の秋　うす雲

「こゐかれし小鳥」と題して、紅いのやら紫のやら帳面の半ばを染めたインクのもじ。

嵐くる、嵐くる。

弱々しい梢の葉は、をのゝくやうに、泣くやうに、ざわめきやまぬ。

すゝけた物ほきの軒下、木の肌のいたましく雨にさらされた戸に、ぴつたりと身をすくめてゐる小さなひとりぼつち。

はらつてもくぉちる前髪を額に亂して、又一群の風由を長くひく氣味のわるい黒いもすそはたまゆらにふしぎな幻をまのあたりにひろげて、すぎていつた。

大暗坑を運び出るやうな自由な舞樂の一列。そこにたゞひとつの唇は、かすかにうごかうとして、あたりの暗さに吸はれるやうに聲はそのまゝのどにかへつてしまつた。ものすごい白日のなごりの光は、雲のすきまから梢を透してひたと二つのうるんだ目に吸はれてゐる。吸はれてゐる。」（天賞）

四絃一聲如裂帛何といふ高調な響きであらう。由來女子文壇は才媛雲の如しと稱せらる、されど新審を通じて此人の前に立ちて顔色を失はざる者いく人有りや。天上有星皆拱北。人間無水不朝東。願はくば長くおごらざれ。（評）

金龍寒潭を守らず、玉兎豈蟾影に栖まんや。されど願はくば長くおごらざれ。（評）

○きんぽうげの女

米澤　ほゝづき

「ア、あたまに何か……」振返つた艶ちやんの顔はさつと變つた。「木片よ」といふと安心したといふ樣に頭を突出したがそれでも「早く……取つとくんなー」聲が低く迫つて居る。青葉に映つた艶々しい銀杏髷の太い輪にチョンと突立つた灰色の木片、無造作に差出した私の細い指鋏は合したと見る間に跳返つた――手ぺのないグニヤッとした蟲である「嫌だ裸蟲ッ」艶ちやんも殆んど同時に叫んだ「蟲!!」後にたぢろぐと艶

ちやんの柔かな肩に在つた左手がいつの間にか確と握られて居た。「取つて！取つて！」ヂダンダ踏んで私の手を引張る。艶ちやんの顔が青ざめてピク〳〵動いた「艶ちやん――」「とつて……とつて……」振切つたともなく放したともなく二人は離れた。「とつて……誰か――」と走り出した「蟲……誰か……」私も續いてきんぽうげが咲いた土堤道――黒い木履――紅い帶長い袂ちぎれさうに振り〳〵行く銀杏髷にアレ……灰色の木片蟲がしふねくチョン立つたまゝフラ〳〵ゆられて……。

艶ちやんは――だれにあの頭の蟲を除つてもらつたかしら――それなり學校へも來ずにしまつた。濟まない〳〵行瀨ない感じが何時までも殘つた。十幾つのトンネルを越して南から初めて汽車が我村に入込



鏡面　山口聚櫻畑かの

んだ時箱は大方空であつたまだ出來上らないプラットホームの、黑煙にからまれて白い腕や胸をみだらにひろげた櫻の下でろ〳〵した墨の上に暫く立つて居たあの弱げな後姿――黑地の緞布の大きい紅花許りが冷い薄墨にヒッタリにじんだ夕暮の色にクッキリ浮いて。酒に爛れた大い眼が物云はず生白い驛員を指圖して居る人に馳寄つて「父さん……」とソッと呼んで長い單衣の袂の下に忍ばせた辨當渡すと線路傍の草の中をズーと暗い方に向いて歸る。青黒い涼風に絶えずもまれて消えて亡りさうなホノ白い後姿の肩の邈に遠くのシグナルの赤い火が明滅して……。黑い田舍縞の幼い私は身の魂を奪はれて影の樣に始終その後姿を追うて居た。すぐ潤む大い眼でにらまれたゝ無茶苦茶に機嫌をとら

れたり「きんぽうげは毒よ」と教へると「いゝことよ」とジロリと見上げて陰つた草の中から長いのをスルリと抜いて挿すあの水滴る様な銀杏髷にパッ魔女の唇の様な小さな花が酷い様な懐しい様な笑を溢して居るのをもう一度見たい——學校嫌な我儘な、あの尖つた性格が美しい姿があの儘少しも陶汰されず損はれずに今もとつか寒村の小驛に居るに違ない、ニスの新らしい構、その根本から敷つめた砂利寒く地べタに吹付ける石炭煙のあひ間にあの青いこけた頬大きな瞳が私をジッと見つめて居る様だ。無學でも無智でも何も語らなくとも、もしお艶ちやんが今私の傍に在つたならキッとこの自分にも解らない堪らなく物足らない淋しい心を満してくれるに違ない。あの強い〳〵——そして何かしら脆い影々裏づけた——色彩……きんぽうげの女……草を潜るレールのひらめき……懐しい下卑た上方言葉を今一度聞きたい——ボーノ底の抜けた淋しこの様な音を吐いて北をさして小さな驛〳〵と還つて走つて行くあの鉅大な怪物の黒い口から吐かれては呑まれては吐かれさうして一生終る女かもしれない。丘がくづされ櫻が倒されて草柔かな四月野が無慘にへがされて點々血のにじみの色もあせた。地肌一度はこの村にも見た惨劇を平氣で追ひ踏みにじつてそして。

到る所で平和な質朴な村の少女の胸に或る厭はしい不安な美しい跡を發して。流星の様に人々の手をすり抜けてはあゝして頭の蟲をつけて——一生走つて。（天實）

淺薄輕浮側容の構成無き某々等の作を本欄に見てつねに失望する讀者よ、目を轉じて一たびわが散文欄をさくれ、陳きは新しきにかはり、老いたる者は若き人に讓らざるべからず、これの奕々たる光彩と彼の落莫たる晩景とかれに輓歌の近づけると、此にイリユージヨンの滅せざると一はたゞ傷むべし一は豈悦ぶべからずや。（評）

○行水

廣島　石冬款

梅も櫻も桃も一時に咲いて一時に散つてやがて信州にも夏が來るあたりは一面に——視線の屆く青々として木の葉に被はれてあちこちの木々に喧しい蟬の聲を聞く頃になると畑の中に有る井戸のそばの蔭の行水代りに鐵砲風呂と云ふのが立てられる私とそれが待遠でならなかつたそして火の番をするのが私の役目で又それが樂しみの一つで有つたので有る古びた腰掛を持ち出して火を見る合間に學科の復習をするのが只何となくうれしい——傍への南瓜の棚の鮮に見えて居た影がつかかげつてヂリ〳〵する様な強烈な夏の日影もすべての物にさらば——を告げて遠く駒が嶽の蔭に沈んで行く頃にやうやくお湯がわくすると私が一番に使ふので有る閑靜な山里もさすがに黃昏は忙しいキイキイと車井戸を汲み上ぐる音や人を叫ぶ聲がする野良歸りの

おひようが鍬や鎌を井戸端で丁寧に洗ひ流して一様に「おしまい」と云つて歸つて行くのを無言で見送つたま〻急いでお湯に飛び込んだ透き通つた心持よいお湯が白い肌にしみ込むやうな！ユラ〳〵と消えて行く湯氣にも勞力の賜と云つた樣な喜びが感じられる、眤とお湯につかつて靜かに瞑想に耽つて居るとあたりが次第に暮れて作物の葉や花がぼんやりして來る高助とよぶ大きな桑のずつと差出た枝の端へカンテラがさげられた冷氣を帶びたそよ風がすうと吹いて來ると桑の枝がユラ〳〵上下にゆれるので私は其度ハラ〳〵して見守つたきれいにうねを立て〻盛り上げた茄子畑の邊りから淡い土の香が漂浪つて來る一寸手をのべても屆く所まで澤山に作られた里芋の葉の上に一掬の湯をそつと掛けると大小の玉が幾つも幾つもころ〳〵とおどつてやがて一つにざーと落ちて黒ずんだ土に心持良く吸はれて行くのがカンテラの微かな光にぼんやり見えたせつせと體を流しながら此度は鬱々と茂つた夏桑のあたりに瞳を遣ると私は何となく氣味惡くなつて來た幾重にも重り合つて繁つた葉の下は暗黑で有る其暗がりに眤と瞳をこらすとふと何者か薄い影の樣な者が動く如に見えたので氣味惡いよりも恐ろしくなつて思はず「お祖母さん」と叫んだ其聲が夜の靜寂を破つて四方へ響く「さーん」と云ふ餘韻がをやしくふるへて耳に殘てそれが消えて行くと後から影の者に追ひかけられる樣な氣がして夢中で着物ひつかけて居るとまあ大聲して。（人實）

これは行水でなくて野風呂のやうな氣がする、周圍は精しく書いてあるがなぜ家から遠い所を撰んで桶を据ゑたか、印象は少しぼんやりです。（評）

○夕暮の窓より

千葉　伊東散花

日があか〳〵と今しも西に沒せんとする窓にもたれて、無上の悲哀に身のやり處なき時である、あゝ私は何と云ふ女だらう、物事に滿足する事ができません、餘り早く戀を知り初めた爲に今は失戀の慘はしさに泣く。

昔を思へばなつかしい友もありました。戀しい人もありました、ある時は梅ヶ丘、或時は海美くしい小濱の邊で共に語りなぐさめつ〻逢ふ時、別る〻時、其情想の床しかりし事は忘れんとすれど、忘る〻事ができません、熱しては冷めべき運命でせう、情緒の冷めた私には再び昔の熱烈な美くしい情の泉は涸れてしまひました、溫な友情、其他の床しい感想に醉うて見たいと思ふけれどそれもだめです、幼き時より父母に別れた私は、世にすね、人にすねた一方ならぬすね者です、日に日に荒み行く情緒おさへんとすれど致方ありません、天地自然の動すべからざる大悲愁にふれて泣くのは私に取りましては何よりの慰安です、悲しい時は思

ふまゝ泣いて、泣きあかせば、心の痛手は少しはうすらぐのです、私は折々思ひます、磯邊に咲く月見草を枕に身にしむ悲愁、堪へず、あゝ其の月見草を枕に死に度い、欺むき去りし人故に永久に見る事のできざる傷人を、胸にゐがいてやるせなく思へば憎き人よ、愚なる私はかりそめの人の情に酔うて外道に迷ひこの運命の悲愁と云ふ慘はしい報酬を得たも皆自業自得なのです、覺めた今はおそく取りかへし付かぬ暗い淋しい影を求めて、夏咲く月見草のやうな沈んだ弱い淋しいものになりました、私は何時までも一人がよいです、男子なんて信頼すべきものではありません、結婚をプライドとする人の心が哀れです、男と云ふものはをんなをもてあそんで後、嘲笑するものです、戀なんて何の價値がありませう。刹那の醉は狂的である、さめた後の怖ろしい悲痛、其胸の叫びは、人生を呪ひ、日に月に年に荒れて行く悲運と、自己できめてしまつたところが致方ない、自分で運命を開拓しよう、私は憎き人一人に反抗するばかりか萬人に反抗して居ります、あゝ慘はしき女の運命よ、品性だの人格だのと口許りは立派な憎き人、其の憎き人は、利己主義なのだ地位名聲に執着して、尊き誓を破り、財なき勢なき女には用がないとは。

戀は神聖よと云へ何の價値あらう、弱くとも意地に立つ我心を見よ、憎き人よ、恥を知れ、私は意志を明かにする事のできぬ程、若い女でない、ないけれど過去の思ひは湧く、十年後彼の憎き人に怨みむくいん時投げべき小石を得ん事を切に祈る。其の小石を得んために、あらゆる社會の冷笑も甘じて受けてゐる、あゝ泌み〴〵迸ばしる涙を納めやうしとすれど心の底よりもつれあひて湧いてくる。(人賞)

激越。(評)

三才以下の評は七號八號にあり。(記者)

○盛夏の頃

山口縣　千香子

忙しかつた田植も濟んで一月餘り、一日一日と太陽が頭の上から眞直に照る樣になつた。門の砂も强烈な光線を受けて目映い程きら〳〵光る。此頃から私は毎日果樹畑の草を取りに出る、暑くなれば葡萄棚の下で休む風が吹く度にさら〳〵音を立て、搖ぐ葉の間から、白い袋が一つぱい見える袋のまゝそつと摘んで見た、今日は昨日よりも大きくなつた樣だ此の梨が熟す頃には懐しい伯母の家へ行かれるのであう。

周防の小富士とよばれる四熊岳の中腹に生れて、綠の山と小さい谷川と、一丈餘の石垣の上に建られた家から座ながらにして周防灘の美しい景色を見るより外には知らない私は、水淸い、澄、菊川の流れに添ふた平野、見渡すかぎりの綠の稻葉の中にある白壁の家──その伯母の里が懐しいのである。

毎年毎年盛夏の頃にはきつと遊びに行くのにきめて居た。まだ從兄も私も幼かつた振分髮の頃、菊川に遊んで河に馴れた從兄は平氣で、板橋の上を馳けて渡るので、私もまねて中程まで來た時、尺幅の橋が小波と共に下へすーッ流れる怒いて其の方一足を踏むとあつと、思ふと一生懸命橋に杭にしがみついて居た、乳の邊をさら水が流れる「まあ淺うてこそよかつた」と伯母樣は靜におつしやつた。それは七つの昨だつたと記憶えて居る。

それから後、巾狹の石橋や板橋を渡る時、過去に見た幻影が電の樣に胸にひらめく、不安、と、恐怖に强めて水を見まひ見まひとあせつて渡るけれど、ともすると。すらつと、橋が動く、はつと思て目を堅くつぶつてしまふ。十年昔の七つ子は、十年後も尚平氣で橋が渡れないのである。

○氣まぐれの日

石川　松田玉子

ふと物置の隅に見出したぼろ箱の蓋にはられてある赤い繪――いくつもの夢を越してあなたの古い思出――それは舌切雀であつた。くどくどしい色彩も昔しのまゝになつかしく、お爺さんの大きな紋のついたお羽織の紫なるもお内儀さん雀の前垂が、うちの風呂敷と同じ縞だと騷いだことも、お隣りの慾張ばあさんのいやらしい顔も、その時分これればかりはぢつと見て居られなかつたお化けのロクロ首も――。

私はすつかりこれを忘れて仕舞つてた。舌切雀大好きの本だつたのに。

いつの間にか、誰の手にか、くづされてこんな處にはられて。そして私は今まで知らなかつた。

今、日を重ねてよむ厚い小說本とおんなじに、この紙四枚か五枚のお伽繪本をめでたしくまで讀み終ると、隨分とながい、いろくの變化を經てきたやうに思つて居た。

あかずその繪を眺め入つて、くりかへしその假名文字をたどつて、尚あかぬものは舌切すゞめ。「舌切雀はどつちつた、チヨツチヨツ」は明け暮れ、口ぐせであつた。



何　　神田　佐藤あや子

○豆いた

岡山　桃の

仕方なく横町の駄菓子店に行つたら、恰度いま荷を卸ろしてゐたので新しいからと思つて買つて來た、と母は言つた。銅貨ひとつ持つて町家の子は馳せてよくこの豆いたを買ひに行つた。一錢に四個呉れる。大豆を皮をむいて砂糖でかためて板にしたもの嚙むとカリツと割れて氣味がいゝ。私はなんだか幼い兒の仲間入をした樣な氣分でそれを喰べた。「割においしいね」「左樣だらう。浪花堂が跣足かえ……」「あら、あんなこと。浪花堂に及ぶもんですか」いろんな問答をしながら、ひよいと母の㒵をみると、まだ何か持つてるらしい。「お母樣。それなあに」二十の姉樣わざとあまたれた調子で訊いてみる。「なんでもないお前にはあげぬ。ほゝゝ」母はさからつた笑ひ方「頂戴な。頂戴。下さらぬの。いよく」私の言葉は次第に大きくなる。「此處へ置いてゆきます、おあとでおがり……」母は笑ひながら床の傍らにその紙包をおいてゆく。「人のわるい……」と言ひながら、襖に消える母の

後ろ姿をつと見やつた私は、思はず涙が頰をつたつた。悲しい涙ではないうれしい。涙でもない。子は母によりて生き、母は子によりて生く。愛の結晶した涙である。そつと眼を閉ぢて、靜かに靜かにねやうとつとめた。

○上野行

大久保　野の百合

今日も亦大きい鼻の高い一寸羽左衛門に似て居る顏立のあの車掌に乘り合せたしこれでもう三度――

都に歸つてから此方隨分と人寄の處へも出かけたけれど友はさて置き顏なじみの人にさへ唯の一度行き合せた事もないのに數へきれない電車からかうして同じ顏のに續けさまにぶつつかると何だか珍らしい出來事にでも逢ふたやうな氣持がする珍らしいといへば此間それはくめづらしいものを見た二十七八――か銘仙を着たが一寸いきな樣子の人何の氣なしに顏を見て私身ぶるひが出てしまつた。

鼻も口も變つたことは無いけれど……おゝ其目其額まで土橋のかさねを思ひ出さずには居られないもの……それでも髷にして居たから何處ぞの人？妻だらうけれど……私よくまああんな氣味の惡さを辛抱して見て居られることだ――と思つた。今日もまたそれは可愛さ珍らしい姿を見た車掌臺の方をふと見たら入口に近く一寸した物を持つて立つて居る娘着物は白地の中形だけれど、ひわ色無地の紋ちりめんと桃色を合せた晝夜をふくつとした樣う結んで！すこうし曉いた衣門つき髮をまるく反つたやうな桃われの……髱も色白なえりあしをきれいに見せたつまり加減の上できの結ぶり。それからして生めかしくないところへ銀のすゝきの簪をぬけかげんに挿して居るおつとりと氣どりげのない愛くるしい顏をして……何だかたれ簾籠からでも覗きさうなとりなり――私は何うしても電車のつり革にぶらさがつて居る娘の氣はしなかつた。

○微明

紀伊　宇田菅子

ガチヤリ、それは幾つも結びつけた鍵の音であつた「さあ明きました

ぜ」と云ひすて、好一は仕事場の方へ去つた。

厚さ五六寸有らうかと思はれる大きな開戸は、とびらの樣にギーイと兩側へ分れる、内側の鐵の戸の冷たい引手に兩手をかけると、ガラリガラリと重々しい音たてゝ開いた。

竹の皮の表ざうり引かけて、なめらかな板敷にかすれきつた音を殘してうす明りする階段の方へ行く――話にきく中世紀のモナステールの樣だと思はれた幾十年間日光にふれない冷え切つた空氣、死んだお祖父さんの出て來さうな暗がり、どこからともなくスウーと風はくる。

本家の黄金時代を偲ばせる幾百の金燈籠、定紋付のおほひを被せられた幾つかの駕、天井高くつり上げられてある、簞笥長持其他の器具箱が端然と置かれ、ひよつとした場合に金具がピカリと光る。

階段の背下に劍術の道具、鎧、かぶと、竹刀、面だのこてだのはそれ〳〵掛けられ、ざるに入れられた水蜜桃は甘い香りを冷たく放つ、色の夏さうな頃のよいの二つばかり持つて二階へ上つた。

十疊敷ほどに仕切られた一と間、朱塗のぼんぼりが南側の棚に一列に置かれてあるだけ、北と西の兩側へ高く大きく作られた書棚にせましとばかり積まれた多くの書籍、樟腦くさい昔の物語りの類から近代のものに至るまで、上品な和製、ハイカラな洋裝、史傳、歴史、文學、それ〴〵細かく部類分けして整頓されてあるそれから多くの教科書、雜誌類など是等の物はすつかり、亡き伯父や、大勢の從兄たちのもので、芳樒園だの郊外文庫だの、龍山生藏書だの梅の舍主人だのと、色々な雅號が記るされてある、多くの書物を讀みし人と思つて、現在の從兄を思つて情なかつた。

古い文藝くらぶや太陽は、入れ所がないのかそこらに山とつまれてあるし、茶色になつた國民の友だの、涙香の譯物らしい厚紙のすゝけたのはこはれかゝつた古つゞらの中からのぞいて居る、

自分は　兄の二年前頃の早稻田文學と文章世界とを一二冊えり出して桃と一所に中央のテーブルに置いた

古い籐椅子を引ずりひきずり、東側にある窓まで行き歩みつかれた樣にドカリと腰を下ろす何か知ら毛皮が冷たく氣味惡く裾のあたりへふれた。

せみの聲は遠く時雨の樣にしづかに聞える、おもやの勝手の方で誰かの利久下駄の音はカラリカラリとひゞく

「金文字光る、うす闇を背景にこの小さな庫の窓から强烈な日の光りをあびた「夏のまひる時」を見まはした

七擒八縱

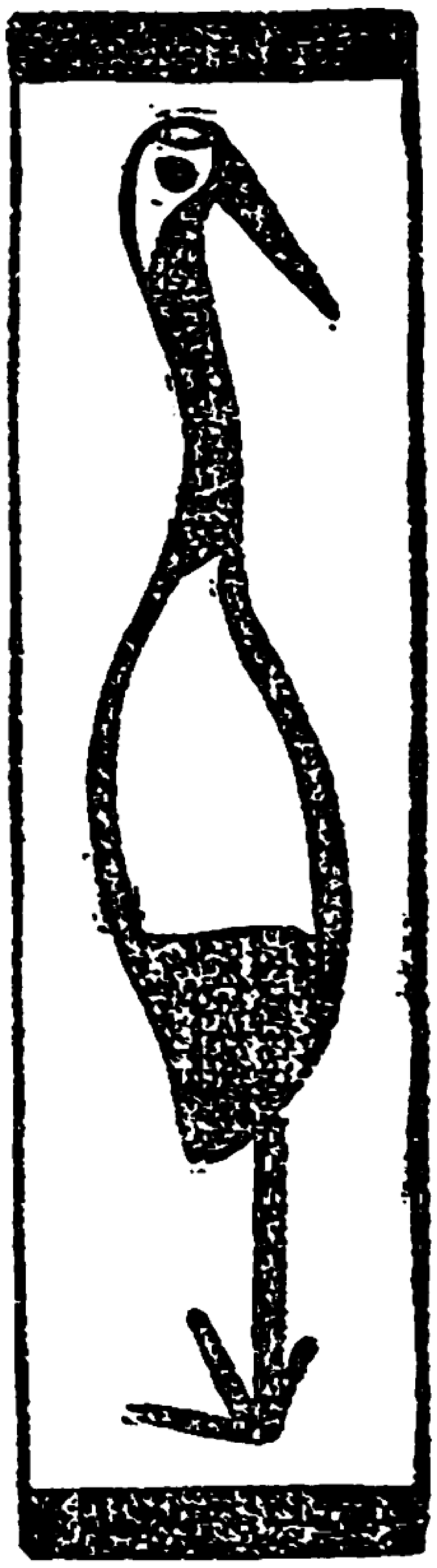
張三

△木賊笛（椹）明日は別るゝといふ子が木賊笛を吹いておき忘れて行つた記、三才の一に取る筈なれど住所無し△盛夏の頃（山口、千香）橋を渡る恐怖がよく書けてある△氣まぐれ日（金澤、松田玉子）子供の時お伽噺をよんで、長い道筋を歩いたやうに感ずるは誰にも同じと見ゆ、△豆いた（岡山、桃の）豆いたは世にいふ豆摸とおなじタネであれを薄く平つたくこしらへた駄菓子でせう、よだれが落ちさうです△生きてる今（山形、伊藤徑花）又か智惠と私も叱つて上げたい、大かた文藝に生きようと思召してゞあらうけれど、近いためしが、今井夫人飯倉夫人が降參した、長曾我部さんもどうか冑を脫いでお嫁入をするやうな話がある。金が幸福の源泉であるかどうかは私にはわからないが、女の人は鬼角結婚するがいゝでせう。汝等何が爲に少女の世を捨つるなど、力んでる先生もあるけれど、あれはせうとなしに喜ついてゐるのです△貰はれ子（函館、菲子）おなじ隣の貰はれ子が家から逐出されたのをあはれんで、うちの物置へかくしてやつてお結びか何かのたべ物と人形を持つて來て大いに慰めようとしたのが愛らしい△上野行（大久保、野の百合）草書なので活版屋が泣くだらうと思ふ、銳きは其眼也△ほのあかり（紀伊、宇田すが）お大名の倉へでもはひつて行くやうなゑらい記。觀音開の戶が五六寸は薄すぎるし鍵も一しよになつてるのが少し受取れぬ、事實なら仕方がないが△女の心（靜岡、白梂）遣瀨ない思を抱いて月夜柱に凭りかゝつた儘君子の顏は青白かつた、あの黑目勝の大きな瞳は淚に光つてゐた」他人の事を書いたのではつまらない△よるのみち（岡山、中西りか）ひざにすがればなく〳〵も――びんのほつれをかき上てエー坊やおきゝ父さんは三年いぜん鹿島に……喜美太さんが歌ふ、さびしい」上手は上手なれど夜の山道を五里步くといふことが餘りに輕く寫されてゐます△放浪の女（淺草、露の玉）題のとほり△繼子（靜岡、中山淸）同斷△手紙より（石狩、茅夕）何のことかチットもわからず△女の心（茨城、浮舟）自ら棄てし初戀の悲劇によりて、猜疑嫉妬、憤怒あらゆるすべての情は今彼女の心に溢れてゐる」矢張他人の事だ、作家は個人の體面を顧る必要無し、なぜおすましなさるのでせう△暗がり（紀伊、吉田一枝）起きよう何これ式の病と胸に力を入れて夜具を蹴飛しねまきをすてゝ蚊帳の紐を切つてころげ出て見たい」新羅萬象といふ言葉を覺えてゐるのが感心△跛娘（和泉、花）字の如し△夕の思（松山、得能すま）十四年八ケ月と書きそへあり、友を忍べるもの、名家の聲らし△鳥を飛した（和田ふく）ガラスをぬけようとして騒いでた雛を捕へ新聞へ包んでおいたら紙を破つて逃げられた」面白けれど住所無きにより沒△別れ（麴町、佐藤わか）げにや會ふは別れの初めとか」△夕顏（武生、芳香）內藤千代子を現代の若い男女の心を踊らすやうな文を作る方とあるので失笑した、高が中學生の言だけれど△手紙（伯耆、はる）美顏水と別るゝを苦痛とせるニヤケ男から痴氣滿幅の手紙を貰つたので悲しかつたとある、もしこれが所謂誘惑ならばこれに釣らるゝ女は、より以下の誘惑にも落る女である△破れ友情（千葉、伊藤散花）口語體文語體五色かきまぜの文△提灯（栃木、吉屋信子）むやみと名詞止めにしあるのでへたな下手な口語詩もソコ退けのシロモノとなつてゐます△初陣の記（同人）七月號でこの君の文を借物ではないかと評した記者に宛てた公開狀です、つまり遠まはしにイヤミを並べたもので、年はまだ二八に滿たぬとある年は十四歲、夢殿守は十八歲で女子文壇へ來たのだが、初より今のやうには書きはしなかつた、筆蹟も幼いものであつた。事實あなたが十五の女

ならば特別席につけ參らすことは何でもないことです。學籍におはすならば先づ學校の名から承はりませう。人格問題ですから責任は私が帶びます。京のしづか即今の廣江曉子をあの人は女ではない、高等工業の生徒だと知らせて來た人があつた、『八百屋お七』以來にはかに揚れる名をわけもなくにくがつたらしい、高工の生徒が澤山下宿してる町に住んでるからといふ漠然たる理由の下にあはやこの才人を陷れようとしたのです自分はあなたの證明を俟て曉子同樣ねんごろにあひしらいたいと思ひます、おわかりになりましたか△別れた時に（麻布、百合香）許すとの君が一言承はりたくて筆とりましたと書きはじめてあるから、萬丈の波瀾脚下にも湧くと思ひし、其期待は仇なるものであつた、この君の地位——すくなくとも其周圍は女子文壇唯一たるに値ひする、惜むらくは筆致あまりに暢達に過ぎて浮足になつてることです△奉公先より妹に（岡山、中村しげ子）例によりて例の如し、たて横十文字に棒を引いて書き足してあるので手がつけられない△夏の庭にて（羽前・長澤きよ）聯絡の無いことを一つの文章に纒めようとするのは無理でせう、少しゆつたりするといゝのだが△意外？囚はれし女？（京、要司村ふく）二つの者をおいてどちらかを記者に消させる積りらしい、之れだけ此君は無邪氣なのだ、友達が惡漢？の手に陷ちて旅館へ連込まれたと聞いてかけつけて救ひ出さうとしたのだが、二百圓を持出してリングを買ふやうな手やすいとには參らず、しまひにはどうなつたか書いてない、それは恐らくお孃さんにも分らなんだのだらう△夏の一日（牛込、横川勇）圖書館の樓上より雷雨を見るくだりがすぐれてゐる、頁を貢と書くやうな不注意をとり去れば立派な作ができやう△青い櫛（小石川、靜香）卷絲がほぐれたやうにふと目があいた、櫛は？バナヽの甘い香がして母と兄は笑つてゐた、四角い桐の箱おゝ櫛そつと持つたまゝくるりと寢反つてそつと見た、青い櫛！青い櫛が水色のちりめんが布の上に青い息をついてゐる、上の方に細い金で芒か二三本ゆら〳〵とゆれて青い齒の間から靜に息をしてゐる……」印象の深い作△もやの朝（陸前、かよ）氷上山の頂が今朝は見えない、只白く曇つた空の色と一つになつて何所までも白く綴いて居る。もやの流れた本丸のどての綠は曇つた今朝の空の襟に動かないお向ひの自轉車屋の店の雨戸は昨夜のまゝ閉されて、軒燈の新らしいのがやつぱり動かずに居る〻人が居るのやら居ないのやら、天も地も幽寂として、一體町の人達ー皆死んでしまつたのかと思はれる程すべてが沈默して居る只茂の中の小鳥だけがやかましい程鳴きたてゝ居る、丁度山へ遊びにでも行つて居る樣な心持でじみな單衣をちく〳〵やつてる耳元へこつとりこつとりと下駄の音をたてゝ行くのが珍らしく響く」醉茗の散文詩を思ひ出す△お京ちやん（本郷、芳村英）信濃屋のお京ちやんは繪草紙屋の新ちやんが死んでからはめつきりとめいりこんでお稽古に來ても新さんに貰つた草紙ばかり見る」年は十二とあるのがとつてつけたやうです、類型が多いからこんなものは作る方でもつまるまい△友の死（九戸、海棠）夕陽を送る郭公の聲△？（牛込、竹村白徑）狂氣になつた兄の日記よりとあり、藝者の白い脛が見えたりヘットの香が鼻をついたりする位は普通人にもある△運命（茨城、櫻井咲）梅吉姐さんが落籍されるあの人達の運命が急に氣になり出した」人は他人の運命を考へるどころではないでせう△朝（周防、若栄）大家の令孃らしいけれどお景物が澤山で中味は何にも無い△窓より（廣島、宮垣はつよ）馬のついた傘、ヂヤーン〳〵と歸る郵便車、二つとも滅法なもの△可愛兒（長野、桂澤ふかみ）白い兎が生れた金網の中を天地として△野の女（下野、月井千代）君嘆ずるを止めよ一家四人麥生に出てゝ土をたがやす、赤風流ならずや△繼母（京、中野文）文中一も繼母の字を使はぬはいゝが淨るりを聞くに行くといふのを許さぬだけ△賊（近江、るり香）娘の歸省を病氣見舞だと思つてゐたら兄から保養にかへしたのだとの手紙が來て口あんぐり、お仲のよいのはいゝが、母さんを叱咤してお祖母さんを大事にした父さんの方がゞ派だと思ふ、神樣は親孝行であつた父樣に賢き息子を與へて下すつた兄樣も實に親孝行に違ひないとアテコスツテある△山にて（靜岡、淡子）友達といふ友達が勉強してるのに兄だけがぽかんとし

てる兄は一たいどこに長所があるのだらう」これも皮肉だ△ある夕（京橋、青木扇花）人形町まで兄さんに用を頼まれる、いやといへばいたい目を見ねばならぬ」さては本當の兄さんと見える△よめない手紙（紀伊ゆり）従兄から英文の手紙が來たユーだのリーヤだのあるので心が踊るけれど、よめない、字書を引いてもよめない、英語の時間には先生のアラばかり探してゐた罰だといつて人によんで貰ふのは生涯いきぬ、あゝそれも四年の昔、よめぬ手紙は今なほ秘むれど愛する君は二年前にわれより去つたのである」われより去つたとある一句で切角の興をぶちこはして了つた△暗き春（富山、村山咲）旦那樣とお仲がいゝのかと思うと別れるのだといふ、放浪の旅に出るといふから法界屋にでもなるかと案ずると、怨みある爲に死ねないとある、熱烈の氣稽表に溢るとは見ゆれど要するに何の事か一向分らぬ文です。泣いてゐるのかお前は、泣いちや不可、泣いちやいや、いやだよ、さア、さアね……。うそをおつしやいと心の中で叫んで熱い涙が頬を融せた」泣いちやいやとあべこべに甘つたれてキッスをしたらしい旦那も旦那也矣、少なくとも私などは細君が泣けば座敷から追出すから、庭へ出ては泣けず、茶の間にはお母さんがゐる、といつて便所へもさう這入てをられないと見えて、すぐ白旗を立てるから面白い△ある夜（下關、さみどり）處女時代に散々經驗をしたのだから現に妹が中學生とあひゞきするのを知つても強いて禁めやうとせぬとある、今は昔夜雨が母亡き後妹が隣の男の子と遊ぶのを見てあゝして妹の氣がまぎれてるならいつまでも妨げまいとおもうと歌つて醉若に粋な姉さんだねと冷かされたことがある、しかし其詩には戀の經驗があるからとは斷つてなかつたやうだ△暗の前（上田、長谷川未女子）歡樂極兮哀傷多、過去の光明に憬れて今の暗黑に泣く者豈君のみならんや、すぐれて手の美しき山の君よ願ふは幸ある世に蘇きよ△頰を落した日（備中、小見山春）時々兄さんのお寢巻の香がして何となしに私の心が時めく……」なるほど人妻ですね△一笑（京、篇代）T樣は中學も第一位で出て今は横須賀に物學び玉ふ身」ブロークンハートの一△苔むす陰にも（下野、花かつら）虚榮の爲に二百圓持出してリンクを買つたお孃さんを完膚無からしむるまでに攻めた論文、されど火の如き同情もあり△六月二十三日（本郷、吉岡はる）靑山の獨歩の墓をたづね中てたる、悲哀、女難、牛肉と馬鈴薯など樂書してあつた、嗚呼獨歩自哲居士、人誰か死なからん、人生の終局の目的はグレーブにあらず△心のなやみ（常陸、はつ子）田村さんですか、小學校へ出たからつて、萬事休矣はをかしい、そんなつまらぬ問題に頭をつからすよりかあなたよりはLower Class だつたといふ望月れい子や木村章子さんに負けぬやうい（ゝ）のを出して下さい△舞踊（深川、橋本てふ）桁舞蝶の振袖かざりつきの緋扇花道、とこれが舞踊とは△あす（本所、みぎは）つかまへられない△思出（昔苑）野邊の小笹のふしのまも忘れがたなき古里よ△けむり（越後、紅雨）けむりの如し△蟲祭（愛知、空蟬）遠いことを伊勢道といふ、汽車はまだ通じないと見える△日記（栃木、しのぶ）病床にゐる君が、おばあさんがうたゝねしてるので押入から夜着をかけて上るやうでは當分死ぬこと受合也△家（津山、口靜）ジョンといふ犬、みいちやんといふ猫、ちいちやんといふ鷄△詫ならぬ詫（阿波、蕗紅）あなたとなら行つてもいゝといふからどうか行つて下さいと海水浴？に誘はれたけれど、行けばKがゐる二人にばかにされる譯だから斷つた小說。作者は長曾我部菊子の知り人らしい△汽車（佐賀、松本夕苗）△刺蟲（佐賀、花の栞）百合にたかつた刺蟲を池へ投げたら蛙がパクと喰べたがすぐゞつと吐いて了つた、石で叩き潰したら靑い血を吐いて死んで了つた」婦人はかくの如くそれざんこく也△朝貌日記（山形、たで）まアいやだお日さまは疾に上つてるし、よしさまどうですエヘンお早うムいますつて、兄さまだわ、自分でも床にゐらつしやるくせして」御免〳〵△ある夜（青森、長尾香淸）△かへりみる（加古、龜岡うすみどり）△宵の間（深川、矢澤榮子）人を人とも思はぬいつもの調子が無い、江戸の昔を忍ぶ、羽織衆がなつかしいつてあるけれど、女學校と江戸趣味藝者趣味とは少し……ちやあ

るまいか△小論（千住、白妙女）東郷大將と廣瀨中佐はどつちが强いのなど、よく聞く弟が、虹を見てむづかしいことを尋ねさうなのでお針をうつちやつて逃げようとしたといふ方、私はこの君が好きだ△ナイフ（紀伊、あぢさゐ）大阪の博覽會の時に堺で出來た魚形ナイフのよくよく切れなくなつたのを弟にくれた、可愛相に嬉しがつて△和歌日記（靜岡、貞水女）背の君と仲よくつくる玉露なり番茶も出ばな御笑留あれ」醉茗のところへは毎年定つて常陸からお茶が來るしかし夜雨は仲よくつくりたくも相手のない男だからつひ又名歌を添へた話をきかぬ、私なら　わが妻の手づからつみし木の芽だやのみて醉ひませ君が名のごと△早稻（備中、はま香）Kが十七でマレーヂした、何といふわせだらうとあるけれど、驚くにはあたらない△綠蔭（岩代、りき）事實上手になつた、甥を抱いてつと立つと、草に投げ出された雜誌が白くかへつて、海底の女の繪が浮き出すやうに目にくひ入る△小言（石見、白須みゆき）兩耳へ指を突込んできかぬやうにするけれど、朝から晩まで小言づくめでうんざりする、ほんにお前はお嫁になんかゆかれないよ、それあこつちから願下です、ぢやお聟さんに來てがない、なくていゝのよ、また有つてたまるもんですかあんな獸！母も默つて了つた、吁男！處女の純潔を蹂躙したのも男である、肉の要求の强きも男である！」慘なる哉この言、借問す多くは結婚を最上の誇りとする低級の女よ、處女の純潔を棒にふりてその尊嚴を傷つけられ其羞耻をなみせられて、淤泥の底に沈めらるゝ時汝等何の心ぞやと、これは受賣です△紅葉藝者（佐渡、破葉）こいちやこいちやで二度だまされたまたゞこいちやでだまず氣か、嗚呼一代の文豪尾崎紅葉を手玉にとつたはやりッ子！今はお寺の坊さんのお鬪ひである」坊さん可愛や抱いてねりやと歌つておきませう△あぢさゐの窓（名古屋、しづ）世をすねたる良家の女の皆みを知る△車中の男（深川、からさき）兄弟だと思つたらまあ厚釜しい人たちだつたので皆ぢろぢろ見る、と男は却て私をじつと見てゐた、お連れのと私の顏とを比べてゐたんだわきつと」鋭き觀察といふべし△赤紐（大分、こうか）い死（縊死？）するつてこんな紐でするのでせうか、私はこんな赤い紐で死、怖しい死などするのはあまり殘酷だと思ひますわこの柔かい美しい物で、あゝかねさん、あなたはそんな怖いみぢめな死樣はしてくれないだらうね。まあどうして」飛んだ話を初めたものですね、お人形を遊ばせる方が身にふさへりとの玉ふ君が突如首くゝるとを言ひ出すのも變だが、そんな眞似でもするかのやうに訊く男も男である、要するに漱石の小說をまねて書いて見たかつたのだらう△病室の窓より（三國、井上みさを）入院中の佗しさ悲しさ、私はく〱友がほしいセンチメンタルな男々しい男の友がほしい、私は其友の熱い青春の血の張つてる胸にしがみついて思ふまゝ泣きたい」以卜有求得、病不死、緊俳罪このトひ大吉なり君安んぜよ△幼時（備前、勿忘草）男と女とようかんべい、おらもちつくりよしてくれと大勢に雜されて二人は眞赤になつて土手に上つて着物を着てゐると後からお下の毛を引ばつたり「敬さんいうても返事がないエ、嫁さんでもとつたんかなんて歌つたり、敵は大勢味方は私一人……いとしかつた。今は道であつても顏さへまともに見ることが出來ないやうになつたけれど……」お終が平凡△鰌（赤坂、はるの）巧みなり、巧みなるだけ生氣なし△汽車中にて（靜岡、紅萩）折花攀柳を事とせる父と十何年ぶりかに逢つて故鄕にかへる途中の感慨をうつしてある、いたましき文なり△弟に（越後、あざみ）かゆい所へとゞく手△新橋に着いた朝（牛込、蓉田順子）あゝ私もたうとう逃て來た、私はもう故鄕にもおられないやうなとをしたのである、故鄕ではもう喰へなくなつて了つたのだ、女でくへなくなつたといふのは嫁入の出來なくなつたといふとだが……」食へなくなるか色狂ひになるかすれば嫁に行くと氣焔を吐いた君なり△夏の夕（播磨、藤井つや）淸楚△アクトレスの妹より（横濱、あや羽）少し明らかならぬ點がある△日曜の朝（牛込、花山院貴美子）教會の朝を描いたのが、この君を煩はさでもと思つた、願はくば期待に背かざれ△ごむ風船（山口、椰頁なみ）今一あしといふ所で止まるから齒がゆい△隙な人から（神戸、みどり）戀愛時代に入つたらしい友達と相互に驚異の情をいだいて向きあつてゐる人。



和歌

編輯局選

○（天賞）　伊賀　中村こま子

玉章よつれなき君の心から我にたまはるものならなくに

○（地賞）　佐賀　泥子

やうやうに思を遂げし火取蟲されど悲しやむくろとなりぬ

○（人賞）　伏見　竹村槇

豆殻のおのづとはぢく音もしてカンナの花に夕日の映ゆる

佳作

○　鹿児島　殘月

若き子は灯火赤き劇場のはなやかなるに見とれてありぬ

○　千住　白妙女

三つ四つ紅椿散る木の下に鐘きくとあり十五の日記に

○　山口縣　椰良美那子

男の子等よ渇かば來れ我が胸の泉は永久にあたゝかくして

○　下谷　鈴木靜子

夏ぐさのしげみがくれの澤水も螢のかげにあらはれにけり

○　北見　大出夢衣

君が胸そこなし湖か我れのみのさゝぐる戀にたらぬかほする

○　京都　中野婦美子

しのぶ夜の常香盤のすゞの音若き女の胸は碎けむ

○　水戸市　川崎春子

夢さめて或る夜思ひしそのことは死ぬまで君に告げじと思ふ

○　羽後　さぎ草

つばくろは老舗の軒に終日をまろき目をしてくびかしげ居る

○　山形縣　伊藤智惠子

女々しきは許せとわれに泣き給ふ君がたふときおん涙かな

○　北國　茅夕子

いとつらき御憎しみの御言葉を詫びんとすれど返らぬこの日

○ 豊後 吉田夕草

君思ふ濡れし眸にやはらかにうつるも哀し夜のうすあかり

○ 尾張 水谷靜枝子

にぶき日に白き胡蝶のたはむるもかしら痛みてうとましきかな

○ 豊後 吉良花守子

さゝげんと君がみ前になげ出せし命のかてに得たる戀かな

○ 若狹 城子

田草とる母の子ながら人戀ふるこの悲しみを知りし日やいつ

○ 北海道 小木白菫

ねずみねずみ汝が淋しきたわむれにまたもめざめぬ胸のかなしみ

○ 神戸市 綠子

落日のあゝ瞬間よ濃き色の衣の光よ平家の公達

○ 大阪 萬田たま子

心にもなきことをさへ今はいふ言葉すくなき少女なりしに

○ 信濃 長谷川未女子

かにかくに我も少女よ紅の衣被がんとしはしつれども

○ 埼玉 大鄕米子

船はみな干潟に默し舟火事の終ると潮の滿つるを待てり

○ 城南 鈴枝

紅のほゝづきの實をそとどれば悲しやいつか虫づきてあり

○ 山口 千香子

身動けば目ひき袖ひき肌を刺すいばらの中の我住居かな

○ 周防 重原美女子

戀さめし女の瞳さびしげにものをみつむる夕顏の花

○ 大阪 杉山けい

いまわしき夢よりさめし曉方の枕の下に折れ櫛を見ぬ

○ 大連 筑紫饒子

追ひ追はれ疲れて來つる大連のほてりの町に立てるかなしさ

○ 熊本縣 苔の花

人羣に遠ざからむと野薔薇咲く野に出でぬれば雲流れけり

○大分縣　小屋赤き花

みかへればうつむきがちに君は行く瞳合ひなば心ふるへん

○埼玉縣　小島いせ子

小雨するたそがれ時の溝渠ぎはのくちなしの花眞つ白き花

○山口縣　宮原よし子

兩の手にしつかと胸をかいだきて二つの蝶を見て居る心

○横濱市　石川八重子

何故と問はれてもなほ泣きたさに秋の來ぬれば別れてあれば

○横須賀　美茄女

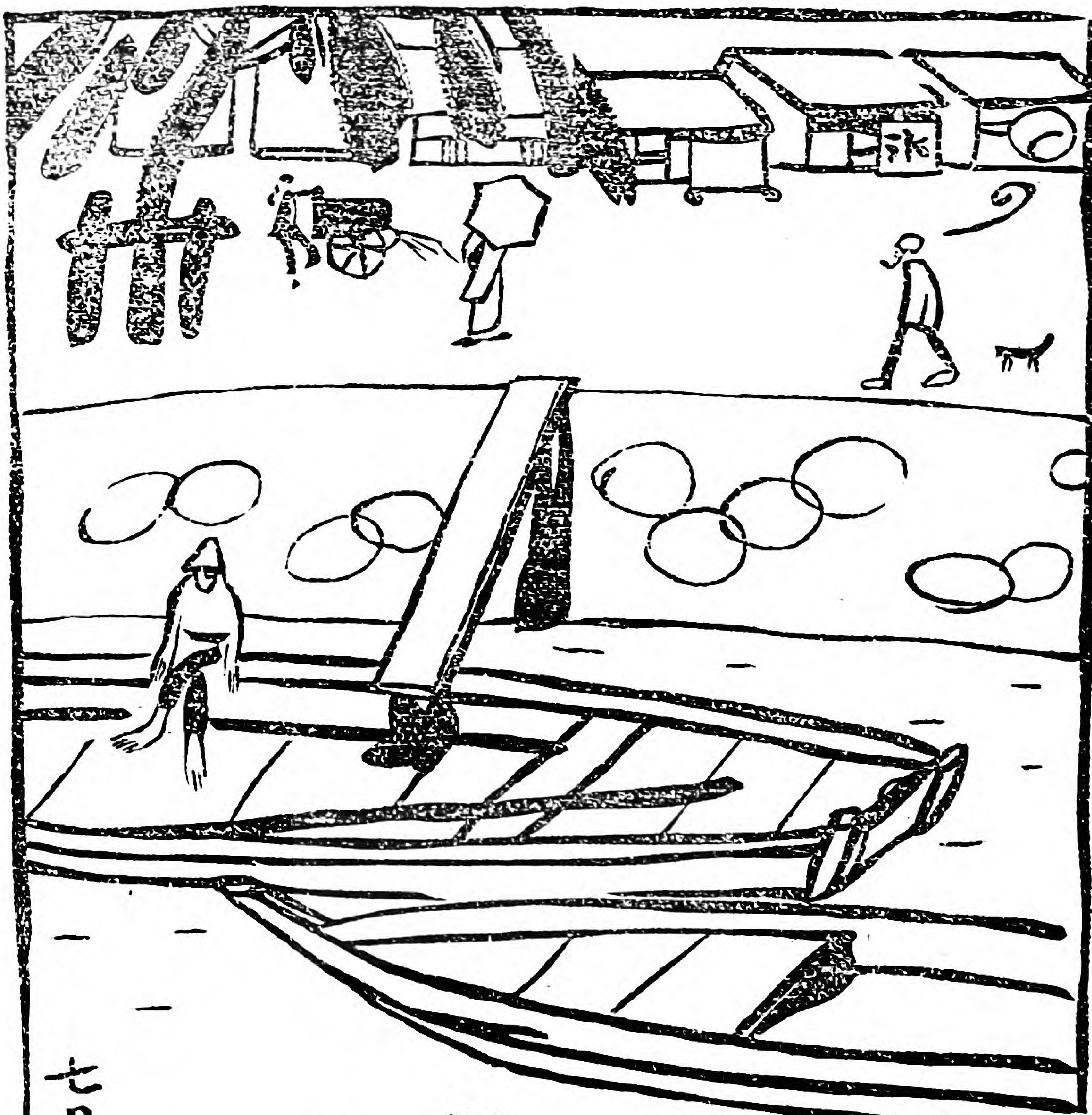
こゝろよく小ひさき音を響かせて白き齒堀りし銀の鶴嘴

○函館　佐藤美代子

失へる戀のみじめさ夏草の照る日をいため色なきがごと

○京都　要司美子

思はるゝよろこび今にきえうせむ君と君とは男友達



七月の河岸　赤坂　嶺田きよ

○　土佐　はぎ子
君を見て戀てふものにやあらざるや心しづめど胸騒ぎける

○　静岡縣　宮下美代子
何時よりか群を離れて我魂ははてなき野邊を歩みてありぬ

○　熊本縣　花丘綠香
月に匂ふ花あり夜をわかれきてしづごゝろなくさまよふ門邊

○　岡山市　石井明子
みづからの思ひ捨てにしきみながら都に立つときけばさびしき

○　宮城縣　長谷川紫葉
今日も又父もたぬ子は遠山の雲の往來を眺めてありぬ

○　日本橋　桑原仙子
なつかしみ愛する夫も在すれどなほ上に戀ふ祖父母君あり

○　畑　らし菊子
野に置かば名もなき花と散りぬべし庭に移しゝ白菊の花

○　青森　長尾清子
たけ狂ふ波にゆられてよる舟のたよるべのなき人なしの島へ

○　湖畔　秋子
なつかしき君に恥らう夢を見て寢覺の床にもの思うかな

○　下關市　西村文子
しかすがに燃えつくしては冷え入りし灰の上をも月は照らしぬ

○　山城　文子
なつかしきお弓が三味のうちけぶる夢の如くに秋雨はふる

○　栃木　しのぶ子
筆のほに水ふくませて終焉の姉の唇濕してやりぬ

○　下野　永山紫子
くづれ立つ夏雲遠く眺めつゝ青葉のかげに駒止めけり

○　下野　春花
さやかなる色に匂へり流瀬川汀にうつる月草の花

○　羽後　初子
君と踏む初夏の野の小花路小蝶追ひつゝ森に入りけり

○　中澁谷　佐藤露草
夏草の茂れる庭に立ち出て蟲の音聞けり月清ければ

○　福岡　林まつ枝
紫の衣ぬすみて胸にひし神のみ前に恐るゝはよし

○　播磨　藤井つや
偲びては寄るになれにし川ぞひの夕露ちかく河鹿なくかな

○　山口　宮原たか子
つゝめども少女の胸の燃ゆる夜は闇にもしるき白百合の花

○　四谷　白菊
木の根よりわきて流るゝ谷水もあはれ小さきのいのちなるらむ

○　伊豆　渡邊やす子
或る時は月に笑ひつともすれば星になげきつあはれ人の子

○　金澤　目黒美子
いさゝかの雲あり今日も鈴見山淺の川邊にはちらひてまつ

○　近江　瑠璃香
浯譜られね此の世に神の定めませる人あらんとて戀を想はず

○　廣島縣　宮坂はつ代
夕映に金を流せし波の上小さき白帆やみやじまの沖

○　京橋　青木扇花
若き日を着かざる友の表情のうつくしさゝへ人は憎みぬ

○　下澁谷　小原あい子
梢より澄渡りたる大空の星のまたゝき十月に入る

○　深川　曉子
笛吹いて君は來ませり紫のおしろい花の開くたそがれ

○　世良田　優子
なつかしき人はそむけり此夕初秋風のうら寒きかな

○　宮城縣　小岩りう子
緣とはみ親も友も古里もすてゝ入るべき世を思ひてき

○　京橋　島の少女
みどりなる若くさふみて語りつゝ友と歩みぬ夕やみの路

○　伊賀　山中靜子
名を呼ばれ頬そめし日も偲ばれつはかなき戀に泣く少女子は

○　長崎　町田とし子

獄の扉の中に小さなる胸を抱きて吾がうたう歌

○　出雲　和田守澄

薄衣のかつぎま深く姫君の雨やどりし給ふ染寺の門

○　大阪　夢の人

なぜお前泣てゐるのと自らを笑つたりする朝夕のわれ

○　山口縣　芙蓉

思ひわぶわびては思ふ君故に博多戀しき千代の松原

○　港　なでしこ

つまごとのしらべにひかれまよひ行く若葉のおくに日かげゆらぎて

○　吉備　小田美鳥

夕空は濃きむらさきに染めなされ眞紅の雲は入日包めり

○　福岡　みどり

涙して別るゝ今日も知りそめし時にぞ似たる胸どよみして

○　美作　橋本紫

初夏の風に袂を吹かれつゝ灯くらき横街を行く

○　美作　まさ子

ふたりしてうゑし撫子咲きつるに我思ふきみは歸らずなりし

○　函館　藤本鳥羽子

空色のパラソル波にさらはれてもすそぬらしぬ淋しき渚

○　若州　元山ふく子

我が園に咲きぬる花よ胡蝶だにまだ知らぬ香を君にまゐらす

○　王子　高木多香子

我が思ひ胡蝶となりて御君のやさしき御手にいだかれなむを

○　茨城縣　鈴木直枝

夕ぐれの草より出でし高原の宵月に君と歌かたりゐぬ

○　山口縣　吉原春子

美しき白衣の人の二人行く青葉の道に淺るゝ日の色

○　岡山縣　安田英子

枕びしくて夢にも人を見つる夜はいたくも夏の明け安きかな

○　京都　壽賀子

日光の白きカーテン強く射るまひるの窓に百日紅咲く

○　大阪　紅葵

紅の泪こぼれし白砂子の濱を歩めば月見草咲く

○　青森　長尾香清女

あら浪のすてし小舟を荒波のまたすくひてはたゞよはすかな

○　福岡縣　國廣いさを

ふたりして書き散らしたるうた反古の送りかへせし灯のまへに

○　弘前市　梅田くに子

美しき御瞳かな幻の影は永久にも吾をはなれず

○　横濱市　世津

三月經ぬかの草色のカーテンにかくれて君はいかゞゐますや

○　岡山縣　山本ふで

こがれぬる人に逢ふ夜の嬉しさもさめて悲しき夢のあかつき

○　小石川　中村千代子

ひさがつの野の暮こそは悲しけれ薄光のうちきりぐす鳴く

○　北海道　伏見屋康子

すがやかに夏は來りぬ憎き子もさはやかに死ねきよらかに死ね

○　姫路　靜子

兄上が手植の百合花しほれけりやどりし露に香のこして

○　上毛　冷花子

日沒の後のしづけさ悲しげにうすら冷たく這入る夜の色

○　本所　一子

ひとり寢の薄ら淋しきねやをいでゝ蟲の音すだく庭にいでけり

○　山形　高橋藝子

戀の手の眞黒き手もて我の胸に印すとばかりふるへぬるかな

○　水戸市　川和あさ子

おちかたの麥燒く里はかすかにて柱によれば友欲しきかな

○　岐阜縣　佐藤初音

亡き君の御墓やこゝると白き花墓前に咲くをそとゆりてみし

○　山口縣　田中鶴枝

をさな兒が母の乳房を見しごとく君に逢ひたるわれの心は

○　赤坂　しげ子
乳若き乙女が胸の秘密を花に悟りぬ梁の花に
○　越前　井上みさを
淋しさは入江にみつる潮のごと冷たき胸に音なく沁みぬ
○　東京府　椿きやう子
思はじと思へど又も思ひいづる風のそよぎに雨の雫に
○　備中　安藤正子
月落ちて夜も塑なき天の川たゞ大空に白く流るゝ
○　大阪　村田擁子
ふりかゝる寐亂れ髮のやるせなく別れし後に涙流れぬ
○　廣島縣　葵の花
戀に生く金魚なりせば朝夕に君が優しき目にふれんものを
○　徳島縣　蔦紅
別れたる人にも逢ふ日もあらんかとあこがれに待つあぢさゐの花
○　兵庫縣　大槻富香
古里の山になつ草ふみわけて香すゞしきさゆり折る哉
○　和歌山　宇田すが子
ものたらぬ心地こそすれ暗がりの虚空に消えし君が瞳よ
○　大阪市　河盛よしの
人怨じて社の前の楠に釘うちし夢君よ知らざれ
○　福岡市　市川久子
乳母が家は川邊の宿の柳かげ清く涼しく風のある家
○　信濃　利惠子
夜の神の愛にほゝ笑む月見草けはひも薄きなよび姿よ
○　金澤市　廣澤愛子
不意に來て淋しさあとに殘し行く秋の風にも似たる我が戀
○　長野縣　小平ひで
手に取れば白く冷き貝殼や捨つれば月に見えずなりけり
○　淡路　高田清子
たをやめの高く翳せるパラソルの色美しき池の汀よ
○　岡山市　桃の村女
銀打の小筥かたみにたまはりて長命なれと祖母はのたまふ
○　下野　小野崎悲愁子
吾今は胸の愛を晴さんと夕野に出て細く呼吸する
○　伊賀　米田きよ子
かすかにもともる地獄のともしびの青き色見ゆくちなしの花
○　神奈川　玉愛千代子
我はしも君が愛づ鳥あたゝかき窓におかれてきよらかになく
○　佐渡　わくらば子
五月雨にひきはなされし花のごと死にゆかんとすわれをあはれむ
○　福岡市　疋田みさを
ひや〳〵と初秋の風の肌にしむこゝちよきまゝ紫蘇の花摘む
○　名古屋　志都子
夕暮の生絹のとばり逼り來ぬ木陰の湯場の白き肌へに
○　茨城　田村はつ子
稻妻や銀のかんざしくさむらに秘してかへりぬ捨てがたくして
○　渡邊歌子
緑色のつゞく堤に紅のもの思ひつゝ黄なる花つむ
○　府下　佃野の百合
五月雨や庵の比丘尼が小走りに閼伽汲みにゆく紫陽花の道
○　埼玉　渡邊積翠
何氣なく七度變る紫陽花を好むと言ひし人を恐れぬ
○　羽前　長澤美也子
うら淋し山の陰道通る時松林より松風の吹く
○　秩父　かつらのはな
眼路はるかともし火搖るゝ見ゆるかな武藏の西の宵闇の窓
○　周防　若菜
はかなくも筆の穂先の薄墨のその滴りを戀とするわれ
○　松前　美津子
我が戀は悲しかりけり青梅をかみたる後のわびしさに似る
○　若狹　長谷川英
ほろ〳〵と柿の花ちる夕ぐれは文かき送る人のほしかり

芝　横山やなぎ

○
眞帆片帆袖ケ浦邊のすゞ風にわがうすものはうすきにすぎぬ
下澁谷　小林和子

○
頬赤く瞳涼しき少年を弟と呼べばうつむきてありぬ
加賀　村田いと子

○
うすもの丶仙女のゆます紫の水晶の世のものと見し月
王子町　大浪露香

○
このごろはたゞ過し日の忍ばれてひも夜もわかず泣きくらしけり
石川　土田夕女子

○
蜜をもて蝿を招きて喰ふなる蝿捕草ににたる君たち
翠松子

○
山越に雨を送りて東に七色虹の現はる丶哉
深川　橋本蝶子

○
朝風は松原こえて川こえて松の葉越しに白ばらを吹く
山口縣　高木數枝

○
我心雨の降りたる溜池の水のやうにもにごる日は來ぬ
東京　遠山ふじの

○
戀は魔かはた魔は戀かわかざれど迷ひ覺めよと母はさとしぬ
久留米　中島みき子

○
巡禮の少女通らば宿貸さむ人戀しさに門に倚る夕
福井縣　池上小芳

○
七色の紫陽花みては友のいふ戀せし人の心がはりを
伯耆　田村美子

○
嬉しきに悲しきにつけこらへなくあつき涙のこぼる丶ころよ
佐世保　深雪子

○
父なれば母なればこそかくまでにかひなき我の行末思へ
秋田　愛子

○
そゞろにも身の行末を思ふ夜は悲しかりけりほと丶ぎす啼く
千葉　伊東散花子

○
雨の日の窓にもたれて秋萩の亂れやすきに涙するかな
大阪市　大關さとの

○
若草の小高き丘に横はり沈む心を放ちやりてむ
伊豫　長井渓

○
我胸はほのほみなぎり我口はかたくつめたくうすら笑する
姫路市　寺澤九十子

○
わかき罪あなづりて居しつゝなひにたへられがたき苦しみを生む
南越　井上美佐尾

○
白き鳥若きみ胸に奇しき種植ゑて去りしとのたまひし君
高知　藤村紫華子

○
ひとつ傘君の後によりそひてさも頬そめぬ若き人妻
茨城　浮舟

○
泉水の金魚に麩などやることは去年の心にわれあらぬこと
淺草　露の玉女

○
あぢきなき放浪の身を横へぬ月は靑くも隱れゆく野に
上毛　阿久津雲路

○
わが書きし「人にくし」との落書を今日はまくろに墨ぬりて泣く
小石川　靜香

○
君去りし後の淋しさオレンヂの皮に夕べの影おそひ來ぬ
大阪市　小泉貞子

○
水色の衣きる人の脊にとなりのぞみし京のむらさきの山
土佐　北村美佐夫

○
病院の晝は哀しや靜けさに淡く光りて桐の花散る
岐阜縣　佐藤天香

○
ひとしきり若葉にそゝぐ雨晴れて森のしゞまに不如歸なく
信濃　保科伊津子

○
水の面一ひら落ちし薔薇の花たゞよふ如き我が思ひかな
栃木　里の花

○
線香の煙のゆらぎ身に沁むる刹那は我も佛なりけり
備中　小見山春子

○
大いなる銚の下に伏すわれは夢見心地に生くるぞはかなし
京都市　廣江曉子

○
むらさきの天なる國にちぎりおき今下界に逢ふ心地すれ



自然（散文）　編輯局選

○六月の路

京都　廣江曉子

稚い小鳥のやうな心もちになつて、ふと遙かな御苑の奥を見透かした、心はまだその束の間を夢みて居る、空と水との相合ふやうに、松の下枝と、うまごやしの花の日とがつながる光りに、眼はさえぎられながら、魂は果て知らぬ園の深みに誘はれて、其處にもまた、松のみどりと、うまごやしの花の日とが限りなくつゞく、靜かな眞晝の日光は針葉のわづかな隙間をふるひ落ちて、三つ葉四つ葉に和らかく抱へられて、白妙に咲きつゞくうまごやしの花に、ぱつと明るく照り映える。

　はるかな繁みに、ちゝち、ちゝち、と小鳥らの優しくさえづり交すのが、氣をつけると聞える、その邊りが、稀に交つた櫻らしいのゝ下枝がばさ〳〵と動く今にも、とぢつと瞳をこらして、一秒、二秒、まちかまへた可愛いものは、さゝやかな羽ぶるひの音すらきかせなかつた、眼がやゝだるい。

　あゝ水無月のしづかな眞晝、云ひ知らぬ安らかさが胸にみなぎる、突然後の仙洞御所の森が、時雨降るやうに鳴りいだした、大らかに搖れるその姿を瞬間の胸にゑがきながら、輕い双の袂をひるがへす風を快く感じた、松の下枝が春の海のやうにおだやかに波打つ、うまごやしの花は、かゞやく雪がくづるゝ如く、葉は湖の面に、さゞ波のよするやうに、葉うらを見せてきららかに打ふるふ、草の香りのあたゝかさ。

　さわやかな風の中、澄みてかゞやく日光の中、襟すぢに黒髪をそよがせて、我をわすれ世を忘れてたゝづむだ。

　清和院御門を何時でたのか、生垣多い小路をうねつて御草橋のほとりに出た、橋をわたりつゝ際立つて明るい天地に、想ひ充ち、心足らひて、生命の漲れるやうな濃いみどりの大比叡を仰いだ、四明の峰をすれ〳〵に湖の近江の國へとこえ行く雲の美くしさ、川上の加茂の森、その前に虹のやうにかゝる出町の橋も、水の

底の小石のやうに、はつきりと黒ずんで見えわたる、河原につゞく月見草の昨夕の花がしほれて、友禪晒す人の足に傷ましくからまる、その花の咲きいづる頃、今宵とはさやかな月影に千鳥の聲のなつかしき。

川端の柳の幹に綠葉を喰み飽きて、だるげに髭ふる樹の蟲を見つけた、小さい頃はこんな蟲の名にもくわしかつた、たしか源氏？と思つて立ちどまる。

手織の單衣に友禪の太紐はなやかな飛白の三巾前垂をきりつとしめた十二三の田舍少女がじつとよつてきて見つめて居るやがて低い聲でてらつと云ふなりそのその背中を見事につまんだ、につてり、私を見かへつたまゝ、柳の蔭を川上へ、ひつくゝりの髪がうつむいて、何時迄も蟲をなぶりつゝ行くらしい。



海水浴より　横濱市　臼井ひで子

加茂、高野、八瀨か大原か、何處の里へ歸るのやら、ふくよかな頰、丸い眼、につてり笑つた口元が云ひ知らずなつかしい

飛ぶでも無く、下りるでもなく大きな蜻蛉が、やや高い空間にぢつとかゝつて居る。

水色の洋傘を上げてそつと觸れて見る、すくつとぬけてみなぎりわたる日光の中を、かろやかに突つきつて水の上へと行く道はまだ遠い、何となく輿の中に、夏蟲にたわむれながら私は歩いた。

（天賞）

觀察の細かいのも好いが、此人の作を讀んでゐると、いつか京都と

云ふ心持になつて來る、何處といふことなしに京都らしい心持が自然に表れてゐる、それだけ此作者は文章に秀れてゐる所があるのだ。(評)

○山嶺

京都　かうほね

ふと氣のついた時、敎へ子の一人が櫻に似た薄紅の花の一枝を私の手に握らせてくれた。ほゝゑんで頰にあてゝ見た。あ。あそこにもあそこにも花は谷を蔽つてゐる。足下にも、嶺にも、(光つてるよ、光つてるよ、お日様で)所々に靑鵞絨の様な木立を指して子らは叫ぶ。

苦しいと思つたのも暫しであつた。ほつと息をついた時には眼の前に湖が擴つてゐた。こゝが頂だといふ。あゝ天は近い、少しでも近い此處が最も高い所だといふ。私にはそれが嬉しい！。美しき湖よ、波もたゝない湖水の面よ。ひろき神のみ胸よ。水の色はむらさきであつた。淡い夢の様な、むかし仰ぎ見てなつかしんだ此嶺の色と同じき紫の色であつた。(この様なひろい胸があるなら、みんなく、ひゞきも、いろも、そのまゝにたゝみこんでしまつて置かう。)かくいひしは氷とづる北の湖畔に才ある人が叫びであつたといふ。才はなけれど、私も憬れの少女、胸の血湧く少女と生れきて…。

顧みる京の方霞める町を白銀の如くひける一條の流あゝあの加茂川の西、紫野のほとりに朧なる月光の中を世界の果に迷ひ行かばやと共に泣きし友があつた。彼の友は、あゝ、あの窓から、胸を躍らせ將門岩に身をもたせて眺めたけれど、遂に彼の建物は見えなかつた。春である晚春の霞は私の眼の前を遮つて、脚下の萬象をたゞおぼろの中に見せる。けれども眺める中に我魂のふるひ來、わが眼のうるみ來るのを覺える。ぢつと眺め入つた私は、我を忘れ、世を忘れて…。

「先生」。顧みて私は思はず頰をそめた。呼んだ人は友なる敎師が同伴者なる美しき尼君であつた。「ほとゝぎすの聲が」私はたゞ優しい尼様の口元をみまもりながらやゝ遠い時鳥の聲に聞き恍れたのであつた。この尼様何とは知らずなつかしい。果して私の憧憬する境界にゐらつしやる人か、それは知らないけれど。憂も恨も憤もあらゆる不淨を拭ひ去つた其面の清さ、けだかさ

雲のかげを浮べて、湖のかゞやかな面が少し曇つた。

「あゝ。先生、何となく淋しい氣がいたします。もしも夜になつて、こゝに一人捨てゝ置かれましたら！」

そのやさしい聲の恐れを含んで、ふるひを帶びてきゝなされた時!!! このおもひこの憂ひこのなやみ、凡てをこの尼君の前にお訴へ申してお縋り申したいと願つたのに、この山、この水、この天の美の中にひれふして……それに、それに。世を捨てゝなほ捨て得ぬ人と世を捨てんとして捨て得ざる身とを思つて涙は落ち樣とした。

友は敎へ子をつれて今下りんとする、私と尼樣とはいつまでも／＼、無言のまゝに佇んで、このひろき湖の前に、遮る物なきこの山巓に、立ちつくさうとした。（地賞）

私は此作を讀んでふと感じた、私なら比叡のやうな靈山の頂上に立ち、琵琶湖のやうな大きい湖水を眼前にしたら、殆んど何ものを想ふ暇もなく、其自然に化せられて了ふであらう、然るに婦人は、（敢て婦人と云ふ）山の頂上に登つてゐても、友を想ひ、尼を想ひ、戀ひを想ひ、惱みを想ふ、自然に同化して何ものをも忘れるといふことが出來ない、單に此作者に限らず自然を描いて來る婦人の十中九までは然うだ、偖ても婦人は想の多きものなるかな。（評）

○波にさらわれた人

長崎　町田とし子

天草灘と太平洋の一半を見はるかに淋しい海岸の斷崖の上につけられたうみ路から、夜のうす青い雲の下に、夢の如くにつき出て居る二つの島!! 一昨日あの島と島との間に波にまかれてなくなつた村で評判の魚釣の好きなお爺さんは、今に屍體があがらない。私は人一人奪ひ去つた此夜の大海の上に何か變つた色でもなくてはならぬやうに思はれて、恐れながらしばらく坂の上に佇んで、ジッとうす暗い海の上に、ひとみを凝らして見たが、此廣い大空と大海の間に更に何一つ怪しいものをも認めなかつた。あゝ天地は大きいもの……人氣少ない村落から人一人は亡なつたのだ。（人賞）

文は短いが感じは新しい。（評）

○渚に立ちて

播磨　うすみどり

午後の三時、かん／＼と照りつける日を、洋傘によけながら、ぶらりとあてもなく波打ぎはを步む。

吹き來る潮風は、汗じみた肌に涼しく薄着の裾をかろ／＼掃ふた。だうとよせくる波は、名も知れぬ海藻を運んで來て小さい石や貝をさらつて行く。ふりかへるとならした樣な砂の上に、下駄の齒形を一々止めて、海水が白くたまつて居る。遠く沖の方を見渡すと淡路島がぽつと浮き島の樣に見え、俗に言うほうらく島も手に取るやうに近い。おもちやのやうに見えて居た蒸汽船は、黑い煙を長く引ひて、東へ／＼と消えて行く／＼。がや／＼と人聲がする、何だらうと思つたら晝寢の後漁夫が漁に出て來たのであつた。銅色になつたからだを日に晒し、腰のあたりを少し蔽ふたばかり、つなを解くよと見るまに、早幾艘も渚をはなれて、荒波逆まく海原に木葉の浮ぶ如く、沖へ／＼遠ざかつて行く。風のまにま

にかすかな舟唄がきこえる。
腕白盛りの男の子が六七人、手に手に手拭をぱひつさげながらやつて來た、眞白な砂の上に着物をぬいで、一、二、三、のかけ聲もろとも水煙をたてゝ飛び込んだ。浮きたり沈んだり潮水をかけ合つたりして、きやつ／＼とさわいで居る。自分もふと、はいつて見たいやうな心持ちがした。四五年以前までは、とみゐ樣と打つれて海水浴に來たものだつたが、近年は海水浴をするでもなし只ぶら／＼と散歩しながら、波の音をきくのが何よりのたのしみ。
上京の折近所の子供達にお土産にしたらばと、砂かきわけて貝を拾ふよくもて遊んだぜゞ貝、薄赤い小さくかあゆらしい櫻貝、叉帆立貝、ちちろ貝など美しい小石やら、ハンチーフに一ぱいになつた。
去年兄君と息ふた磯の一本松に、しばらく休まばやと眺めて見れば、青々と枝は、去年に增して榮えて居る、松の根元には、兄君ならぬ見知らぬ靑年が、沖を見つめては一心に鉛筆を運んで居る。大方スケッチでもして居るのだらう。
海邊らしい心持が見えてゐる。（評）

○麥コガシ

南多摩　山口花子

今迄しほれかへつて居た日照草は、急に咲きそろつて赤や黃や桃色等の花が、どれも／＼美くしく咲いてまるで畫用紙へ模樣を描いたやうです、私と女中と二人は麥コガシを引いて居りました、臼引場の前のサハラの葉蔭から、花いんげんの莖高く、一莖毎に眞赤な小さい花がゴジヤコジヤ咲いて見えます、と見る間に四五匹の燕がチイツ／＼ヒリ／＼／＼ツと親子で鳴き狂つて居て、さもむつまじさうに物置の屋根から家の軒場をいつたり、きたりして戯むれて居ます、爽やかな柳の梢の間にセキレーが上へ下へと尾を振つて居ます「フクやもうふるひ始めないか／＼」やがてコガシは出來ました、お〻暑い、と私は吐息しながら、かむつた手拭で身體中はたきました、着て居たコン耕の單衣もまゆ毛も鼻毛までも眞白になつて、まるで頭から粉を振りかけられたやうでした、私は疲れきつた身を、お縁の中柱にさゝへられて、どことなく見詰めて居ますと、お倉の上から雀が二匹落ちてきて、落ちても止まず爭つて居ります。それと見る間に自分はぬき足さし足しながら、そつと側へ寄り、手を伸ばして捕へようとした時は、もう二匹とも仲よくしてパアーと、りんごの小枝へ、ぼんやりして雀の方を見て居ますと、突然後の方で「お早うござい今日漸く」と云つて立ちどまつた、ふりかへつて見ると新聞配達が、朝日新聞と、女子文壇を持つて來ました、折柄家の中ではどつと笑ひ聲が漏れました、急いで私は女子文壇を片手に家へ入つて見たら、今皆んながコガシでむせて笑つて居ました。
幼稚なれど眞率、田園の偽らぬ生活が分る。（評）

○京の七月

京都　壽賀子

みな月がすんで夏越の拂をして七月に入つた終日ふり暮す五月雨も月半ばまでには上らう、梅雨の上りは大雷が鳴るか、大水が出るか、人が死なねば上らむといふ。
須濱のおうちごさん——指が一本たありまへん——
船鉾見たいな家立てゝねつからお客がこんチキチン——等と小供の唄ふ祇園會も七月である。あの捨がたいゆかしい祇園囃子の聞けるのももう近い、祭り所の家には美くしう秘藏の屛風を引きまはして、思ひ／＼にこつたかざり立てをする、奥庭まで見え透く程涼しげにかざられた家々を見に歩く人も多い、畫かきの書生等はその日をかけ歩くのである。
女や小供は一年中、一ばん美しう粧ひこらした風姿をする、祇園祭りの名とともに通つてゐる、十二日より二十四日までか名高い祇園祭である、夕暮に床机に腰かけて可愛い女の兒の花火線香に興かるのもその頃、家の中で蓄音機などをかけて夕暮のつれ／＼をなぐさむる人、理髪床や店やの前で床机の上でランプをつけて、將棋好きの人の夜を更かすのも

中京あたりの格子の家の涼しげな簾ごしに碁を戰はす人のあるのも七月である。七月になれば話も〳〵同じやうに「あつおすなあー」といふ、日中はあついけれど私は夏は好きだ、七月の空の輝き――夏の夜の古都の色彩――行水をつかひながら開きかゝる夕顔を眺め、輕い浴衣に絹團扇の風を入れながら、野を逍ふ時、可憐な月見草の咲くのを見ると、なつかしいうれしい心地がする、夏の夕暮は實に心地よい。
京の夏は實に好いと思ふが、これだけでは京らしい印象が薄い。（評）

○苺畑にて

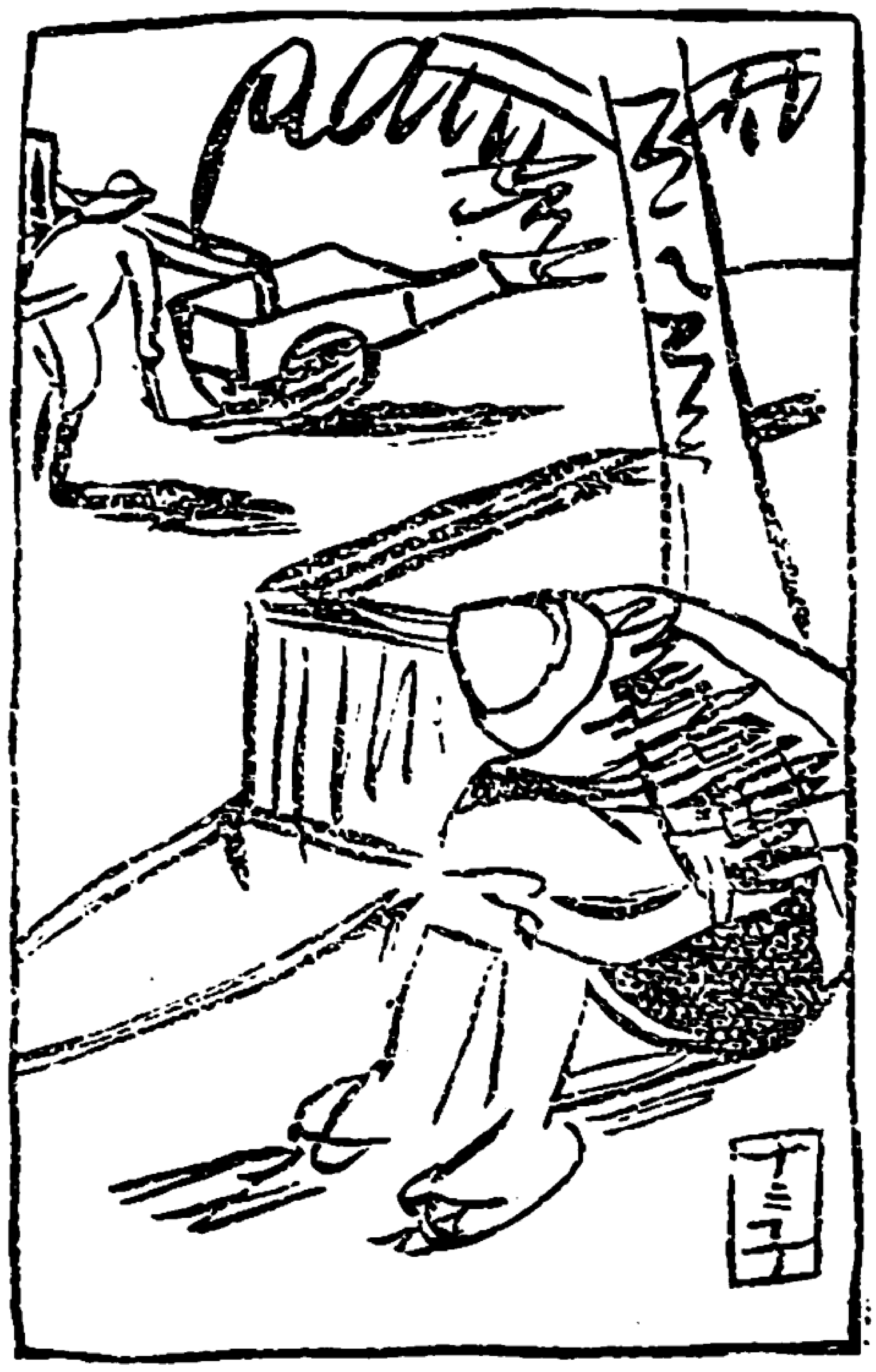
埼玉　桂の華

朝々、露しげき葉を踏み分けて、紅の美しい草苺の實をあさるのが、此頃の私の日課になつて仕舞つた。小さいのなら澤山有る、それを私は、より以上大きいのを〳〵と願つては熟れ過ぎる程眞紅になつた小さい實を顧みやうともしないで、少し薄色でも大きいのに許り手が觸れる。私は斯うして朝々苺はとるけれど、一つでも口へ入れようとはしない、嫌ひ？と人に問はれても私は答へる術を知らない、嫌ひぢやない、食べれば食べられないことはない、けれども私は苺を食べるものだとは思つて居らない、馬鹿な――と人は笑ふけれど、私は彼の紅い實がなつかしい、そして取るのが好きだ、つまり感情の發澤ですね、私は默つてほゝゑんで居る。
此作は思ひ切つて削つた、一體あなたの作は長くなく〳〵つてもよいことを長く書きすぎる、長いのは貴重な紙面に禁物です、最も此作は少し削りすぎたかも知れん。（評）

○樽の音

東京　野の花

芥子の花がはら〳〵と散つて、蚯蚓が悠々となき出した。唐土黍の葉を渡つて來る風がたまらなく涼しいのでぶら〳〵と裏畑に出て見る。お芋のひろい葉の上には輝く露がころがつて、野は限りもなく廣い。
それを區限つた野州の連山は夜霧の中に夢の樣に浮んで居る。黑髮山も乙女峠も、晝間トロツコに乘つて大谷に行く畑中の家の背戸や門邊に細く眞白にむかれた干瓢を見ない處はない。夕顔の花は此ひろい畑に、點々と月光を浴びて開いて居る。此優しい綺麗な花があんな大きな憎らしい實になるのかと思ふと、痛々しい樣な氣がする。向ふの家では野風呂を立てゝるのだらう。煙が茫と空高く散つて行く。きりぎりすが、しきりにないて居る十郞が畔の樹の間木の間から、チラ〳〵と灯が見える、茄子や瓜をくり拔いて仰願寺をつけて蟲をとりに、小供達が歩いて居るのだらう。
音もなく燃えて居る蠟燭の灯は私達が見ても美しいと思ふのだもの、焰を目がけて小さな蟲がよつて來るのも無理はあるまい。と、遠くで樽を叩く音が聞える。あの音を聞くと私の目の前には美しい繪巻物がひろげられる。高い櫓の上には紅提灯をいくつとなくさして其の夜は降る樣な星月夜、天の河が遥に走りて、森の梢を橫切つて居た。白地の浴衣に、紋の帶、紅白の房を振り亂した麥藁帽子をかぶつて、聲自慢の若者が、櫓の上で、樽を叩いて音頭を取つた。
聲も美しい。人も美しい。唄も美しい。
下には村の若衆や娘が集つて足拍子そろへて踊つて居た。冴えに冴えた樽の音は、うるみをおびた歌聲は、足拍子とよく揃つて、靜かな夜の、空氣をふるはしてとけて流れて行く。後には紫參の花が眞白に咲き亂れて、畫面の中に陥に浮き出して居た。
森のむかうから、同じ拍子、同じ抑揚で、樽の音が響いて來る。夕顔


樹蔭　芝　明石浪子

の花を、一つ〱ふるはして、音もなく吹いて來る風のまに〱。(下野にて)

筆の働きと心の働きとが伴はぬ、つまり筆の方が動き過ぎて、心の方が動き足らぬ。(評)

○散　歩

大分縣　池　見　白　菊

此間から少しほどの病氣に、心を打ち込んで、三四冊の雜誌をくりかへし〱見て居たが、今朝は天氣のよいせいか、非常に心地がよい、何だかゝう歩いて見たい樣な氣がする、小さな手帳を持つて、知つた道をすた〱歩み出した、空は青く晴れ渡つて所々に、少しづゝの小さい雲がふんわりと浮んで居て果てしない野も、山も、深緑に、露がきら〱光つて居る、胸にあゝ美しいな——と感じた。

田の中に、蛙がぐる〱つ、〱〱と思ひ出したかの樣に時々鳴く、一寸着物をからげて小草の中を行くと、葉末の露が、まっ白き足袋にぽとり落ちては消える、足元近く松かさに莖をつけた如き草に紫の花の咲いたのが澤山ある、手に取つて見ると面白い花だわ、何時だつたか、誰やらの話に、昔の醫者は此の花の枯れたものを藥に用ゐた、と、こんな記憶が思ひ出さるゝと思はず微笑れる、草村からつりがね草を見出した、暫く眺めて又種々の事ども思はるゝ、一つ口にくわへてぽかんとならして、幼時の樂しかつたことなどを追想する、一人こんな事等考へるのが私の何よりの快樂である。

茫然と佇むで空想にふけつた、何やらが頸のあたりにむじりとした、はつと思つたとたん、私の夢の樣な空想はやぶられてしまつた、指先にそつとさわつて見ると、栗の花であつた、足元にも三つ、二つ、五つ落ちて居るので安心した、やがて歸りかけると小さな家に、日が少しさし込んで居て猫の母と子とがお顔をならべて坐つて居た。黑く日に燒けてはをるが、可愛らしい子供が土こねをして遊んで居た、空は靑く美しい生垣に、野

朝顏が一つ咲いてをるのが何だかかうなつかしい樣な氣がする、青葉の中から時鳥の聲がかすかに……。

少女〱した文、愛すべし。(評)

○朝の二時間

函館　小　幽　里

フト目が覺めた、枕元の時計を見たら三時に十分前、いつもなら又一眠入り寢るところなんだけれど、今日はどうしたのか、何か誘ふものでもあるやうに大急ぎで床をはなれた、次の間では母も姉もまだ心よささうに夢路をたどつて居る。

昨夜かけて寢た電燈の黑い布片は其儘取りもせず、薄暗い中で落ち散つたピンを拾ひ集めて亂れた髮を留め、手早く帶をしめ足袋を穿いて音のしないやうに注意をしながら夜具を疊んでしまう。

緣側に出てそつと雨戸を一枚繰つた、冷たい外の空氣が寢起きの暖かい肌に觸れてヒヤリとする。

外には未だ覺めやらぬ夜の夢が漂ふて、庭隅の月見草の花のみが、仄白く幽なゆらぎを見せて居る。

明けようとする前ひと時の薄闇の佗びしさ——。

又そつと戸をしめて洗面所へ行く臺所の電燈の光がうつすりとやいて僅かに闇を脫がれて居る。

髮を撫でつけてから、着て居たネルの上に羽織を重ね、緋鼻緒の色鮮やかな空氣草履を足にして、こつそり中の口から外へ出た時、空は一面に灰色雲におほはれて、東の空だけが雲の底にさつと茜がさして居た。

町には電燈が疲れたやうな光をはなして、人皆はまだ暖かい臥床に執着してるのであらう。

曉の空氣は靜かに〱町を包んで、心をしづめて物思ふにはふさはしき朝よ。

足は知らず〱町を見下す事の出來る一番高い町へはこばれて居た。

何うしてそんなに夙く起きたのだらう。(評)

誌友評論（二）

一記者

▲九州

◎海さへ燃ゆると云ふ九州には、胸の血汐のたぎるやうな若い女の叫びがありさうだ、あゝ南國！と云ふ言葉は如何に今の若い女の心を躍らすであらう。

◎見た處、九州には此と云ふほど鮮明な色調を持つた女が現れて來ないやうだ、けれども現れて來さうな樣子がある、記者は數年の昔に遡らずして直ちに現在の誌友を觀察してみよう。

◎豐後にあかきはなと云ふ人がある、赤木花子なども書く、無論變名だ、此の人の作は散文ばかりで、最近には前號で入事の首位を占めた『西の緣にて』と云ふのがある、其他本年の作では『晩秋』『暗い夜』『落日』などが好かつた。

◎彼女の觀照は狹いけれど鋭い所がある、それが別に際立つてゐないけれど、底に深い哀痛を隱して、從順に、女らしい心持で周圍との關係を味つて行かうとする、わざと人を引きつけようとするのでなく、自づと持つてゐるものだけを再現する力に空虛がない。

◎夜雨氏は此人の將來に望を囑してゐる、其情味の勝つた文章が、愁人を動かすからであらう、記者も囑望することに異論はないが、今の處では未だ一人歩きは許されない。

◎みね子は豐前の人、『湯同行』『剃刀』等入賞の作があつた、此人はあかきはなに比して一段劣つてゐるのは事實だ、何處か似たやうな型もあるが、まだ此人の輪廓すらはつきりしない、一層の活動を望んで置く。

◎長崎と聞くと廢頽した異國情調、舊い港の名殘と云ふことが聯想される、港の新しいのは觀樂があり港の舊いのは哀傷がある、何れにしても港の情調は放浪な自由な、人生の動搖と漂泊を想はせる、其處に港の情調に化せられた若い人達の一人や二人の無い筈はなからうと思ふ。

◎三根ちさ子は長崎の女だ、長崎に居て長崎のことを書いてゐる女だ、吾人は此れだけを聞いても一種の同感が湧き上るのだが、彼女自らはそれほど長崎を自覺

して居るであらうか。

◎ちさ子には『光』（夜雨氏に見出されて新年號に發表されたる）『石垣の町』『山より』『帳簞笥の中』等の作があつて、何れも異つた輝きを持つてゐる、其各編に就いて批評された通り、觀察は細密だが、文章がなげやりだ、も少し衣裳を整へる必要がある。

◎同じ新しい見方をしても、文章が讀みづらいと作者に取つては損だ、もつと表現を眞率にせねばならぬ、作者から――讀者へ――電氣の感應するやうに感應しなければいけない、能く考へてみてから後に作者に同情が起るやうなのは、未だ何處か心の働きに故障があるのだ、だけど此作者は長崎に於ける唯一の誌友作家であると云ふことを讀者にも覺えて置いて貰ひたい。

◎詩を作る人は、散文を作る人よりも、個性が明瞭で獨創力の測定がし易い、詩で眼につくやうな作を成す人は餘程烈しい性質を持つてゐる。

◎吉田夕草は和歌と詩を作つた、詩では『哀愁のをどり』といふのが本年に入つての傑作だつた。

◎夕草の個性は分りすぎるくらゐ能く分つてゐる、分つてゐるだけに其前途に幾多の不安もある、それが夕草だけに對する不安でなく、若い詩を作る人々の誰にもつきまとふ不安だ。

◎何の不安であるかは此處に説明しない、彼女は美しい夢みて居るやうな詩を作る、誌上には發表することを憚るやうな熱情の作もあつた、空想の女よ、君の若若しい處女の血は大切に護つて欲しい、吾人の言はんとする處は此外にない。

◎夕草の詩は非常に出來不出來がある、文章は上手の方でないが、詩は確に感情の高潮を歌つて居る、併し歌つて空しい聲に終ることのあるのは、意力が充分でないからだ、多くの若き詩人が、意力の足りない爲に噴火山の火が一時赤く燃えながら、忽ち地に落ちて一塊の眞黒な溶岩となつて了ふやうに、消えてゆくのは悲しいことだ、詩歌の女よ、詩歌の爲にも亦君の若き日を大切に護つて欲しい。

◎夕草の外に今一人、福岡に筑紫饒子と名乘る人がある、饒子は詩も文も作る、文も決してまづくはない、詩も好んで作るやうだ、詩か文か、彼女の爲に孰れを擇ぶべきか。

◎吾人をして速斷せしむれば文と云はう、敢て速斷と云ふ、其文も詩も未だ深く人生の眞相に觸れようとするのでないから、今は假に速斷する外はない。

評論　編輯局選

○幼な友達

牛込　花山院　貴美子

誰でも交際する多くの人の中で、最も懷かしみのあるのは、幼な友達であらう。中年頃からの友はいくら親しいとは云へ、何所かに氣のゆるせない所がある。

私なども小學校時代の方に逢ふと、何だか嬉しくて平生は、餘りしたしくない人でも、遂に三十分位は立話しをして了ふ。そのくせ在校時代には、少し成績が優れてゐたので、やれ組長だ、副長だと、威張る譯ではないが、善い人とか、いやな人とか、別けへだてをして遊んだものである。

私は生れつき剛情で、我が儘で、疳癪持で、どちらかと云ふと、味方より敵をつくる方であつた。

今更考へても愚な話ではあるが、互に仲間を作つては惡口を云ふ、缺點を探すなどしたものだが、卒業したり女學校へ轉じたりして、ちり〴〵に別れてくると、さあ懷かしくつて耐らない。同級生の行衛を一人でも聞き逃すまいとする、雜誌などで同名の方を見ると、若しやと、お尋ねする樣になるのである。

現在私が文通して居る友の中で、伊太利に居る一少女がある。便船ごとには缺かさず寄こすけれども、別にこれといふ變つた事もない。四季の時候見舞だの、日常の出來事に過ぬけれども、その文面には何とも云ひ難い情緒が溢れてゐる。私はたゞ〳〵感謝してゐる、斯くの如き友を一人でももつて居るのは私の誇であることを…。

夫れも五歳の時いはゞ振分髪の頃に、つひ近所どうしであつたので、僅か半年かそこいらの友達であつたが不圖した事から四五年前に、交際し初めたのである。元より面影の如きもほとんど記憶してはゐないが、互に信じ合ふて居る。心と心へは溫かい友情が流れてゐるのである「女は涙もろくして薄情なり」とはよく云ふた言である。例へば先生の轉任とか、卒業式には、身も世もあらぬ心地で、涙は涸れるかと思はれる程泣くのに、日を經る如に、だん〳〵忘れて了ふ樣である。「お手紙頂戴ね」などいふのは、女の別離の時の常套語であらう。其點に於てはとても男子はかなはないと思ふ、私はどうか一時の發作的でなく、さうして熱中なるには及ばないが、清く美くしい友情を以て、永く

變らぬ友と交際したいと願ふてゐる。（地賞）

何も堂々たる題をつかまへて來なくとも、若い女相當の題をつかまへて、自分の所信を述べるのが、此の評論欄の特色とするやうにしたい、それには此作などが能く當てはまつて居る、女の評論文としては至極、其體を得たものであらう。（評）

○私の思つてる事

攝津　山口靜子

▲私の知人に、無線電信屋さんて言ふまことに有難いニックネームを戴いて居る人がありますの、困つた女でしてね、折々お友達仲間でごた〱をおこしますの。

本來の精神は飛切惡いのではないんですが、何分人の言ふた事を、次から次へと節おもしろくふれ歩くのですもの、今では電信屋さんてお友達間に其名陰れもなくきらわれてゐます。人はお話をする時に一々言ふ可き事を深く考へて重苦しく話すのも感心致しませんが、右の電信屋さんの樣に、惡意無しに言つちまふのはいけません。

▲人が言葉を掛けると、はつきり返事の出來得る人は萬事に機敏だらうと思ひます、皆樣でも朝夕の言葉を掛て對手の答へ如何によつて其時の心持が如何程違うでしやう、水の中で何にとやら私は大嫌ひです。

總じて落ち付いて尊大氣味の方より、少々おてんばさんでも快活な方の方がいゝと思つて好きです。

▲私のおり〱參りますお菓子屋に、極高尚な娘があります、まゐりますとお越しなさいませつて十八九の其の家の娘さんが出てまゐります、あまり美人ぢやないのですが、美しい自然のあいけうがあふれてゐます、此の娘さんですと三包のおまんぢうが五つ包になります。

ひよつとすると妹さんが出る時があります、私そんな時にはなぜか買つた品がお美味しくないやうな感が致します、此の間お嫁入をせられたさうです。

女も高尚ないつはらぬあいけうが萬事にふりまけたならば私の理想的です。

▲未だ申したい事がありますの、外へ出まして大道を私は天下一の美人にて候と言ふやうな顔付で歩いてる方が多いやうですが、お氣の毒樣ながら、かへつて美しいお顔が反對に、心のみにくさを表してゐますから。

私は天下一のおかめと思つてお歩きなさい。見よくてきつと前者よりより以上美しく見られます美しい方はよく氣をおつけなさいませよ。（人賞）

少し手ごたへのぬるい所もあるが、先づ〱此位なら書けて居る方だ。（評）

大波小波

☆

滋　香（備　中）

▲私は何時も兄の家に行つて、店に坐つてると、可笑しくなつてしまひます。それは、街を歩く人が男でも、女でも——多くは若い人達ですけれど極つたやうに、表にはまつてゐる硝子戸に映る自分の姿を、チラと見て通る事なのです。よく氣をつけてると、噴き出したい程しなをして通る人があります。抜けかゝつた金齒になんか一寸白い手でおさへて、すつきりした體を斜にすつと通り抜ける仇者なんかは別として、額の皺に遠慮もしないで、厚化粧した中年増なんかゞ、見ぬふりしてヂロ〳〵見たりなんかするのは胸が惡くなります。樣子のいゝ人、惡い人それらが皆滿足さうな顏をしてるんですからお目出度いわけです。女が鏡を見て、亂れた姿を改めるのに不思議はありませんけれど、あまり見好いもんぢやございません。街を歩く時だけ止して頂きたいもんです。

▲女の方で、殊に若い人が街を歩いてる時に、足の裏の汚い程醜いものはありません。假令その着てるものが、甚麽に粹であつても、履いてるものが空氣草履であつても、パツパと蹴返す時に汚い足の裏が見えて御覽なさい。全く興が醒めつちまいます。氣をつけていゝ事と思ひます

▲四つ角で人に出合つた時によくある事です。私が右によれば、其人も右に寄る。左に避ければ、其人も左に、果ては困つて、眞つ直ぐに行かうとすれば、其人もまた眞つ直ぐに來る。其樣にまごつく事はありません。

此麽時にはお互に御免なさいつて別れたら、極りが惡るかつたにしても惡いきもちはしませんけれど、「氣をつけんかい」なんて怒鳴られると、いやになつてしまひます。

☆

馥　子（陸　前）

▲私は無暗に男をわるく云ふ女は大嫌だ、女をわるく云ふ男も大嫌だ、男必ずしも彿々ばかりではない女必ずしも禽獸的の者ばかりではない惡い者を標準として立派な人間迄あしざまに云ふとは言語同斷である。

▲人は泥棒明日は雨とは感心されない處世論である一年三百六十五日、人生百二十五年、猜疑恐怖にばかり暮して何を仕樣、こんな言葉やこんな觀念は須らく消滅さしたいと思ふ。

▲水呑百姓とはいと貧しい農民の稱だと云ふ。いかなる人の云ひ初めたのか知らないが、おかしな話である、水呑むは豈貧しい百姓のみだらうか、最も貧しい百姓だとて水許り呑んで生きてる譯でもあるまい、殊更らに水呑等と肩書するに及ばないではあるまいか。

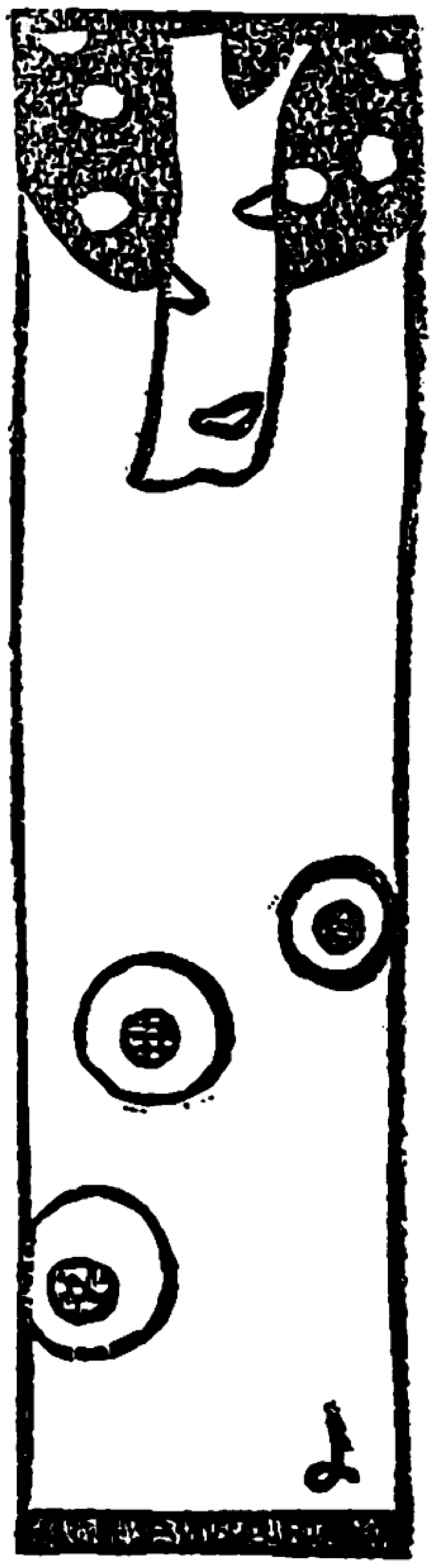
▲寄生木のヒロインが幼年學校で女性的と評されたと云ふ。何時迄も獨身で居るのが系統でもわるくてくれ手がないのかと思はれるかと嫌であると云ふ意味の手紙を見ると、成程女性的の人だつたと思ふ。男子二十七八妻がないとて誰が何んと思はう。

▲デカダンとは 現代の流行語が何んの事を云ふのだらう？白粉臭い女と瓦斯の灯の 青い町をならんで歩む等とむき出しに單調に戀をかたる青年の事か、酒よ女よと耽溺して天晴現代の若人と澄して居る殿方の事か兎に角結構な意味ではないらしい。デカダンと自ら任じたりデカダンと云はれて悅んだりして居る人は眞に「お目出度い男」ではあるまいか。

☆

秋の村女（岡　山）

▲初めの程は人並らしい戀である會社員？と驅落のやうなことをしてゐる。中頃は安い役者や若い淨瑠璃語りなどをつゝいてゐる。一番最後が親から勘當されて金の道が絕えたので、ある宿屋の仲居奉公として住込んで、なほ紳士などに對する艷聞を流してゐる。そしてその女はこんな事を言つてる。「諸ゆる階級と程度の男と出來る丈け數多く戀をしてみる。死ぬるまで男を弄んでみる。そして妾が死ぬる間際に、妾の一大歷史を小說として著はすんです。……」その女はまたバイロンの詩集を片時もはなさぬと言ふ。今年十九になつた質屋の二番娘。容色は無論今小町。近來學生間やその他で「現代」と仇名をされた有名の女の事である。岡山の新聞は二號活字で雜報の最初へ「現代の色彩に富める女性」として、五六日間その女の事を連載した。その女が實際の現代式かどうかを、私は疑ふてやまない。バイロンの詩集をもつた位ゐでかならずしも現代式とは言へぬ。多くの戀を弄ぶ云々小說を著して死ぬる云々だつて、言ふ丈けなら誰でも言ひ得よう。一體それではどんな女を指して現代式の女と言ふのであらうか。



俳句　内藤鳴雪選

○（天賞）

なつかしきほどにふりけり夏の雨　麻布　石井すみえ

○（地賞）

五月雨に妻見うしなふ蛙かな　備前　我澤勿忘草

○（人賞）

風かをる闘取の子の男かな　横須賀　美葩女

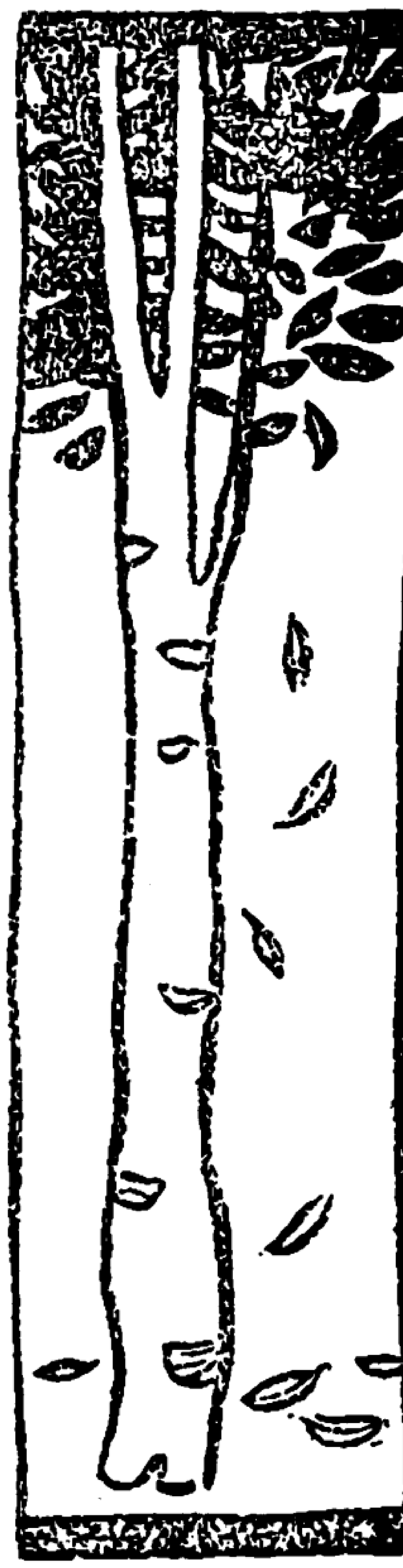
佳作

敦盛の笛も聞かばや青簾　徳島縣　杉山紫香女
明月の盥に放つ魚一つ　麹町　牧野銀杏子
夕涼戀人乘せて舟漕がん　北海道　伏見屋康子
蚤もなく大宮人の朝寢かな　水戸市　根崎久子
妹が手に美しき火の螢かな　土佐　はぎ子
蚊帳を出て舟の者呼ぶ月夜哉　鎌倉　西垣きくへ
物たりて我宿をかし秋の暮　横濱　小野秋帆子

からまりてむかごしにける芋の垣　京都　要司美子
永き日を牛追うて行く女連　畑しら菊
秋の風たゝみの上を吹きにけり　下關市　西村文子
夕顔に風かをるなり八日月　周防　白き花
秋の日を大宮人の塗り机　山城　木の花
杖ひけば緑涼しや瀧の道　栃木　しのぶ子
廟古りて苔むす門や夏木立　下野　永山紫子
夏の月しづかに松をなれけり　群馬縣　千吉良喜久子
夏の朝遠淺に群る丶鳥は何　羽後　初子
夕立に人皆散つて傀儡師　京都　別所君子
洋傘いで雷の行衛やちぎれ雲　京都　小林なん玉
風薫る嫁が里より瓜一荷　京都　小芹
涼に出る舟にとびくる螢かな　熊本縣　花丘緑香
夏の夕野中の杭を小雨打つ　栃木縣　碧椿
山みちや物香りして風そよぐ　宮城縣　ふく子
笛の音は無官の君が夏の月　徳島縣　平岡清子
たちばなの香に迷ひ飛ぶ螢哉　下谷　鈴木靜子
あけのころ影なつかしや月見草　長崎　紫川
持かへて風新しき團扇かな　下澁谷　季子
家々の灯の影や夏の川　神戸市　山村香枝
蚤貌や眠たさうなる牛の犂　朝鮮　松田きく
唄をうる夜の涼しさや夏の月　横濱市　石川八重子
文添へて文筥の中や初茄子　鎌倉　内藤まき子
夏の夜や三味の音する所まで　四ツ谷　しらぎく
岩清水玉を炊がん客りかな　京都市　中野ふみ子
巻さうな胡瓜尻や盗の畑　山形縣　伊藤智惠子
しと／＼と三味線草に夏の雨　山口縣　椰良美那子
黍畑の戰ぎや雲の足早し　深川　曉子
水白き渚の塔や明易き　府下　小原あい子
川深く月の影あり涼み床　美作　橋本紫
月待つて船に二人の涼み哉　府下　高木多香子

からくと笑ふ人あり夏の宵　千葉縣　鈴木べん子
追て來て土橋あぶなき螢かな　茨城縣　鈴木直枝
秋の宮佛の御手にとまりけり　山口縣　吉原脊子
すれぐにふぢの下ゆく日傘哉　樺太　鈴木トヨ子
溫泉の宿の浴衣に寒し蟲の聲　京都　壽賀予子
湯上りの團扇づかひや削しのぶ　小石川　中村千代子
面白う瀧壺に飛ぶ螢かな　岡山縣　小賀君惠
青簾越の人影畫きけり　北海道　小木白菫
雨晴れて雨傘光る暑さかな　本所　一子
芋堀りの戻る後ろや昇る月　上毛　つめたい花
西へ行く雲は返らず秋の夕　上野　松本八重子
秋の夜や蚊の一ッ飛ぶ枕元　群馬縣　新井つま子
田草取る乙女の背に蝶の來て　信濃　青木嘉子
蝶を追ふ猫の子猫や草の中　赤坂　しげ子
氷屋の小旗涼しき松のかげ　兵庫縣　大槻富香
伐株や紅蕊きし秋の園　福岡市　片山秋子
歌よみの二人眠げや晧鳥　京都市　伊藤英美子
玄關は青葉の奥や駒の聲　上野　齋藤常子
薄月夜兎出て喰ふ豆の花　靜岡　貞水子
湯の街や雨にぬれたる繪燈籠　和歌山　小茄
あつき日や貝殼光る砂の中　福岡市　市川久子
尼寺の鐘のゆくへや五月雲　南臺　白妙女
船を出て直にさしたる日傘哉　神戸市　伊藤光子
蜂起ちて一ッ散りたる牡丹かな　長野縣　小平ひで
よき琴の花賣り來たり雨の後　茨城　田村はつ子
馬嘶ばう野は黃昏れて夏の風　信濃　保科伊津子
放ち鳥籠へ歸りぬ小六月　高知市外　北村よし
迷ひ子に貼る廣告や秋立ちて　土佐　北村美佐夫
藤咲くや森のくもりにはとこの聲　岐阜縣　佐藤天香
青うけぶる田の面に動く御幣かな　栃木縣　里の花
築山に白き花あり夏の月　府下　芙蓉

長月のすき間は寒し山の風　羽前　長澤清子
今さらに君偲ぶなるよき月夜　王子町　大浪露香
帆柱の眞上に白き星の月　廣島市　村上白菊
ほとゝぎす鳴くや離れの朝ともし　新潟縣　若井紅雨
夏の宵いばら咲く野をあてもなく　熊本縣　菩の花
水に棲む魚淡しこの暑さ　北見　大出夢衣
百合の花白きは野邊の月夜かな　栃木　N子
雲かゝる五輪の塔や夏木立　福井縣　池上小芳
雲の峰十三塔の暑さかな　大阪市　大關さとの
ゆらぐ物なくて眞晝の暑さかな　佐賀　泥子
白萩やこつゞみを打つ岡の家　伊豫　長井薰子
人もなき宿に咲きけり月見草　大分縣　池見白菊
青嵐鷺も白帆も飛ばしけり　南越　井上美佐尾
夏の朝素足で走る萩の露　高知　藤村紫華子
金殿の深く閉ざして青嵐　下總　浮舟
絕壁に川流れ落つ茂りかな　上毛　阿久津雲路
さみだれに淋しう散るや薔のはな　吉備　小田美鳥
寂た人「を守る馬あり夏木立　岡山市　桃の村女
夕涼み遲々として行」く橋の上　淡路　高田淸子
夕立や相合傘のそこ此處に　備中　大西松月
楚々として竹に風ある時雨かな　伊賀　米田きよ子
合傘の少女二人や青葉かげ　陸前　佐藤桂香
藻の花の邊り離れぬ浮巣かな　神奈川　玉置千代子
君と愛でし卯の花垣の懷かしき　福岡市　疋田みさを
橋に來て笛吹く袖に螢かな　茨城縣　石川とみ子
一鄕は短夜明けて堰の音　下澁谷　横谷ゆき子
蟬鳴いて竹の朝露こぼれけり　群馬縣　千吉耳ひでの
明月の門に進むる駿馬かな　麴町　牧野はん子
涼しさの松影動く砂地かな　麴町　牧野すみえ
國境の川渡りあふ螢かな　麴町　牧野伴女
轉寢を妬しと秋の蚊が刺しぬ　群馬縣　荒井よし子



初作

編輯局選

○愛讀者となつた動機

名もなき小草

私のお姉様は一度も投書した事はございませんが熱心な本誌の愛讀者でございました。お姉様は田中久子樣崇拜家でございました。いつかよほど以前の本誌に「田中久子の君逝く」と出てた事がございました。その時のお姉様の悲しみはどんなでしたらう「あゝ惜しい事に花なら未だ蕾の久子樣を」と、まゝならぬ浮世をかこたれました、それから二とせあまり越えてお姉様はみ惠み深き母樣のおそばでとこしへにかへらぬ人となりました。

今尚うづ高くつまれた本誌をみるにつけ姉君こひしなつかしさのやるせなきまゝせめては姉君の朝な夕なみ手にふれしものをと手にとつてみるのをこよなき樂しみと致して居りました。一度〳〵となつかしさがいやまして今では文壇を唯一の友としてかくは拙なき筆を走らす樣になりました、私は今後ともよき姉君の忘れがたみとして永久に愛讀する決心です。（地賞）

美しい動機だ（評）

○米高

神戸市　美津子

寄ればさわればお米のうわさばかり。私なんか今迄御米の價なんか一寸も知らなかつたのに、此頃の米價騰貴でお定りの新聞屋の長々しき記事や、近所の長屋連中の井戸端會議で、毎日其價を知る事が出來ます。一升二十九錢三厘とは誠に〳〵高い〳〵價で御座います事一圓で三升四合程しか買へませんもの。私の家の長屋ではやりてのお松だの梅だのつて、こんな連中が朝から夜まで、それは〳〵八ケ間しい程仕事もよして、話して居ます。中にも、はなはだしいのは、朝早くから米屋の表に來てお米の立札を見ては、それ今日は三厘上つたの五厘下つたのと、其日の井戸端會議の材料として話合つて居るのです。

こんな話が私の家へ手に取る如くに聞えます、此内でも最も氣の毒なのは、一人の親は病床で、小供の働いたお金で皆の者が一日一度か二度の、かゆを食べて居るとの事です、それでも親へは一日として藥を買つて食げない日とてはないさうです。之程迄も困つても親を大事にするので近所の人々から表彰せられて居ます。

私も毎日〳〵こんなうわさばから聞くので、なんだか自分ながら氣がひけるやうになつて、すきな〳〵アイスクリームや活動寫眞もすつかりやめる事にしました。（人賞）

思ひ切つて正直に書いてあるのが宜い。（評）

○私

紫陽花

毎日二度づゝ來られる醫者は何んな事を言つて行くんだか知らないけれど突然會ひに來られた京都醫科大學の兄樣の言ひ振りと云ひ、此の二三日といふものお祖母さんが急にやかましい程枕元で未來の行先きに付いて注意して下さる事などから自分の病がどれ程の處にあるかも大抵察し得られる、死が近い病とも知つて居る、けれど私は五六年前に病むた時程に怖れる樣な心も迷ひも起らない。然し始めて或る事をふつと覺えた

時はさすがに自分の周圍の物全體が淋しく獨り切りだと思ふと言ひ盡せぬ悲しさに心限り泣いた。五六年前私の九つか十の頃重く病んだ事がある、其の時もお祖母さんは私が時々詣つてわからずながらも薄々知つて居た佛様の事を色々話して下すつたそして終りに「いくら丈夫な者でも死んで行く先きを知らない者は人と云はれないのですよ本當の馬鹿者ですよ、千いさんお前が行くのを待つてる御方は一人しかないよお優しい方でねお父様やお母様みたいな方ですよ、そして何でもお前のほしがる物を下さるんだよ」お祖母さんは靜にといて下さつた私はどうしても滿足が出來ないで佛にうつむいて居た母様に四十度も有る熱でしがみついた、「母様私死ぬの死ぬ事嫌や」と泣いた事も覺えて居る。あんなに怖れて居た私がと思ふとをかしくも感じる「今度は用心しないと」と兄様の言葉をうたがふ様な事はしない、一歩違へばかへらぬとはあきらめて居るけれど――然し今、今行くのだと心の内でさけんだ時はどんなでせう。自分にも今の冷靜な感が續くか如何かわからない私は自分で自分の心がわからない然まで大病人の心持とも思へない。（評）



ほしもの　長野縣　秋丘こずゑ

○クロバーの香

信濃　須磨子

また夏が參りました。獨り窓によつて、ジーツと考へますと白いクロバーの花の咲く母校の庭が幻のやうに浮んできます。夏休も近くなつた七月の始ごろは、氣候のせいかほんとに眠くつて仕方がありませんでした。理科の御講義の時など、ともすればふらつきがちの頭を横にして御となりの人の顏を見ますと、やつぱり眠むさうにして被在います。窓の外の青葉はまぶしい日光にてらされて、しほれかへつてゐますし、咲き殘つたひなげしが眞紅な頭をもたげてゐます。時しも一陣の風に送られて來るクロバーの香、甘い〳〵夢のやうな香、私は其まゝゆめの國へでも誘はれて行くのではないかと思はれました。

若々しいさゞめきや、トーン〳〵といふボールの音を青葉ごしに聞きながらクロバーの上に腰を下して、稀にある赤い花を見つけだしては、花を一りんづゝつないで、私のが一ばん長い、私のが長いなど語りあつたときも甘い香は私たちを包んでゐました。

ピヤノの音もるゝ寮舍の窓ちかく夕月の影を仰ぎながら、黒岩先生のやさしい御口をもれるバイロンの詩をきいた時、クロバーの花はほの白うございました。あゝ、も一度、あの窓で、あの庭でクロバーの香が、かぎたうございます。

溫潤の文。(評)

○街頭の夏

芝　妙香

日はかん〳〵と照つて、居ても立つても暑い。

是非ない用事があつて外方へ出た。電車の軋り自動車の響き皆暑さを増すばかり、巡査は右手を擧げて、人道通行を奬勵してゐる、ゴーッと砂塵を捲いて自動車が通つた、何處かの華族の令孃とも見ゆるレデーが淡紅色のベールを風になぶらせその母君らしき五十路あまりの氣高い婦人と乘つてゐた。

暑いのに自轉車が疾走すると氷屋の出前が岡持さげて小走りに電車線路を横切つた。

横丁の河岸の柳は綠の影を靜かに寫してゐる。

その側に瓦斯の鐵管が五六本積んである。

柳の影に氷屋の爺さんがサラ〳〵と氷をかいてゐる。空車を引いて來た男が瓦斯管に腰をかけて流るゝ汗を拭ひ乍ら氷のかけるのをもどかしさうに待つてゐる。暑い蒸した風がスーッと吹くと柳の枝がスーッとなびく。撒水夫がザーザー水を撒いて來た。「アッ」と驚いて飛び退いたが沕沫が少し裳にかゝつた。

向ふの果物店の若者が二三人で笑つた「ホントニ厭ナ」きまりが惡いので急いで歩んだ。

向ふの河岸を水色のパラソルをさして行く乙女がある、よく見るとS子さんだ、私の見て居る事など御氣が付かれず白い絹ハンカチを握つて、スタ〳〵と濟まして入仰しやる、聲をかけようと思つたが使の途らしいので止した。何處かでボーッと眠さうな氣笛が鳴つた。

雲の峰がムラ〳〵と南の方に聳え立つた。

蒸し暑い風が又一頻り吹いて來た。

一本調子だけれど、文章には生氣がある。(評)

読友くらぶ

暑中御見舞を謝す

△青山、町田靜江△牛込、花山院貫美子△京都三宅壽賀子△佐賀、花の雫△大阪、小泉貞子△大阪、梨花△相模、笹野登久△武藏、地疋福子△兵庫、高内はる子△熊本、君影草△備中、大西千登世△淸國、上野菊子△群馬、關口きよの、以上の諸孃より、暑中見舞の御便りをたまはり、中には大西さんを初め美しい繪はがきを澤山送つて下さつた方もあり、謹んで其厚意を拜謝いたします(記者)

交際

○ 徳島縣三好郡池田町 三木照惠

▲私は草深き 山里に住む少女ですお情深き諸姉様何卒御玉章や繪はがきお惠み下さいきつと御返事は差上げます

○ 山梨縣東山梨郡平等村寶來館内 萩田敏子

▲甲斐の山里より 少女の改名によつて私は始めて本誌の愛讀者となりました。お優しい姉様方!!兄もなく況して姉もない淋しい子に一片の御同情あらば何卒御玉章御惠み下さいな心からの妹と思召して!!

○ 京都向日町局下久世 大橋鶴子

▲京都 の誌友諸姉様私は向日町邊に住む乙女ですがみ心ある君は淸き御交りを願ひます

○ 東京青山北町五ノ四十 多賀作樂

▲小笠原流 皆様わたしは誌友の方々の內で思召の方へ小笠原流の禮法通信教授申上度とおもひますもし御望みの方が御座いましたら右の處へ御問合をねがひます

○ 京都市油小路五條北入大森與兵衛方 はる

▲悲しき方 誌友の姉上様方へ御願ひ申上ます妾は去る六月頃から或る事情の爲めに申上ぐるも涙の種なる悲しい〳〵身の上と成り果てましたで、せめては御情深き皆様方と密の樣な御交際をお願して心の悶えを慰め度いと存じます何卒〳〵不仕合せな妹を慰めると思召て御玉章や美しい繪葉書などで御交りを幾重にも御願ひ申ますさよなら

○ 東京市神田區三河町三ノ三山口方 近松しげ子

▲私は子供の時に 父樣や母樣と死に別れて今は叔父の家に厄介となつて淋しい生活をして居ります今度女子文壇の愛讀者となりました御姉樣方どうか御交際をなすつて下さいませ

○ 京都府紀伊郡吉祥院村石島 三木たつ子

▲懷かしき諸孃樣よ 妾は女學校を卒業したばかりで只本誌を友と賴み居る哀れの身の上情深き誌友の君よ哀れと思召し給はゞ男女に拘はらず御通文を願ひます屹度々々神に誓つて御返事致してよ

○ 府下青山南七ノ九石川方

▲かよわい私　私は今都の片はとりに寂びしく悲しい月日を送つて居ますの。私は生來身體があまり強壯でないくせに恐ろしく我儘なんです。而して文學好き、それが故か尚更悲しいの。私はこんなに纏つた不束なものですけれど諸姉様の中誰にても私の如きものをも憐れと思召す御方があるならば何卒御優情をたれ給へな！清く貴ときレターを以て永劫にお交際をね。待つて居ますわ。早くね

福井市本町通
松成とめ子

○

▲待つてゐてよ　私ねとめ子つていふのよ、田舍で毎日〳〵さびしく女子文壇を友として暮らして居るのですわ、誌上のお姉様遂哀れと思召されてレターや寫眞繪葉書の交換を願ひますきつとね……………

近江國甲賀郡柏木村北脇
田中しを子

○

▲近江より　私は七月號に「お伊勢參り」を出された鈴蘭女史の家より程遠からぬ所にわびしい生活をしてゐる女ですがどうぞ御交際を賴みます

群馬縣新田郡木崎町赤堀
關口ちよの

○

▲群馬の片田舍より　私は田園生活に趣味を持つて居る一女子ですが御見捨なく御交際を願ひます、米國製の繪葉書で御返事致ます

千葉縣香取郡大須賀村伊能
あらゝぎ子

○

▲郷に歸りて　櫻散る頃戀しい都を捨てゝ故郷に歸りました期待してゐた田舍も來て見れば、うんざりします、私等を入れるには餘りに周圍が單調です、母と妹と三人きりのつゝまやかな家庭ももうすつかり厭きました。濃厚な都のライフが此頃しきりに戀しう御座います。都の諸姉上樣御手紙を下さい。私は都の消息が聞きたう御座います

福岡青葉のかげにて
千代子

○

▲御懷しき　誌友の皆樣大變御暑くなりましたね青葉のかげほどよいところは御座いませんのね皆樣何卒〳〵此後も御身御大切にそれから誌上で御無禮ながら御伺ひ申します　東京市の喜多みどり子樣其後如何御過し遊ばされますか早く御伺ひ申上樣と思ひながら何卒許して下されませ

兵庫縣池田驛前局區口谷阪上留造方
岸田淸子

○

▲繪葉書　誌友の皆樣並びに海外在住の諸姉樣、私も本誌の愛讀者となりましたから以後は繪葉書やレターの交換を願ひます

東京市下谷區下根岸十一
石鍋てい子

○

▲歸京して　私は昨日小田原から歸つて參りましたの、以後永久に御交りが願ひ度うございます、繪はがきや御手紙下されば屹度御返事差し上げます

信濃國松代堀切
宮本珊子

○

▲私は信濃の山國に語る友無く暮して居りましたが先頃フレンドの靑木嘉子さんの誘めによりまして大正元年の八月號より愛讀者となりましたわりなき御交際を

京都府の一隅鬼城山下
波津子

○

▲丹波より　皆樣淋しい里に棲す少女で御座います、今度から本誌を愛讀する樣になりました。どうぞ淸き誌上で永久にお交り下さいな!!七月號の誌友くらぶに出て居りました奈良の貴治綠子樣つてあの久子姉さまでせう、どんなになつかしかつたでせう。波津をおぼえてゐて下すつて以後はどうかこの誌上で御便り下さいませ。京都の伊藤英美子樣同じ「少女」よりまゐりましたのですなつかしいわ、何卒お交りを

越後刈羽郡中鯖石局內
小林白百合

○

▲病んで　こゝに半年病床にあきた瞳はいたづらに悲しい淋しい思ひに沈んで居ります。誌友の皆樣どうぞ永久にお振ひ遊ばせ、私は蔭乍ら皆さんの幸福あらん事を祈つて居ります。私は秀才文壇も愛讀して居ります、もし皆さんの中で文藝趣味の溢れるやうな何雜誌でもいゝ、病床のつれ〴〵を慰めてやりたいとお思ひ下さるお方はどうぞ御送り下さいまし。長岡名所、柏崎名所、秀才文壇等できつとお禮を致します

橫須賀市逸見町二二七井澤貞子方
西島柳雪

○

▲湘南より　私は相模の國の片田舍に女子文壇を唯一の友として居ります「何卒諸姉樣御玉草

葉書を頂戴な

○　信濃東筑摩郡廣丘村　保科伊津子

▲御自作　青葉茂る信濃の里に音樂や雜誌を友として親しんでゐます。誌上同趣味の諸愛讀者樣方で御自作の和歌、俳句、詩などを御送り下されば私はよろこんで返事致しゝす

○　神奈川縣小田原町十字三丁目大蓮寺内　石鍋貞子

▲御手紙を　久しく文壇の愛讀に餘念もありませんでしたが、華やかな都を離れて湘南の舞臺に暮しましては、なあんの樂しみもありませんただ〳〵文壇を唯一の友としてますばかり誌上の皆樣何卒以後御心安くし又レター御惠み下さい御返事は屹度差上げます

○　大阪東區今橋五ノ七　河合富

▲唯希望　懸しき誌友の皆樣に、私も此好きな文壇の愛讀者で御座います、永らく愛讀をして居て未だ一度も投書は致しませんが、初めて誌上を拜借して皆樣方と御交際を求めたいのです

どうぞやつがれな私と御文通のみならず御交際をして被下いませ

○　三重縣一志郡久居町幸町淺屋方　若林綾子

▲夏木立の　清きせゝらぎに暫し神韻の調を奏で給はずや、清き水莖の跡にそをものして惠み給はゞ何の幸か之に及ぶべきいざ友よ、涙ある友よ、とく來ませ誠の心もて手をとらむ

○　茨城縣霞浦湖北下大津平川　岡田つゆ子

▲霞浦邊より　記者樣、お障りはありませんか、及び本誌愛讀者なるなつかしき姉君樣方御壯健でおらつしやいますか只今私は高女に通學致して居りますが短日休暇になりますからね小波よする湖邊までお遊びを。……… 尙御文通を願ひます

○　福井市錦下町三十九番地　ゆふひ會

▲同好の御方に　新文藝に趣味を持つた未だ幼い少年少女が集りまして昨年頃から幼い筆戰雜誌『ゆふひ』を發行して居ります。元より少年少女と極らないのですが一片の同情心により救けてやらうと思はるゝ方々は御入會下さいヽ毎號三十頁餘の活版印刷誌で短文、短歌、俳句等です。勿論會費は印刷代郵稅共で一月六錢で二月分以上の會費と原稿を添へて申し込んで下さい。各欄共微賞が呈されます

○　下澁谷　𠮷子

▲ごく茂つた綠陰より　私は餘り誌友が多いので嬉しいわ、六月號より新愛讀者になりました皆々樣よ永久の御交際とレターをもお惠み下さいませ

○　横濱市山下町私書函九一番　岩澤政枝

▲私は十七の少女　私は六月より愛讀者になりました無學の者です末長く御交際を御願申ます亦御手紙や繪葉書の御交換も御願致します私は今年十七歲の少女です何卒皆樣御手紙下さいな

○　小石川區久堅町十四ホリエ、シ　ーイー、クラブ内　プリムローズ

▲通信クラブ　私等のエハガキや手紙など交換する通信クラブに御入會御希望の方は御申越し下さい詳しく御報知いたします

記者より

△長野縣、千代子さんに、(1)七月十五日しめきりの投稿は九月號に出る勘定です(2)投稿は界紙でもかまひません(3)紙上に出るのは縣名とか府名だけですが、原稿には皆さんの御住所が、詳しく書いてないといけません△朝枝さんに、誌上に出なければいくらでも初作欄にお出し下さつてよろしいのです△佐賀、泥子さんに、お尋ねことは再度投書してもよろしい△軍艦武藏乘組の小松氏に申す、御叮重な御手紙でもあり、文意も分つて居りますが、本誌は一切女子の機關で男子の交際を求めるものは勿論凡ての投稿を禁じて居りますから惡しからず御了承を乞ひます(以上、記者)

注意

○　福岡市　みさを女

▲注意　神聖な本誌の文藝中に、每號の樣に剽窃の和歌や俳句を見受けます、何んと淺間しい、又、悲しい事でせう

私は其廢作品を見る每に、心泣きをせずにはおられません、今こゝに、それらの人々の姓名を

列記するは、いと易き事ですが、徒らに名譽を傷つくるのも、お互の本意でありませんから秘しておきます

どうかそれらの人々よ！　御反省遊ばせ、そして美しい眞の文藝の御研究が望ましう御座います

しかし、この後とも尚、平然と其麼陋劣な投書をしてゐられるのを見受けました折は、もう致し方は御座いません、本誌に詳しく公表して、みな樣と共に、最後の處置をとります

○

望むにしき

▲本誌愛讀者の諸姉樣方よ交換物はよくよく御注意なされて御交換なされませ、さもなくば偽はられますよ、如何に世が不景氣とは云ひながら餘りですわね、私はハーモニカが大好な者ですから私に有る本と交換したいと云うて本誌に御願ひ致しました處御姓名は止しませう筆より察しますと高女卒業生らしい方ですが或人から私は白瀧樣の樣に偽りは決して致しませんとか何とか云うて來ましたものですから眞實と思ひまして御望みの本を送りました處が母樣が甥に呉れたの失くしたのと云うて私には古い繪葉書五六枚許りそれに色々な字が澤山書いて有る繪葉書でしたのそれで私が「ハーモニカ」が欲しいのですから本を返して貰ひ度いと云うて其の汚い葉書を御返し致しましたけれども未だに一冊も返して呉れませんのですの、如何に高等の教育を受けましても斯る御心なれば實に歎げかはしう存じます此世に高等教育を受けて居る婦人は幾千あるか知れませんが其の常識に外れて居る事は夥しいものですね、其の教育者たるべき人今少し常識の涵養に努められん事を望む

書籍交換

岡山縣兒島郡鉾立村大字番田
山本筆

▲私の持つてるもの、本年度の女學世界三冊婦人世界三冊、婦人の友、新婦人、文藝倶樂部等其他小説では幽靈塔後篇、血に啼く不如歸、美だれ萩など又、繪端書、など大分持つてゐますから次の本、御持ち合のお方は御交換又は御交讓を願ひます

▲讀みたき物、少女の戀、不知火、琵琶歌、藤村操、夢二畫集何んの巻でもよろしい以上何卒御願ひ申します

○

佐賀縣神埼郡仁比山村
古賀まさ子

▲持つて居る書、モウパッサン集、花袋叢書、辭林、スヰートホーム、自然と人生、セクスピヤ、ナポレオン、ドンキホーテ、毒、話草、草枕、天地有情、オルガン教科書（第壹）雁のゆきかひ（上）

△讀みたい書、煤烟、あめりか物語、酒はかひ、欺かざるの記、ツルゲーネフ散文詩（草野柴二譯）貴族の家、青春

右交換を願ひます希望の御方は前もつて御一報下さい

○

信濃東筑摩郡廣丘村
保科伊津子

▲不用の物『手風琴』

▲入用の物『ヴワイオリン』

御のぞみの方は御交換願ひます。

○

伊豫温泉郡荏原村東方
高橋政子

▲所有の書　ホト、ギス、日本及日本人、蝸牛（以上三年前より）懸あふひ、層雲（一號より）女子文壇、思出の記、沈鐘（泉鏡花）古き中學文壇、秀才文壇、白蓮白菊

△讀みたき書　スバル、文章世界、女學世界、秀才文壇、女子文壇（新文章、都會の婦人）三田文學、山上より其他詩集

右御貸借を願ひます

但し男子の方及び不確實なる方は御ことわり致します

○

朝鮮仁川永華街第十號
惠山絢子

△皆樣の內で、やどり木、コブシ、新不如歸、黑潮、思ひ出の記、此一戰、少女の戀、とそれから御不用のヴアイオリンお持ちでしたら附屬品とも御讓り下さいませんか御讓り下さる方は一寸御一報下さいまし

○

米澤市免許町下一三〇八
佐藤秋湖

▲女子文壇　昨年分七月より十二月號迄（增刊號共）夢二畫集か他の雜誌と交換いたします

○

大阪南區天王寺阿部野町二丁目三七四一菊照靜惠方
萬田たま子

△明治四十年六七月の女子文壇、昨年一月婦人畫報、婦人くらぶ、ムラサキ、一昨年九月婦人世界御不用の御方は御送り下さい必ず同價の雜誌を御返禮いたします

○

山口縣　柴　蘭

▲持てる書、一妻君の自白、泥人形、一葉全集、夢二畫集＝春、夏、秋、冬、京人形、太田三郎＝草花繪物語、金色夜叉、畫譜、梅ごよみ、(帝國文庫)あきらめ、黒髪、モウパッサン集、文は人なり、マグダ、古き女學雜誌、女子東京遊學内
△讀みたき書。醫子夫人、緣の糸、風葉集、少女の戀、晶子歌集、何でもよろしい
右の本貸借御望みの方は本欄にて御一報下さいませ必ず御送り申上ますなほ、外國繪葉書とでもよろしう御座います

鳥取縣八頭郡國英村山手

○小林英子

△讀みたき書物。金色夜叉の後編、藤村操、若き女の手紙、少女の戀、思出の記
▲持て居る書物。婦人世界、婦人畫報、少女世界、不如歸、やどり木、其他種々雜誌小説皆樣の内御持の方は何卒私の持って居る本と交讀して頂戴な

越後北魚沼郡千田村鴻巣

○齋藤操

▲不用の品。「吾輩は猫である」女子文壇昨年十月よりのもの、淑女かゞみ「いたづら小僧」其外少女雜誌、女學世界、婦人世界、どなたか故郷の大筋を手紙にてきかせて下さい
△入用の品。「靑鞜」、内藤千代子のスヰートホーム、夜雨集、新式化粧法、秀才文壇

芝區愛宕町二ノ三渡邊方

○渡邊君枝

△入用のもの。草艸紙の田舍源氏、白縫物語、にしき繪、旅の巻、秋の巻、冬の巻、都會の巻
▲不用のもの。夢二畫集(春の巻)、十五少年、春泥集、野に山に、夏の巻、マリア姫、もとのしづく、太陽及中央公論の春期大特別號、鏡花集、三冊なほ大抵の小説畫集はあります、雜誌の口繪さしゑ御送り下されし方には拙なけれども自筆のゑはがきさし上げ候

個人消息

長野縣更級郡八幡學校内

○宮島千代子

▲伯耆の新田ふみ子樣 去年長窪古町の方へ御玉章下つた方ではありませんか？今月の誌上で評論を御書きなされた文子樣と同じ方としか斷定されません、もしさうでしたら今迄の御無禮を赦されて、變りなき御交りを下され……前に頂きました御手紙大切に存して置きました處何かのはづみに失ひまして後御住所を忘れて終ひ其儘流して惡いくと思ひくして居ました、どうか誌上にでも又はハガキなりとも一寸御住所御知らせ下さい今度こそは確かに御返し申上ます

横濱市本町一ノ十高木方

○靜代

▲野村光子樣 三年前に確か山中樣と御變りなすつた方……の御住所御存じの方はございますまいか、御別れしてから久しくはなりますけれど彼の美しい、面影ばかりは胸に殘つて御なつかしさにたへかねます御存じの方は御知らせ下さいませなどうぞ

○吉田清子

▲去る八月四日突然御玉章下さいました神田の中山歌子樣私は貴女樣に何も御送り申上たおぼえは少しも御座いませんが何かの御間違ひではないでせうか、さうと致しますと私の名前をどなたかに用ひられたので御座います其れから麹町の田村樣御玉章はたしかに落手致しました初めから男子の御名前で文面も拜讀致しましたけれどかたくく御斷り申上げます
低から以地位、御身の上に立たせ給ふ御方なれば夢にも左樣なる御考へは御持ち遊さぬ樣、よく私を御存じとなれど私はいかなる御身か少しも存じません記者樣どうして此の方々は私の本名を知りますのでせう私は恐ろしくなりました

名古屋にて

○靜子

▲誌友の皆樣に御尋ね申ます、今年の一二月頃迄は東京牛込戸塚町三十一、に御住ひなすつて被居つた種川みき子樣と被仰る方の今の御住所を御存じの方は何卒此の紙上にて御敎へ下さいませ御使用の繪はがきで御禮申ますまたみき子樣御自身に此の記事を御讀み遊ばしたならば何卒今迄の御無沙汰の罪は御ゆるし遊ばして御手紙下さいませ私は以前の所に住んで居りますからどうぞ

新潟縣中蒲原郡澤海村角田甚松方

○若井紅雨

▲梅澤文子樣 秋田から足尾へ行かれた梅澤文子樣！今ごろは何しておらつしやいますの？三月の末又住所が變りますつておつしやつたきり御便りのない文樣私はまあどんなにお怨み申して居りますやら時鳥が鳴きましたものもし文樣の御住所御知りの方は何卒御知らせ下さいませ

新刊

○少女歌集 綠の巻　溝口白羊編

少女文藝會の和歌集である、此の巻の中では岩垣三重子、京路末葉の歌が勝れてゐる、他の少女達のも二三首宛は佳作がある、少女の持つに適するやうな極めて可愛い本（非賣品、青山原宿少女文藝會出版）

○男女の由來及分化法　澤田順次郎著

男と女とは何うして分れて來たかと云ふことは、學問の上からは大切な研究であり、一般の人からは面白い問題である。此書は可成り深く根柢に立入つて研究してある、殊に男女分化の法則に至つては、耳を傾けて聞くべき新說がある、本書の著者澤田氏は篤學の人、殊に性別學會と云ふものを自ら興して、男女の性の別と、それからさまざまの問題を研究しようとしてゐる科學思想の發達した今日、婦人と雖、此等の書物を繙いて、人生の現象を知ることは決してむだなことではない菊版二五〇頁（定價金五十錢、神田表神保町巖松堂出版）

○國民童話　石井研堂編

日本全國の一國々々に傳はつてゐる童話を集めた書物で、家庭に於ける話の材料にも好し、敎育の爲めにも參考となる、本書出でゝ既に數箇月、版は四度を重ねてゐる、以て有用の書たるとは分る菊版美裝繪入四二〇頁（定價金九十錢、神田表神保町同文館出版）

○森　水野葉舟著

今の文壇で小品文を獨立した態度で批評しないのはいけない、形は短くとも、小品文にはそれぞれ勞作の苦心があるので、今の容易い口語詩などを作るのよりは遙に骨が折れてゐる。殊に葉舟氏の小品文は文壇に獨立するだけの價値を其實質に持つてゐる、また愛讀者も多いやうだ吾人も亦其一人だが『響』を愛讀した吾人は、『森』を得て又新しい感興を得た、本誌に盛んに散文などを書く人には好い參考書であらう（定價金三十五錢、麴町飯田町新潮社出版）

○夜　吉田楓花著

大阪に於て夙に若い人達の間に文藝的新氣運の動いてゐる事は、吾人の認める處だが、雜誌の外に小冊子も頻々と出る本書は殊にさつぱりした體裁で、作者得意の和歌と、外に散文詩がある、皆新しい氣分がある（定價金三十五錢、大阪東區南久寶寺町短檠社出版）

○姉と妹の書簡　小野美智子著

世に手紙文の書物も多いが、本書は若い婦人達の手紙文を習はうとするものには、最も新しい文例に富んでゐる、形式に囚はれた文範類とはことかはり、一に若い婦人の心持をありのまゝに表はしてあるから、模範などゝ云ふよりは一つの小說を讀むやうな感情で讀んでしまはれるのである（定價金四十錢、神田區南乘物町誠文館出版）

○スケッチ文集　高須梅溪著

高須梅溪氏の評論文と美文とを集めたもので評論は多く政治の方面、美文は氏の前著『わが散文詩』以來の小品文を集めたもので何れも感情の花やかなものだ、本書體裁頗る美（定價金四十錢、淺草區下平右衞門町岡村書店出版）

○譯注文章軌範　山田鵞川譯

文章軌範を假名交りの日本文體に譯し、欄頭には原文のまゝを揭げ、別にむづかしき文字の註を加へ又先人の批評を加へたものだ文章軌範を獨學するには好參考書用紙體裁完美（定價金五十五錢、同上出版）

○白眼　本間久著

著者は一種の社會觀を有して、世の中を見てゐるので其言ふ處には奇拔なこともあるが、尤もなことでもある、大體に於て同感する、殊に婦人に關する論は面白い、凡て隨筆二十五篇（定價金七十五錢、京橋區西紺屋町昃明堂出版）

△今年の夏は近年稀に見る暑氣であつた、雷雨も屢々來た。

△草花も好く出來た、蜘蛛も能く巢を張つた、蟬も澤山生れた、雀も多くなつた、今年の秋は豐饒に相違ない。

△諒闇中で、避暑旅行に出かけるものゝ少いのは然もあることである。

△本誌にも折々執筆する佐々木好母君が、萬朝の選に當つて、日本海沿岸を旅行してゐる。紀行文には從來見ざる新しみがあつて面白い。

#「雜報」

△今や六千餘萬の同胞は　大行天皇の喪に服し普天の下、率土の濱、大行天皇の崩御を悼み奉らざるものはない。

△七月下旬、天皇御重態の報、一度全國に傳はるや國民を擧げて御平癒を祈りしも其甲斐なく御上天あらせられて以來、上は宮中の御混雜は申すも恐れ多きことながら、今上陛下の御踐祚改元のこと、引つゞいては大喪の御ことなど、急湍激流の勢ひで、下萬民に至るまで、ひたすら恐懼し、謹愼するうちにも、それからそれにと移り行く現在の事象は、眼まぐろしいばかりである。

△二重橋畔、國民至誠の發露は、洵に自然の現象で、吾が日本國民の精神は斯る場合にも能く擧國一致を現はしてゐる、世界の人々をして健羨せしむるのは實に此精神の外にない。

△東京市中で夜半に號外の配られたことは殆ど空前であらう。大行天皇の崩御は午前零時四十三分で一時頃には發表になり、新聞社は直ちに之を號外として、全市に配つたから、何んな遠い町でも未だ夜の中に號外の聲に起されたのであつた。

△喪章は崩御當日逸早く附けたものもあつたが初めの間よりも、四五日經てからの方がだんだん多く附け出した、女子よりも男子の方が早かつた、女子は未だ手ぬるい處があるからであらう。

△赤い着物や帶を、はなぐ〴〵しく見せて、海水浴に出かけたり、避暑遊散に出かけたりする若い女も少かつた、何となく一帶の調子がじみになつた、偶に派手な服裝でもしてゐると甚しく眼に立つ、當然なことである。

△市内到る處に喪章を賣るやうになつた、安いのは一つ一錢からある、高いのは一圓のもあるやうだ。

△喪中といふので、派手なことはさしひかえるが黒いものでも意氣な意匠をしたり、高價なリボンをわざ〳〵好んでつけたりする女もあるやうだが、それでは謹愼の意を表することにならない。流行と同一視するのはけしからぬ。

△御大葬は本月十三日の夜に行はれ、十五日に終る、此三日間の全國々民は一層の謹愼を要すると共に、御大葬拜觀者の爲に東京及び京都附近は空前の群集を見るであらう。

△御大葬の行列は、凡て古式に由り、崇嚴例ふるにものなからうと思ふ。夜であるだけ一層神々しい感じはするであらうが、婦人や子供は行列を拜觀せぬまでも傳へ聞いて一代の御大禮を知るであらう。

△御道筋は松明を以て照らされると同時に、無數の電燈を輝かせるといふから、御行列は明かに拜觀するの榮を得るであらう。

△青山の葬場殿は御式後も當分の間は其まゝに保存すると云ふことであるから、式後拜觀に出かける人も多からう。

△御大葬の拜觀には、十字街とか、坂とか、濠端とかは危險の恐れがある、却つて民家の前とか、普通の町の兩側とかに立つて拜觀する方が安全であらう。

△地方から來る多數の拜觀者には、東京人は親切に迎へねばならぬ、東京の樣子を知らぬ地方人に、混雜に乘じて不親切な行爲をするのはよろしくないことだ。

△伏見桃山の御陵は太閤秀吉公の桃山御殿の跡で堀れば黄金も瓦も出るさうだ、其地展望絶佳まことに大行天皇のとこしへに神鎭まり在すべき墓地である。

△此度の御大葬は東京より京都に渡り、日は三日を閲して、誠に一國の大葬である。

○先帝陛下御聖像頒布　日本橋區本町一丁目博文館代理部博通社にては今回國民道德に資せん目的にて現代美術彫刻界の耆宿帝室技藝員東京美術學校勅任教授高村光雲氏が齋戒沐浴至誠謹力し奉りし明治大皇帝の大元帥御正裝の御胸像を八咫の御神鏡形に割拔き御器を垂れ勾玉型の金具を付たゞ神々しき二重扉桐材白木御筺に安置し奉り特に警視廳を經て内務省を通じ御伺ひ奉り御許しを仰ぎ實費を以て頒布する由なるが御像の御丈は御寶算の六十一に因みて六寸一分又御胸より上を御治世の四十五年に因みて四寸五分とし青銅色合成金御像は金五圓青銅御像は金二十五圓純銀御像は金二百圓を以て特志家に頒つ可く又純金御像木彫御像石膏御像も製作す可く御申越に際して各其價格の三分の一以上拂込まるゝを要す可く希望者は早く申込まれざれば前約もあり且申込者非常に多ければ自然送達遲延すべき恐れありと。

九月

さしも炎威を振つた夏も去つて、庭の秋草に音づるゝ朝夕の風も、秋が來たかとばかり驚かされるほど涼しく、月の色、露の光、凡ての自然が反省し、沈着し淋しいうちに考へ深いやうな秋が來るのです。秋と云ふ時候は殊に日本の和歌俳句などを好んで作つた人の思想と冥合するところがあつて、舊い新しいを別問題として秋の和歌、秋の俳句には、愿誘はれるやうな自然の感情を完全に含んだ作が多いのです。秋雨降る夜になく蟲のこゑぐ、野分のあしたに散る秋草の花のいろく、ものゝあはれがしみじみと感じられるのは秋です秋には一面透き徹るやうな凛然たる氣象と、一面にはよわくしい悲みの底に沈んでゆくやうな調子と、二つの心持が、其日々々の光線や、濕度や、晴雨の工合で起てゆきます、而して槪して秋はものゝあはれといふことを感じさせるにちがひありません。

秋は想ふ時、作る時、歌ふ時で、而してしみじみと我國の自然を味はふ時です。

日曜　一日　八日　十五日　二十二日　二十九日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回(一月、四月、七月、十月)定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は斷じて受付ず)に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は每月十五日到着を以て愿に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』圖畫『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す(但し短きものは此限にりあらず)▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇 定價 每月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◎特別號一冊金參拾錢　送料貳錢

◎普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘

◎半年分(特別二冊 普通四冊)　前金壹圓九錢　送料拾錢

◎壹年分(特別四冊 普通八冊)　前金貳圓八錢　送料貳拾錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增しのこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等割引　一頁貳拾五圓　半頁(廿四字三十二行)

貳等割引　一頁貳拾圓　半頁拾圓

參等割引　一頁拾五圓　一行(一行ト數字二十四字詰)四拾錢

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂

其他いづれの取次店にても取扱申候

大正元年八月二十五日印刷納本

大正元年九月一日第八年第九號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎

印刷人　松本魁

印刷所　東京國文社

發行所　女子文壇社

東京市京橋區大鋸町十、十一番地

電話京橋六〇七番　振替東京壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂　東海堂、良明堂、大阪盛文館外

●現代國民が子孫に傳ふべき神聖の至寶!!

帝室技藝員東京美術學校勅任教授 正五位高村光雲先生が齋戒沐浴、謹刀奉れる絕大の傑作にて特に其筋の御許を仰ぎ實費を以て頒つ

先帝聖像

大元帥御胸像
御丈六寸一分

●青銅色合成金御像 金五圓
●青銅御像 金廿五圓
●純銀御像 金貳百圓
（御筐共）

▲送達費 内地五十錢臺樺朝淸各八十

▲御聖像安置御筐 八咫の御神鏡型刳抜き御幕を垂れ二重扉 勾玉型 金具付の神々しき桐材白木御筐に奉安置

▲申込の畧規 實費の三分の一以上御拂込の事御送達は御申込の順に依る

▲頒布趣意書 御申越次第贈呈仕候

●聖德を仰ぎ奉り、前約過大に付早く申込を乞ふ、乍遺憾遲延の恐あり

頒布元
博文館代理部
博通社
東京日本橋區本町一丁目
電話本局六百十四番
振替口座東京五十番

●博通社の特賣品は愛讀者の便を計り女子文壇社代理部にても御取次可仕候●

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇 普通號 定價金拾五錢 郵稅壹錢五厘